

## 春潮

また僕の戀愛談！と言ふと、何だかかう非常に浮薄のやうに聞えるけれど、青春の暖かい血が全脈に充ち渡つて居る頃には、何んでも戀愛でなければ夜も日も明けぬので、高尚に言へば精神的、露骨に言へば生理的に、我々青年の總ては、美しい眼、美しい姿、美しい髪、美しい衣、美しい肌の捕虜と爲つて居るのである。

で、僕は随分戀をした。恐らく此身位女の眼色の千變萬化を窮めたものは無からう。路上の一瞥、それでもう其女は自分に氣があるか何うかが直ぐ解るので、敢て一語を交へず、敢て雙袖を連ねず、敢て綿々、喃喃の情を交さずして、僕は充分の印象を受けもし與へもすることが出来る。であるから、倘し僕に一點なりとも女を弄するの念、人を欺くの性質があつたなら、それこそ随分人道に背き、人倫に反

したことも遣つて除け兼ねぬので、不徳漢、嫖蕩兒、浮薄男子などの難有い名稱は差詰自分の頭上に萬雷のごとく落ち懸つて來るのであらう。けれど幸ひなことには、僕は母方の性を受けて、何處かかう臆病な、正直な、潔癖の多い、物事を美しく見せ度いといふ、言はゞまア見得坊らしい處があるので、いざといふ場合に爲ると、多くは尻込をして、却つて後になつて、何故あの時に彼爲なかつた、彼うも爲たならば、幸福なる結果を得たであらうになどよく既往を思ひ出して返らぬ後悔をするのが癖。

既に後悔を爲る程であるから、それで思はしい收穫を見ることが出來ぬのかも知れぬが、僕は何うもそれ以外に何か宇宙に見えざる勢力があつて、絶えず自分の戀の邪魔を爲て居はせんかと思ふので、僕位戀の神に貴い犠牲を拂ひながら、面白い結果を得ないものは恐らく世間にも多くはあるまいと思ふ。

虚言と思ふなら、僕は戀愛の他に何を爲たか、僕は戀愛以上にいかなる面白い芝居をこの人生の舞臺に打つたか。それは、大學をも卒業した、高等文官試験にも及第した。人の羨む若手の參事官の群に加はつて、將來は運が好くば國家の大務にも參し得らるゝ榮達の道をも開いて置いた。けれど深夜人定つて後、靜かに自分の半生の歴史を追懐すると、戀より外に自分は何事をも爲て居らぬので、自分は戀の爲めに全く其の半生の精力を耗し盡して了つた。

寄宿舎に居た頃なども、他の學生の頻りに空理空論に走つて居る間に、自分は落葉の窓に凭り懸つて、いかに遙かにある美しい面影を思つてさまざまなる空想を畫いたであらうか。會て一度相見し少女

の、其住める所を語らずに、唯々銀杏の樹の附近に住めりと言へるに、自分は東京にありとあらゆる銀杏の古樹を遍く尋ね廻つたことなどもあるのである。否自分は到る處に美しき人の姿を見、美しき人の眼を求め、美しき人の香を嗅いだのである。さながら春の野にうかれて飛べる美しき胡蝶のごとくに。

戀、戀、戀——自分は思ふにすら堪へぬ。

けれど野は永久に春では無い。夏過ぎ、秋來つて、最早僕等の時代では無くなつた。僕等の時代は傍目も觸らず一直線に進んで居る間に何時とも知らず過ぎ去つて了つたので、僕等の唯一の粧飾なる美しい羽も、美しい姿も、最早新しい花の喜ぶ所では無い。

現にかういふ事がある。

去年の夏、僕は東北の旅行を爲て、會津の東山の温泉に泊つた。丁度、其時東京から歸省したと思はるゝ海老茶の女學生が三四人、同じ浴樓に宿して居つたが、僕はまだ一廉若い氣で、見て呉れがしの様子を爲て、色々それを誘つて見た。ところが、その中の一番美しいのが、何だかかう少し氣が有りさうな様子で、僕が障子を開ければ、屹度向ふでも顔を出し、僕が戶外へ出れば、向ふでも屹度後を趁うて戶外へ出る、これではまだ脈があると竊に心に喜んで居ると、何うです、君、それは僕に對する態度では無くつて、僕の隣の室に居る早稲田大學の生徒の色の蒼白いのと戯れて居るのであつた。

かう爲つてはもう戀もお了ひだ。

いや、戀を生命とし、戀の爲めに半生を犠牲にした僕に取つては、これは實に悲しいので、君達は笑ふかも知れぬけれど、僕には實に此上も無い絶望であるのである。

けれどそんな愚痴は繰返せば繰返すほど笑はれる種で、何の役にも立ぬから、それは好加減に此處等で切上げて、そてそろ／＼本題に入ることに爲やうか。

それは僕が大學を卒業した年で、丁度二十七歳の夏の事であつた。僕の最後の戀はもうその半年ばかり前に、全く落着を告げて居つたので、僕の爲めに戀せられ、また僕をも烈しく戀した故郷の美しい少女はその爲めに肺を病んで、利根川の沿岸にさびしい悲しい月日を送つて居た。この破戀に就いては、彼方の父母の穩かならざる處置が重なる原因を爲して居つたのは勿論であるが、僕も多少の責任を有して居らぬ事は無いので、左程烈しく戀して居るものならば、何故此方より積極的に進んで、無理にもそれを成就させないとの親しい友の勸告には一言辯解の餘地が無かつた。實際、僕は其少女を死ぬほど思つて居つたし、或時などはかの女と偕に生きるのではなくてはこの人生は全く無意味であると思つた位であるから、戀せぬの戀したのといふ段では無く、二人の間には殆ど默契といふ深い交情すら成立つて居たのであつた。それを何故父母の反對位で思ひ切つたか。何故少女の清い美しい愛情を蹂躪してつたか。

これが僕の性質だと前は言つた。

けれど流石の僕の性質も、其の夏の七月の初旬に、その少女の死を傳へられたのには愕然として胸を撲れぬ譯には行かなかつた。少女は布施町の姉婿の家に病を養つて居たが、一月程前から非常に悪くなつて、七月の五日の夜に遂に他界の人となつたとのこと。報ずる手簡は簡にして、甚だ要領を得るに苦んだが、其中に記されたる一句——今夜河舟にて遺骸を故郷に下す筈に候——を讀んで、自分の涙は自から下つた。

利根川の流、自分はそれに向つていかにかの女の事を思つたであらうか。故郷に歸る前には必ず其川を渡つて行くのであるが、蘆荻の微かにさやける音、水の靜かに流るゝ音を聞いて、自分は夢より甚しい空想に耽るのが常であつた。否、故郷の丘の上から、はる／＼と屈曲して流れる利根の大河を望んで、青春の思ひに堪へなかつたことも幾度か知れぬ。その川を、その流をかの女の遺骸を載せた舟は靜かに蘆荻の微かなる戦きと共に下るのである。

これは誰の罪と自分は聲を擧げて泣いた。自分の腑甲斐ないばかりに、自分の無節操であるばかりに、自分の性質の一部陥落して居るばかりに、自分はこの大罪を犯して自から知らなかつたのである。爾はある友人からかの少女を捨てたのが名譽心の爲めであらうと言はれたのを非常に怒つて、殆ど絶交せぬばかりに扱つたが、爾は果してそれを怒るに堪ゆる資格があるか、何うか。

其の少女の墓！

それは丁度故郷の丘の上の埋葬地の西隅にあるので、其處からは利根川の流が丸で手に取るやうに見える。僕の女郎花を手にして其墓に詣でたのは、其夏の七月の二十日の夕暮、大學を卒業して一寸と故郷に歸つたその翌日であつた。大學を卒業したのは何の爲め、世の中に成功しやうとしたのは何の爲め、皆なこの戀を完くする爲めでは無かつたか。それであるのに、今は其戀はもう此の墓！

堪らなくなつたので、自分は傍なる籬に凭り懸つた儘、聲を放つて泣いた。それにも拘らず、四邊の野はしんとして、靜まり返つて、夕照の空は漸く暗く、岸に寄する水の流も微かに、頭上の松の風は更に自分の心を悠遠なる思に誘つた。

『僕が悪い、僕の罪だ。けれど何故神は僕にこの性質を與へたのか、何故僕に確固たる意志を與へて呉れなかつたか。僕の行爲は不眞面目でも、僕の精神は決して眞面目でない事は無いのに……』

『許して呉れ！』

と言つて、僕は女郎花を其墓に手向けた。

『悲しかつたらう、口惜しかつたらう、嘸、僕を恨んだらう。けれど雪子、僕も此の通り、腑甲斐な

いこの身を罵つて居る。自家撞着して居るこの身を恨んで居る。其方が生きて居つたら——いや、大學を卒業して其方と一緒に暮すやうに爲つたなら、その嬉しさ楽しさは何んなだらうとよくこの川に向つては空想したが、今はもう駄目！』

『誰がそれを駄目に爲すつたのです！』

と墓が言つたやうに思はれたので、自分はゾツとした。

見ると、野山は既に暮れた。

唯夏の夕にのみ見らるゝといふなる薄い靄は既に名残なく四邊に棚引き渡つて、斜に孕んだ白帆の徐かに川上にのぼつて行く上に月の最初の光が微かに微かに行渡つて居る。川の筋は茫々と白いばかり、川下の人家も全く、暮色に包まれて、纔かに半鐘臺の頂きが其上に面白く顯はれ渡つて居るのが見える。

不圖新しい考が泉のやうに胸に湧いて來た。

『あゝ、もう僕の戀もこれで終り。いかに戀を爲たとて、いかに新らしい戀に觸れたからとて、この戀より深く、熱く、意味深い戀を爲し得やうとは夢にも思へぬ。かの女は少くとも清く、美しく、やさしい情を有して居た、都會の少女などの夢にも持つて居らぬ無邪氣なる性質を溢るゝばかり有して居た……それであるのに、自分は此の無邪氣なる貴い性質を少しく物足らぬやうに思ひ、却りて都少女の浮

華な處を面白いやうに思つたのは大なる錯誤であるのを今思ひ當つた』

『けれど、其少女が墓になつた今、思ひ當つたとて、それが何の幸福、何の利益』

僕は頭髪を掻き撚つた。

少時茫然として、立盡して居たが、

『あゝこれで』と再び心中に私語きながら、『これで、僕等の戀愛の時代は過ぎ去つたのだ。我々はこれから大人にならんければならん。人生は戀愛ばかりでは無い。大に働かんければならんことは幾許もある。我々もこれを機會に今までの態度を改めて、大に眞面目に爲るやうに爲やう。今までの苦痛は青年の苦痛、今までの煩悶は青年の煩悶。潔よく墓に別れやう。そしてこの可憐なる少女の戀は一生自分の記憶から忘れぬやうにしやう。左様だ、もう戀愛とは別れだ！』

かう心の中に絶叫すると、何だか胸が空いたやう、今までの罪が消滅したやう、否、更に新しい希望が簾々と集つて来るやうに覺えられて、自分は猶も立盡して居た。

小さい墓に向けた女郎花の花が少しく明かに見え出したのは不思議と思つて見返ると、月は既に對岸の黒い森の上から、きら／＼と美しい金波を川の中に湧せながら、此方の墓地一面に明かなる光を放つて居る。何處からとも無く、棹歌の聲が冴えた調子で聞え出して、涼しい風も少しは出て來た。聽て黒い小さい墓の影に別れた。

一時間ほど後、自分は家兄の家の裏の花園を逍遙して居た。夕暮の靄はすっかり晴れて、月の美しさは晝の如く、空は一點の雲翳もなく澄み渡り、西洋種の草花の得も言はれぬ烈しい香はそこはかとなく戀に別れた人の心をときめかせて居た。自分は榻に身を凭せながら、半は樹の蔭、半は月の光の中に轉た心を漂はせて居ると、不圖、隣の木戸は、すうと向うから音なく明いて、其處に顯はれた白い姿！隣の娘といふことがすぐ解つた。

『定雄さん、一人きり』

と艶めいた低い聲。

『え』

折が悪いと思ひながら、詮方なく。

娘は結立の島田に白地の浴衣をすらりと着て、帯は夜だからよく解らぬが多分牡丹色の燃え立つやうなのを緊めて、くつきりと夜の色を隈取るばかりの白い顔。

『昨日、御歸なすつたつて……學校も首尾よく御卒業なすつたつてね、お目出度いのね』

『イヤ……』

『父も喜んで居ましたわ』

自分がかう言はれると甚だ不味い。この隣の父親には、幼い頃から非常に世話に爲つて、いざと言ふ

時に、その意に背くことを敢てしたので、實は歸つて來てもまだ顔を出さぬのである。

『イヤ……父様には種々御世話になつて置きながら』と自分は止むを得ず、『まだ、歸つてもお宅にも上らるので、甚だ濟まんと思つて居るのです。いづれ、明日にも……』

『いゝえ、そんな事は……』

少時、沈黙。

娘は急に思ひ出したやうに、

『川上の雪さんも遂々歿くなつてね』

『左様だつて……』

『定雄さん、左様だつては酷いわ。御墓參はまだ爲さらなのでせう』

『いゝえ、先程一寸行つて來ました』

娘は更に勇を鼓したる如く、

『本當に御墓參位爲て上げなければ貴郎罪よ。死ぬまで貴郎の事を思つて、何うか今一度逢ひ度い逢ひ度ひと言ひながら呼吸を引取つたつて言ひますよ。山田のお靜さんが臨終まで其處に附いて居た相ですが、其夜、遅く河舟で布施から死骸を持つて來る時なんぞ、それは悲しかつたつて泣いてました』

『何故、貴郎結婚なさらんでしたの？』

と百尺竿頭一步を進められたのには、自分ははたと困つた。

娘は快活な性質であるが、今まで自分に向つてこれほど斷乎たる明晰はつきりしたる言葉を用ゐた事は無い。返事しかねて自分は黙つて居ると、

『本當に定雄さんは酷い！』と愈々短兵急に、『私だつて、左様だわ。定雄さんが好いやうな事を言つて居らつしやるから、一時はそれを本當にして、嬉しい！と心から思つた事もありますのに、いざと言ふ場合に爲つて、……私は本當に泣きましたわ』

『そんな事は……』

『何うでも好いと仰しやるの？』

『いや、左様ぢや無いですけど、こればかりは縁ですから！縁て言へば、御養子が極つたつて……』

と思はず反抗の態度を示すと、

『え、極りましたのよ』と頗る平氣なものには、自分は再び驚かされた。

『父も定雄さんがお斷りなすつたものですから、非常に力を落して』と言葉は稍々穩かになつたが、急に、

『定雄さん……』

答へるのも待たず、

『私は悲しくつて、……定雄さん、何うしても駄目なの』

突如、自分は其のしどけなく柔かい娘の體の海の波のやうに自分の身の上に倒れ懸るのを覺えた。は  
ツと思ふと、何時か娘の白い腕は自分の體に蛇のやうに絡み着いて、其の眼からは涙が瀧津瀬のやうに  
溢れ落ちる。

自分は聲を立てるには立てられず、其腕を離さうにも離されず、少時はじつとしてその爲るまゝに任  
せて置いた。月の光は愈々明かに、樹の影は益々暗く、西洋種の草花の烈しい薫は更に無限の煩悶を人  
に與へて、宛然一幅戀愛の畫圖。

少時すると、娘は涙の顔を自分の顔に押當るばかりにして、

『定雄さん……後生だわ！』

と艶なる低い聲音。

自分は猶ほ沈黙して身動きをも爲ない。

『定雄さん！』

猶、黙。

『定雄さん、返事位して下さつても好いわ』

かう言つて娘は腕を離した。

『だって、餘り酷いから！』

『酷かつたら、勘忍して頂戴。私ア、』と涙を拭いながら、『今度の養子を持たなけりやならないと思ふ  
と、厭で、厭で、いつそ死んで了はうと思ふ位ですもの』

『何處から來るのです？』

『何處からツて、……滑川の、醤油屋の子息で、慶應義塾を卒業した——』

『もう見合を爲たんですか』

『エ』

と言つたが、更に眞面目な調子で、『そんな事は何うでも好いから、定雄さん、本當に今言つた事聞い  
て下さつて？』

自分はしたゝか困つたのである。自分のかの少女にも別れた身、否、一時間前に再び戀愛には關係せ  
ずに、大に人生と戦はうと決心した身。ことに、隣の娘の養子談は既に結納の取かはせまで済んで居る  
と聞いて居るので、これは嚴かに宥めるより外に手段なしと、

『愛子さん、』と眞面目に、『それ程、僕を思つて下さるのは實に難有い、僕は男の身としても其の情愛

に絆されて、其の言葉に従はんければならんだ。けれど一緒になるには、縁といふものが無くてはならん。二人には縁が無い！」

『縁が無い！』

と娘はまた泣出した。

『私と愛子さんとは昔からの友達で、七八歳の頃から、一緒に學校にも行き、一緒にまゝ事を爲た間柄。夫婦にならなくとも、兄妹としてお互に力に爲り合はうと思つて……』

『もう解りました』

と言つたが、其儘脱兎のごとき勢で、隣の後園の方へと走つて行つて了つた。  
不思議な娘！

自分は依然として榻に凭り懸つたまゝ、深い深い沈思へと陥つて行つた。あゝそれにしても自分は何故戀に就いてこのやうに不幸福であるのか。他人の戀は多くは圓滿に、否、一度戀を定むれば、借白髪になるまで、曾て變ることがなく、平和に穩かに一生を送つて行くのが普通であるのに、自分のは何故に烈しく戀したるものが時に覺め、又は、左程に思はなかつたものが急に戀しくなることがあるのであらうか。或る友人はこれを名けて性質の缺陷であるといひ、必要なることとして、先第一に意志の力を養へと言つて忠告して呉れた。成程左様いふところがあるかも知れぬ。けれど自分は自分の意志の力の

他人に比して甚だ乏しくないのを自信して居る。意志の力が乏しくつて、何うしてかの隣の娘のごとき烈しい戀を拒ぐことが出来やうか。或はと自分は考を一步進めて、或は自分は不幸なる戀の星の下に生れた、はかない青年であるのではあるまいか。

けれどそれよりも猶不幸福な雪子のやうなもある。と思ふと、其のやさしい顔、美しい眼、凜とした眉などがさながら眼に見ゆるやうに浮び出て、いかにしてもじつとして居るに堪へぬので、其儘兩手に顔を掩つた。何故あの時、自分の頭腦にあのやうな冷かな考が浮んだらう。何故あの時『あんな田舎者を妻にして何う爲る』といふやうな氣が差したらう。

ふと眼に見ゆるは、植物園で見た、美しい令嬢！

悪魔！ さうだ、あの悪魔の爲めに、此身は美しい珠玉を失つたのである。呪ふべきは其日、忘れもせぬ十一月十日、池には漣、庭には黄菊白菊、その間を悪魔の手と爲つたかの令嬢は、夜會に束ねた髪に鶉茶のリボンをして、絹の海老茶袴を裾長う……

見ると、月は高くなつて、樹の陰は愈小さく、娘の歸つた隣の扉の半啓いた間から、其庭の草花が隠顯見える。自分は立上つて、其扉に凭り懸つて、久しく隣の様子を窺つて居たが、何の物音も聞えぬので、其儘踵を旋らして、月光廣き野の方へ一人てく／＼と歩いて行つた。



三

二三日経つて自分は故郷を去つた。

その朝の佗しかつたこと、自分は今猶其感を忘れぬ。普通から言ふと、十年も苦んだ學生生活を脱して、これから新しい面白い實世界に入らうとするのであるから、胸には青雲の志が充滿して、如何なる大事業をも一擧手一投足の勞を言はぬばかりの希望の光明が認められなければならぬ筈であるが、自分にはそんな積極的な考へなどは少しも無く、只、過去を追懷して、無限の悔恨に耽けるのみであつた。自分は發足際に酒を酌んで、そして門前に待たせて置いた車に乗つたが、故郷の人家を離れて、松原の疎らな路をがたぐと高原の方へと登つて行く頃から、少しづつ酔が發して、頭腦がかう尋常ならぬ衝動を受けて來ると、身も世も無い程に悲しく佗しく、天地もわが世も全く冬枯の、何も彼も枯れ盡し萎れ盡して、些の色彩をも留めぬとしか何うしても思はれなかつた。

『夢………夢』

と自分は絶叫した。『もう、我々青春の夢は永久に去つて了つた。美しい花も芳ばしい香ももう我々の世には留つては居らぬのだ。我々は今迄の青年の苦悶、青年の煩悶を脱して、これからは更に新しい大人としての苦悶を續けなければならぬのである。』

大人としての苦悶！ それは果して如何なるものであらうか。其處には色彩も無ければ、芳香もなく、唯々人生の大鍋の中に煮られたる芋の子の如く、徒らに輾轉反側して以て此世を送るのではあるまいか。多くの大人の顔には無意義、無主義、無理想といふ字が書かれてあつて、しかも渠等はこれが人生だ！ と言つて居る。あゝ悲しいのは、その美しい夕雲の彩ある色は消えて、月無く星無き夕闇の空の名残なくわが世を包まうとしつゝあることだ。

それにしても其の自分の夕雲の彩は實に美しかつた。多くの人の雲多く水蒸氣多く、徒らにその髣髴を留むるばかりなのに引かへて、自分の、秋の晴れた日の、彩ある雲の多い、靜かな穩かな、それは實に美しい夕暮の光であつた。その追懷——さうだ、その追懷ばかりでも、自分は猶樂しい一生を送ることが出来る。

もう暮れても好い！』

今更に頬を傳ふのは數滴の涙！

車上三里の道、其處には榎の古樹の傍に祀れる小さな祠、三四十軒ばかり連つた茅屋柴門、竹藪の蔭に小さい沼が顯れたかと思ふと、再び路は雜木林の中に通じて、其盡きたる處に濶々と見渡される利根の流、其下には風情ある渡頭、老船頭、棹歌の聲……このさまじくなる風物に和して、自分はいかに深く過去將來の想像に耽つたであらうか。最後に自分は思つた。さうだ、これから大人の苦悶の第一歩と

して、一足飛に高等文官試験を受ける準備をせなければならん、それには、友人も澤山居る鹽原温泉に行つて、この秋の末まで勉強するのが一番好い。——さうだ、それが好いと再び思つた。

路傍の小さき停車場、切符賣口の戸が明いて、客は既に多く埒外に出て居るのに驚いて、慌て、切符を買つて、其處へと飛込むと、引違ひに轟然地を動かして來る汽車！

あたふたと飛乗る二等列車、腰を掛くるや否、すぐ眼に附いたのは、紅なる帶揚、黒い髪、白い顔、美しい眼、見事に出來た島田鬻——見よ、其處に、自分と一室を隔て、相對して、これ程の美しきは！と思はるゝ程の美人が居るではないか。

年は十七八、何方かと言へば瘦削の、體は細りして、眉の濃さ、髪の黒さ、眼の美しさ、肌の白さ——自分は故郷から東京に往來する毎に、この地方の美しき人の姿に憧れんが爲め、貧しき學生の身なるにも係らず、常に青切符を買ふのを常として居るが、しかもこれ程の美しいのに今迄會て邂逅した事は無いのである。

この佗しき悲しき胸に何たる反映コントラスト！と思つたが、しかも自分の胸は甚しく躍つて、飽かず其方のみ見詰めらるゝのであつた。加之、仔細に見來ると、其の一室は其の少女の父、母、兄、妹と思はるゝ人によつて占められて居るので、父なる人の十字髻はやさしく、母なる人の笑顔は懐しく、兄は商業學校を卒業して銀行會社員でもあらうかと思はるゝハイカラ式、妹は束髪に紫色のリボンをして、絶えず

母、姉に向つてさまざまの質問やら説明やらを試みて居る。何たる美しき一家の團樂、否、この團樂にかの姉嬢の美色は何たる光彩！

## 四

一週間の後には、自分は野州鹽原温泉に行つて居た。

鹽原は自分には其時が始めてであつたが、自分は鹽原の景色に對して何んなに意想外に思つたであらうか。自分は鹽原をそんな好い處とは少しも思はぬ。何うせ萬山の中であるから、青臭い、幽鬱な、陰氣な、普通の山村に唯温泉が湧いて居るばかりと思つたのに、この景色は！この山水は！この涼しさは！と何れも驚かるゝものばかりで、自分には此上なく氣に入つて了つた。殊に、交通が不便で、坊主臭い湯婆が、石のやうな豆腐か、でなければ生鰹の堅いのか、牛肉の硬いのかを食はせらるゝ事と、したゝか恐を爲して居たのに、來て見ると、吃驚するやうな新鮮な鰹の生身、箒川には鮎こそ上らぬが、山目、岩魚などの今釣つたばかりといふ潑刺たる奴が朝夕の膳に上つて、上戸の咽喉を満足させる下りの美釀もあれば、甘黨の舌をうれしからせる土地特有の松風といふ饅頭もあつて、何一つ不足ない都會の生活。ことに、露西亞卷きの紙卷烟草の東京の本郷邊で買つたのより數等すぐれて旨いのがあ

これと言ふのも、避暑に來る客種に好いのが多いからで、貴族も來る、大臣も來る、顯官も來る、紳士も來る、紳商も來る、政治家も來る、新聞記者も來る、軍人も來る、令夫人方も來る、令嬢も來る、乃至は學生より女學生、藝妓より酌婦に至るまで、七、八、九と夏三月の賑かさは、それは山中に住める民の膽を冷し、『えらい、賑かな事かや、丸で、此處さア、來ると、別世界のやうぢや』と炭を負つて下つて來る若い男、女共が眼を丸くして驚いて居るのを幾度か見た。

夕暮から散歩に出懸けると、それがまた非常な特色。溪流の雪を噴き沫を飛ばして居る傍に思ひも懸けぬ海老茶袴が居て、細い山間の小徑から今結婚したばかりといふ若い二人連のホネームーンが出て來るばかりならまだ好いが、鬚面のだらりと間の抜けた縮緬の三尺帯が、婀娜な東京藝妓を引張つて、『あれ、そんな方に行つては恐くつてよ』などとの黄ろい聲を出させるのもあれば、平服を着けても額の色の黒白の際立つて著いのですぐ解る軍人が何處かの令嬢らしい美しくもない女の機嫌を取つて、頻りにちやほやして居るのなどもあつて、その千變萬化は容易に口や筆には上すことの出來ない位。温泉宿のずらり並んだ其の大道を一つ隔て、低い細い路をだらりと下ると、角に追分やら、端歌やら、都々逸やら、義太夫やらの限りを盡した一箇の公浴場があつて、それから右に折れる細い小路には、先、第一に藝妓屋、料理屋、小間物屋、紙屋、續いて菓子屋、烟草屋、雜誌店、理髮店、最後の一番大きい建物は何れも去年から出來たといふ西洋料理店。

夜の賑かさは非常である。

それに愉快なのは、我々大學の同窓が非常に多く來て居ること、何處に行つても必ず知つた顔の二つや三つには邂逅さぬことは無い。まして、我々學生は何と言つても、偽り隠すやうな所は無く、厭な隠れ遊を爲やうとするものも少なく、何事もざつとくばらんの打開けた間柄であるので、其の會話は活氣があつて面白く、衝突も遣れば議論も遣る、皮肉も言へば悪口も聞くといふ有様。

着いた晩早々、路を歩いて居ると、

『佐々木、遂々遣つて來たナ』

『何うだ別嬪が見附かつたか』

『素的なのが居るぜ!』

など、口々に浴びせ懸けられたので、驚いて見返ると、文科の卒業生が一群。

『何うだ、佐々木も伴れて行かう』

と一人が言ふと、

『よし、〜』

と孰れも賛成して、其儘自分を何處へか伴れて行かうとする。

『何處に行くんだ、おい、こら!』

と自分はその説明を聞かうとすると、

『まあ、じたばたせずと、音無しく爲給へ、好い處に伴れて行くから』  
と無理遣りに自分を前に押遣つた。

他の一人が突如、

『おい、好男子、しつかりしなくつてはいかんど。すぐ惚れられたりなんかしては堪らんからナ』  
と背を軽く撲つた。

僕は詮なく黙つて跟いて行つた。

『おい』と山田といふ青年は他の群を顧みて、『あのバロンネスは中々食へんね、我々に御馳走して、  
中から候補者を見付出さうと言ふんだからナア』

『それア、君、あのマダムの才物なのは昔から有名さ。歿くなつたバロンは土木や警察事業では随分  
有名な疎腕を用ゐた人だが、あの人があのマダムには一目を置いて居つたツて言ふからね』

『左様だらう、何うも左様らしい』

『現に、あのエルダーの候補者も』と他の杉山といふハイカラは傍より口を挿れて、

『此處で散々選んだ結果、遂々あの中島新理學博士を當選させたのだからナア』

『杉山君などは何うだ』と一本突込んだ者がある。

『あの娘では謝まる』

『何アに、そんなに醜い事は無いぢやないか。ことにヤンガーの方はシエンハイトとまでは行かんが、  
十人並以上の價値は確かにある。ナア、小村』

『さうとも……それに財産も附くんだぞ、杉山』と小村と呼ばれた國史料の卒業生は言つた。

『何だ、君等は樺島男爵の邸に行かうと言ふんだね!』と僕はその會話でそれと推して、

『それなら、僕は謝まる』と逃げ出した。

樺島男爵邸のことは自分は鹽原に來る以前から聞いて知つて居つたので、其の未亡人が才物で男勝り  
で、夏にさへなると三人の令嬢を其の鹽原の別荘に伴れて行つて、大學生と言はず、軍人と言はず、盛  
に邸に招待して、娘と交際させたり、御馳走したりして、其中から卓れた當世の俊才を娘の聲に選ぶの  
を例として居るさうな。現に總領娘などは容色も十人並以下、學問もさして勝れて出來ぬのに、明治の  
理學界に非常な勢力を有して居る中島理學士（其時はまだ大學を出たばかりであつたさうな）の妻とな  
ることの出來たのは、實にその未亡人の手腕であつたとのこと。そしてその未亡人の愛想の好いと言つ  
たら、丸で總ての大學生をおのれの子息か何ぞのやうに取扱つて、更に隔てを置かぬばかりではなく、  
折々は高貴な物品などを呉れる事さへある相である。

『いら! 何故だ。何故行かんのだ』

と自分が五六歩走り出したのを追懸けて来て、突如自分の袂を押へたのは同じ法科の松木勉。

『だつて、厭だ』

『何故』

『何故ツて、婚選びの未亡人の處へなぞは、氣耻しくつて……』

『まア、好いから行つて見給へ。行かない中は皆なさう思ふ、現に僕もさう思つた一人だ。けれど逢つて見ると、中々さばけた、好い未亡人で、二三度行つて見給へ、丸で家のやうな氣が爲るから』と達つて勧める。

二の足を踏んで居ると、續いて戻つて來た二三人の同勢が厭應言はず自分を取巻いて、其儘わいわいと喧しく饒舌りながら、鹽原の町を向ふへと出た。

夜はもう月に爲つて、山から吹いて來る風の涼しさ。溪流は皆光つて、鳴つて、一步毎に變れる風景を展開せる岨路の面白さは實に譬ふるに言葉が無い。美しく金を湧せた瀬が急に樹間に隠れたと思ふと、彼様と<sup>あんな</sup>ころにあんな瀑があるかと思はるゝ匹練の姿が神女の髪を解いたと疑はるゝばかりに目眩しく輝いて、奇巖の屹と亮かなる空氣の中に黒く浮き出て居る向ふに、微かに殘雲に面影を留めた夕照の光！ 自分は思はず立留つて快哉を叫んだ。

それから暗い林の間を彼方に抜けて、鈴虫松虫の面白く啼く、晝間來ると女郎花、萩、桔梗、荊萱な

どが一面に咲亂れて丸で錦繡を敷いたやうだといふ高原の斜坂を一二町登ると、上なる一帶の平地は明かに鹽原數郷の谷を見下して、箒川の溪流の屈曲また屈曲、その曲れる處に危橋を架し、その直ぐなる邊に人家の燈火を着け、月に光りながら、遠くく、那須野の彼方に流れ行く光景と言つたら……

其平地に數箇の洋館。

門から芝生の滑かな間を眞直に、客間らしい窓には電燈の光が晴がましく輝き渡つて、ピアノの人を魅するやうな巧みな調は、靜かな山の空氣に一種の名狀すべからざる幽妙なる響を傳へて居た。

『誰だえ、奏してるのは？』

と自分は問うた。

『ヤンガーさ。君は、ヤンガーのピアノの名手だといふのをまだ知らんのか』

『知らん』

『それは好男子にも似合はず話せんね。音樂學校の秋の會では、先生、いつでもピアノのチャンピオンだ』

『姉様は』

『エルダーは西洋のミウジックは遣らんやうだ。けれど琴に懸けては、山勢の二等弟子だとか言つた』

聴くと、成程音楽學校のチャンピオン丈あつて、その調子の巧みなことと言つたら、低い、高い、強い、和かな響が思ふまゝにその指端から迸つて、それが或は正しく、或は亂れ、或は絶え、或は續き、實に山麿もこれが爲めに音を絶ち、溪流もこれが爲めに流を停めるかと疑はるゝばかりの偕調。

十分以後には自分等は既にその電燈の晴れがましい一室の中にと入つて居た。男爵夫人は年の頃五十ばかり、肥肉の、莞爾と愛嬌ある、一寸見ては何處にそんな手腕を持つて居るであらうと思はるゝ程のやさしい老婦であるが、成程身分に關らぬ開けた人で、我々が訪問すると、非常にそれを喜んで『今夜は何故何誰も御出なさらんと思つて居ました』とか、『今日の暑さは格別であつたではありませんか、今日などはとても東京には居られませんか』とか、『昨日鷄頂山に御あがりになると言つて居らした方があつたが御登りになつたかしらん』とか、隔てなどゝいふものは爪の垢程もなく、圓轉滑脱、多くの客を相手にして、更にそれを外さぬといふ風。

僕は片隅の椅子に身を凭せ懸けて、久しく一室の光景の反映コントラストの妙なに見惚れて居た。室の壁には數限りなき油繪やら水彩やらチヨオク畫やらが並べ懸けられて、中央にはナポレオンの石膏の半身像に電燈の光が斜に射して、暖爐の上には陶器の置物やら、花やら、花瓶やら、その美しきは眼も眩いばかり。それを背後にして、五十年の人生の辛酸を嘗めて來た一人の老貴夫人と、それを圍んで、若い血の燃えて居る四五人の學生。

何と面白い反映では無いか。

婢が林檎を山のやうに運んで來た時、

『さうく奥様に御紹介するのをすつかり忘れた』

と小村は立つて僕を指し、

『同じ夥伴で、今年法科を卒業した佐々木定雄といふ男です。これから度々上ります相で』

と紹介すると、僕の挨拶するのも待たず、

『おや、左様ですか、妾は又ちつとも氣が着きませんで……佐々木さん、それではあの』少時何か考

へて、『それでは、政治科を今年一番で御卒業なすつた？』

『え、左様です、中々秀才ですよ』

と誰れとも知らず言つた者がある。

自分はしたゝか惑はざるを得なかつた。かの女は五十何歳の老婦人で、しかも大學卒業生の成績までを語んじて居るとは！ 眉毛に唾をつけなければならぬ。

『それでは佐々木さんは』とすぐ言葉を續いで、『杉江などをよく御存じでせう』

『杉江君、よく知つてます』

『遠い親戚になつて居るものですから、色々喧しく申すのですけれど、あの通りの懶惰者で、學問の

方は始終御留守に爲つて、本當に仕方が無いのですよ』

『いゝえ、杉江君などは……』

『中々出来が好いのですから』とか『勉強家ですから』とか言はうとしたが、自分はそれを嚙殺してつた。杉江男爵の子息忠一の新橋通ひは随分有名な話である。

『本當に困つて了ふのですよ、何でも此頃は長唄とかを稽古して居るさうですがね。あんな風では、何時卒業が出来るか、解つたものでは無いですから』

『此方に御出には爲りませんか』

『ところが、呆れるのですよ。妾は此方に參る前に、一寸家に來ましたから、何うです、これから鹽原へ一緒に参りませんかと申しますと、東京はこれ程結構な處なのに、何も好き好んで、鹽原なんぞの青臭い山の中に入らなくつても好いと申すのですよ』

『青臭いは面白い』と言つた者がある。

『屹度あの人のやうな意氣な人には、山の中の景色など言ふものは解らないのでせう』  
ふと立上つて、窓から首を出し、

『嬢や』

と二聲三聲。

『唯、何ですの』  
と微かな返答。

『皆様が御出なすつたのに……御浚ひが濟んだら、此方に御出なさいな……』  
返事は無かつたが、それで通じたと見えて、二三分経つと、廊下に軽い足音がして、横の扉が徐かに開いた。

五

『何うだ、佐々木』

かう同窓生松木勉から尋ねられたのは、其夜遅く別荘から歸つて來る途中で、自分の胸はいろ／＼なる思想を以て充されてゐた。あれから、自分等は何んなに勝手なことを饒舌つて、どんなに勝手なことを振舞つて、どんなに面白く遊び戯れたであらうか。音楽、繪畫、文學の話は勿論、平談雑話に至るまで、自分は何時にも似合はず打解けて、十年の友にも話さぬやうな事までも遠慮なく饒舌つて、殆ど同學生をして舌を巻き、膽を冷させるばかりであつた。自分は前に話すのを忘れたが、自分には一種の性質があるので、自分は其席の中心になる迄には、成べく言葉を慎しみ、態度を穩かにし、平凡従順な青年のやうな顔をして、じつと沈黙して居るけれど、一度自分の説が容れられ、自分の談話が一場の人々

に多少の勢力を有することを自覺し始めると、舌には魔の神でも乗り移つたやうに俄かに活氣を添へて來て、それがまた非常の感化を聽者に與へるのが殆ど例に爲つて居る。

今夜も自分は少なからざる感化を人に與へた積りである。

松木から問はれて、自分は、

『中々豪い女だ』

『いや、娘のことだ』

『娘か』と自分は笑つて、『娘はお話にも何にも爲らん。あれぢや杉山ぢや無いが、僕も謝まる』

『それでも三人の中でヤンガーが一番シエンハイトなんだ。中島の妻になつたのなどそれは酷い』

『それに、夫人も一番愛して、何でもあの末のに養子を爲るといふ話だ』

と他の一人が言つた。

末の娘、あれなら成程少しは踏めると自分は思った。顔は何方かと言へば扁平たく、大きい方で、鼻などの位置恰好も甚だ好ましくはないが、眼のすぐれて美しいのと、眉、頬の四邊に言ふにはあれぬ愛嬌があるのとで、確かに十人並以上の價値はある。それにあの態度の活潑さ！ 今時の女にはあのやうなのは尠い。ことに如才の無い處やら、物に臆せぬところなどは正しく母親の系統を受け續いだと見えて、その會話などにもまことに圓轉滑脱の妙があつて、深窓に養はれた貴族の少女と言つたやうな所は

少しも見えぬ。

不圖自分は其娘の自分を一睜した眼色を思出した。

『今夜は佐々木に大當りを遣られて了つた』

と小村が不圖言つた。

『何故』

『何故も無いぢや無いか。未亡人は随分快活だが、今夜位、話につれて饒舌つたことは無い』

『僕はまた、佐々木あの位大膽に饒舌つたの聞いたのも今夜始めてだ』

とこれは杉山。

『今度行くと、先夜伴れて來た佐々木といふ男は、餘り無作法で、禮儀も何も知らんから、もう伴れて來て呉れては困ると斷はられる位が落だらう』

と自分は笑つた。

『ところが、中々。今に見給へ、佐々木さんでなくつては面白くないツて言ふやうなことになるから』

『現に、ヤンガーと挨拶した時などは餘程怪しかつたぜ。向ふは活潑でも流石は妙齡の處女だから、少し含羞んで會釋すると、君は、眞面目に澄まして、充分この好男子を見て呉れと言つたやうな様子



は、随分面白いコントラストだった』

『澤山言ひ給へ』

『言ふとも……。少し冷かした位では、中々埋らんぜ、ナア長谷川。折角始めて伴れて行つて遣つたのに、我々は隅に押込めの、一人で舞臺を荒すなどは怪しからんからナア』

『意氣地の無い奴共だ』と自分は態と上から出て、『自分達の無能は棚に上げて置いて、他人の成功を羨むとは、實に話にも何にも爲らん。貴様達があの古狸に邂逅して、化されずに歸ることを得たのは、誰の力だと思ふ。僕が居なければ、今時分は……』

『化されて、小便溜にでも入れられて居るといふのか。これは面白い』  
と皆笑つた。

兎に角自分に取つて其夜は非常に愉快であつたので、自分はある感化を人に與へもし、また人にも妬まれる一種の成功を爲たと思ふと、何だか胸が躍るやうな心地がして、闇黒なる人生に俄かに一道の光明を得たやうに感じられる。さうかと言つて、あの娘が自分の氣に入つたかと言へば、さうでは無い、決して左様ではない。沉んや、それを何う彼うしやうとする野心などは露ほども無いのであるが……何故か、自分は嬉しい、何故か自分は楽しい。

橋の袂で友に別れて、猶久しく月光美しき山水の間を彼方此方と逍遙して居た。一人になると、十年

來の種々の經驗が鎧に立つ矢の蝟毛の如く、簇々と集つて來るのが何時もの例で、今夜の令嬢の愛嬌に富んで居る事から始めて、七八年前青山の練兵場で見た美しい紫の羽織を着た少女、大學の寄宿室の傍の大路でゆくりなく邂逅して、そしてそれから一年程経つた後利根川通ひの汽船で一緒になつた女學生、それからそれへと思ひ廻すと、自分は随分いろ／＼な女を見て、随分さまざまの感を起した。自分のやうな人間は戀に生れ、戀に生活し、戀に死ねば、もうそれで充分なる人生を形成したので、自分には或は戀愛そのものが一生の事業であるかも知れん……と獨語した。

と思ふと、一方からそれとは丸で反対な考が暴風雨のやうな烈しい力で突進して來る。何だ、汝は一日自分の胸に堅く誓つたのを忘れたのか。汝は故郷の利根川畔の小さい墓を心に守つて、これから全く戀愛を捨て、大人としての苦悶と相戦はなければならんと言つたのを忘れて了つたのか。

事業は何うした？ 生活は何うした？

けれどこの戀の力、この盲目な本能の力、これが猶燃えた時には果して如何する？ 事業もある、生活もある、それは知つて居る。けれどそのやうな間接なもので押ゆることの出來ぬほどの本能の力が燃え上つた時には果して如何する？

『戀、戀、戀——』

と自分は絶叫した。

何たる愉快な夜であつたらう。月は逾明かに、山は逾黒く、水は閃々と到る處に金を湧かせて、遠く絶壁の向ふに鳴り渡る溪流の音は笛の如く、對岸の温泉場からは、調子外れの三味の音やら、追分を歌ふ長い節やら、何處かの別荘で弾く琴の音やらが雜然として聞えて來て、顧ると、旅店の二階三階には晴れがましい電燈の光！ 其處には密月の楽しい一對の夫婦も居やう。戀人戀はれ人の睦ましい交情もあらう。青雲の志とどめがたく深夜燭を乗つて書籍に對する青年もあらう。また、自分のやうに戀に煩悶して烈しい思に焼かれて居る若者もあらう。實に、この一場の温泉場、これが則ち活きたる人生である。

春の潮のいや高く

みだるゝ戀のわが心

岩ほ岩山絶壁の

こゝしく立てる陸をすら

唯大波と打寄する……

と、ある新體詩人の詩を低聲に吟じた。

留め難いうかれ心！ 此上に羈絆を放つてはと思つたので、其儘思返して靜かに町の方へと踵を旋らした。と、街の入口の角に、小さい一軒の麥酒ホールがあつて、電燈の美しい光が一群の客の賑はしい

光景を照して居るので、自分も遂ひ入る氣になつて、白粉をべたりと塗つた、東下りの、色の生白い若い女の手から、泡立つビールを一杯酌んで貰つたが、それを一息に見事に仰ると、直ちに懷中の蝦蟇口から、十錢銀貨を一箇投り出して、急いで其處を向ふに出た。

二三軒行つて自分ははッとした。

はッとしたのは無理か。右側に、鹽原第一の唐物店があつて、其の廣い店には幾燭の電燈が白晝のごとく照り輝いて、ナイフ、鉛筆、肩懸け、リボン、絹汗巾、ホワイトシャツ、襟飾、夫婦扣鈕などの燦爛として光を放つて居る前に、二十七八歳の白地の浴衣に縮緬の三尺帯をした一人の鬚の男に伴はれて、かの美人、二三日前汽車の中で飽かず見入つたかの美人が、その撫肩のしほらしい處に美しい電燈の光を浴びながら、餘念なく何か買物を爲て居るではないか。

『其男は？』

と思つた自分の胸には今迄に覺えたことの無い程の嫉妬の情が烈しく起つた。

『確かに、あの時同車した兄では無い、確かに無い』

と横顔を今一度見て、

『あの兄にも鬚はあつたが、あんな野暮な、あんな汚い鬚では無い。すると……』

天をも焦さうとする嫉妬の情が烈しく烈しく起つて來て、自分は居ても立つても居られないやうな心

地。其女は汽車の中で、取手から東京まで美しい、美しいと思詰めに見入つたばかり、何一つ口を聞いたでも無く、何一つ性質に觸れたでも無いのに、何うしてこんな烈しい嫉妬の情が起つたかと自からも疑はれる位。

見ると、女は背を丸くして、間拔面の番頭の種々と其處に並べ立てた櫛、髪挿らしいものを彼れか是れかと見て居るが、其の横顔の美しさと言つたら、浴後の薄化粧に蒼味を帯びた電燈の光が添はつて、何うしてもこんな美人がこの世の中に又とあらうかと思はれるばかりである。男は傍から何とも聞取れぬ口ををり／＼挿んで、或は笑つたり、或は世辭を言つたり、或は女の顔にその顔が觸れはせぬかと思はるゝばかりに近く身を寄せたりして、飽かず精神が其女の方へあくがるゝといふやうな甘垂るい態度を爲て居るので、自分は堪らなくなつて、自から心を叱して、其のまゝ五六歩向ふに離れた。

『何だ、貴様は！ 主ある女に向つて、そんな卑しい考を起すとは。それでも男兒か』  
と心の中のある聲が烈しく自分を罵つた。

けれど今は、そんな聲位で叱られて引込んで居る時では無かつた。五六歩引返しては見たが、其女が何うしても氣に懸る、其の絶世の佳人を……あの男がと思ふと、簇々と氣が變になつて來て、いかにしても其店頭を離れることが出来ぬ。

處がその買物が中々長い。彼れに仕やうか、是に仕やうかと彼方此方を引繰返して、容易に其選擇が極りさうにも無いので、果ては番頭も呆れたといふやうな大きな欠を爲て、不用らしいものを徐々箱に仕舞ひ懸る。と、漸く少しく氣が附いたと見えて、やがて選擇が極まつたらしく、男が紙入から紙幣を出して番頭に渡すと、番頭はそれを受け取つて、銅貨銀貨打交りの釣錢をぢや／＼させながら、難有う御座いの頭を五六度も下ける——二人は月光の中に出た。  
自分は五間程離れて後を跟けた。

夜だからよく解らぬが、女は袖の派手な單衣を着て、その高く高尙に結んだ帯と、すらりとした瘦削の姿と、例の美しい髪の毛田髻とが、男の五分刈の頭と、怒らした肩と、裾短かに着流した裕衣と相並んで、黒々と睦しさうに地上に其双々の影を布いて行く。

二人が橋の袂に行つた時には、自分は其傍の大岩の陰に隠れて立つて居た。

『いゝ月夜ねえ』

これは女の艶なる聲。

それには男は急には答へず、何か心中を打明くべき適當なる言葉を考へて居るらしかつたが、俄かに、『貴嬢と一緒にかういふ月を見るやうにならうとは夢にも思はなかつたです。もう、父君も許して下さつたし、約束も定めて下さつたし、少しも憂ふる處は無い！』

女は黙つて答へなかつたが、急に、

『まア、御覽なさいよ、あの奇麗なこと』

かれは對岸咫尺の處に懸つて、滿身美しく月に閃めいて居る一條の瀑を見出したのである。

『瀑ですね、成程奇麗だ』

と男は言つたが、かれは四邊のこの卓れたる自然の風景よりも、美しく千筋に流れたる湫流の閃耀よりも、晝のごとく明かに照り渡れる月よりも、更に數等、數十等賞し度く遊び度きある物を有して居るので、其の精神もその肉體も既にそのある物に向つて渾べて恍惚として居るのである。

『あれからすぐ御出なすつたですか？』

『え、あれから、一寸番町の親類に泊りましてね、弟が来るのを待つて居て、一昨日漸と參りましたの』

『私はあれからいろいろに運動して、何うかして一週間が出来んければ五日でも好いからと、大隊長、中隊長と一生懸命に頼み廻つたです。けれど、今は日露戦争だの、何だのと、非常に忙しいので、中々容易には暑中休暇が許れず、私も本當に弱つて了つたです。けれど何うしても來たい、行きたいと種々に策略を用ゐて、漸く一週間丈け祕密に休暇を貰つて來たのです』

「それは大變でしたわねえ」

『それだから軍人は厭に爲つて了ふですよ。身體が皆な縛られて居るのですから、行き度いと言つ

て、それ！ と行くことも出來ず、貴嬢のやうな……を置いて、戦争が始まれば厭だと言ふことは出來ませんからな』

『まア、厭だ、あんな事を』

と女は笑つた。

『だつて、左様ですもの、私は軍人としては戦争を渴望する、軍人には戦争でも無ければ花々しい事は一生の中に有りは爲ません。けれど貴嬢と約婚して居る時に、何故日露戦争の噂などが持上つたかと思ふです。ですから、成らうことなら、今四五年も延びて欲しい。もし止むを得なければ、冬まで待つて貰ひ度い』

『何うしてゝすの？』

『貴嬢はちやんと知つてる癖に……』

『知りませんわ』

『愈始まつたナ』と自分は思つた。

『それぢや言ひませうか』

『え』

『此人と結婚が出来んから』

と手でも握つたらしい。

『まア、厭な人！』

と女の低い聲。

自分は怪しからず烈しく胸の戦ふるのを覺えた。かの女は自分の戀人でも無ければ、自分の關係した女でも無い。否、未だ一言の會話をさへ交したことのないあかの他人。それが何うでせう、甘垂る言葉に耳にする度毎、身はかう地下にでも陥つて行くやうに烈しく戦慄して、肉體の苦痛は殆ど極點に達したかのやう。果ては一種の反抗の情さへそれに加つて、『よし、屹度、己が占領して見せる、あの絶世の美人、あれをあんな軍人の鬚面に自由にさせて何うなるものか』と獨り心中に絶叫するまでに至つた。従つて其の二人の身體の相觸れるのを恐れること甚しく、『手を握つたナ』と思ふと、全身の血が逆流するやうに脈に漲り渡つて、何うかして二人を相近かしめ度く無い、何うかして二人の間を密接するやうに爲せ度く無いと殆ど神に祈るばかり！

それにも拘らず、會話は愈々佳境に進んで行くので。

『孝さん、僕は何程貴嬢を思つて居たか、知らんでせう』

『知つてますわ』

『知らんに相違ない、僕があれ程懇望しても、父様も母様も中々承知して下されず、ある時などは私

は好いと思ふのですけれど、孝がまだねつから解りませんからとか何とか母様が言つた相ですもの』

『それは虚言だわ』

『虚言なことは些とも無い』

『ぢや、屹度母様が返事に困つて、そんな好い加減なことを言つたんでせう。私は初めつから嬉しいと思つて居ましたわ！』

『本當……』

『本當ですとも……』

『それぢや……』

と言つた切り、言葉は絶えた。

少時沈黙。

怪しい！と思つて、岩蔭から出ると、果して、二人は相擁して、熱い熱い情熱に耽つて居る爲體。

橋の上に長く曳いた黒い影は一つになつて、徒に白き月の光、溪流の行衛。自分は堪らなくなつて、足音高くその岩蔭から飛出すと、

二人の驚いた事と言つたら。

態と知らぬ顔の、愈々足音を高く、散歩客とは思はれぬばかりに急いで向ふの橋際まで行つたが、不

圖立留つて、『貴様は幾何番をして、その互ひに相語ふことを邪魔しやうとしても、二人はいかなる夜深き時をも有し、いかなるすぐれた機會をも有して居るではないか。馬鹿!』と自から罵つて見たが、堪らなくなつて、我とわが頭髮を掻き掻つた。

六

橋の袂に歸つて來た時は、もう二人の姿は見えなかつた。

『よし。かの女の此の鹽原に居ること丈けはこれで確かだ。明日から、その宿つて居る旅亭を捜して、都合によつたら、宿を變へても、この希望を達せずには置かん』

深く決心して、自分は己れの宿して居る清琴樓へと戻つて來た。清琴樓と言ふのは、この温泉でも有名な温泉宿で、二階三階の室は遠く箒川の流に臨み、内湯も他に見られぬ程の大きな清潔な浴場を備へて、下婢などの取扱も普通の旅亭とは違つて親切に、ことに、其の子息が大學の選科に居たことがあるので、大學生には一層忠實なる款待を爲るといふ噂。大學生の宿して居るものが非常に多い。

三階の南に面した、見晴らしの好い六疊、それが自分の借りた室で、入つて見ると、洋燈が明るく點いて居て、机の上には先刻讀まして出懸けたハイゼの短篇集が其儘になつて開かれてある。それを見ると、自分はすぐ思つた、先刻出て行く時と今との心の相違はどれ程であらうと。先刻は靜かな穩かなハ

イゼの短篇に讀み耽つて、窓に消えて行く夕日の影をじつと見ながら、深く獨逸の森林に生れた詩人の思想を辿つて居たが、否、これからの自分の身の行末を考へて、最早戀愛の實際には必ず觸れまい、書籍と空想だけでもこれからの半生を送る丈けの材料は充分あるなど、思つて居たが、それが五時間と經ぬ中にこんな烈しい巴渦の中に再び巻き込まれて了はうとは夢にも知らぬ。

と思ふと、友人等と連立つて、わい／＼騒ぎながら、かの樺島の別莊に行つた事や、巧なるピアノの調や、如才ない未亡人の顔や、愛嬌ある末の令嬢の姿や、自から吐いた氣焰やが歴々と忘れて居たかのやうに自分の胸に湧返る。けれど、それは何等の反響をも與へぬので、只、見ゆるは其人の顔、姿、男、月下の双影。

あの會話から押して見ると、まだ結婚して居らんのは確かである。結婚の約束は成立つて、この秋か冬には其の大禮を挙げやうとして居るのも亦確かである。男は陸軍の少尉か中尉、一週間の休暇を無理に取つて、漸く此地にかの女を追つて來たのから觀察すると、程なく別れて歸つて行くのに相違ない。その間に……（不圖、自分はあることに考へ及んだので）否、決してそんな恐はあるまい。女は弟と一緒に來て居ると言ふことを言つた。それに、二人は親から許されて、この秋まで待てば、何事も圓滿に終結を告げる幸福な身の上。そんな無理なことを遣る恐は斷じて無い。

『よし』

と自分は尠からざる希望を感じた。

其處に下婢は湯を運んで來た。火鉢を見ながら、

『何處に行つて入らしつた?』

『樺島さんの別荘』

『もう、行つて入らしつたの、早いことねえ。何うでした、中々別嬪さんでせう』

『誰が……』

『あれ、まア、誰がですつて、極まつてまさアね』

『何う極まつてる』

『いやにはぐらかすのね、嬢様が居たでせう』

『何だ、娘か、あんな別嬪は眞平だ』

『あれ、まア、酷いこと、あんな美しい御嬢様を』

『お前、見たことはあるのか』

『有りますとも、……よく御姉妹一緒に此處等を御散歩なさいますから、鹽原では誰も知らん者は有りや爲ません』

『それで、一體、お前は何方を言つてるんだ?』

『それア、妹さんの方はぐつと好う御座いますわ、姉さんは少し容色が落ちますわねえ  
自分は話頭を更へて、

『姉さん、變なことを聞くがね、此處に、此家に、非常な別嬪が來て居はせんかね?』

『ほら、御出でなすつたわねえ』と面白けに手を拍つて、『別嬪、別嬪ツて、貴郎方はそれを聞いて何う爲さるの?』

『何うでも好いが……居るかえ』

『それは澤山來て居らつしやいますわ』

『澤山では困る。僕の言ふのは顔の長い、色の白い……』

『髪の毛の毬れた、額の出額の』

『まア、はぐらかさずに聞いて呉れ、本當に御禮はするから』と幾許か眞面目になつて、『眼の非常に奇麗な、髪は島田に結つた、何でも弟と一緒に來てるとかいふ』

『弟さんと、妹さんと、老婦さんと來て居らつしやるのでせう?』

『それは何うか知らんが……』と自分は小首を傾けて、『ぢや違ふかしら? 僕の言ふのは、姿の瘦削な、はツと思ふやうに色の白い、紬の大縞の衣裳を着た——』

『ぢや、あれですわ』

『來てるか、この家に宿つて居るか!』と自分は思はず手を拍つて、『二階か三階か』

『何ですよ、貴郎。丸で夢中ぢやありませんか。あの娘はちやんと御亭主が極まつてるんですよ』

『それは知つてる』

『御存じなの——今日來た中尉さんがそれですつて。其前と言ふものはね、まだ一人だらうと言ふんで、皆様大騒ぎで、あの娘が廊下に出ると、彼方此方の障子に顔が十も十五も並ぶんですよ、別嬪といふものは始末なものねえ、あゝ、附けつ覗ひつされては、本當に遣り切れないぢや有りませんか』

『お前などはその心配が無いから、確かなものだらう』

『まア、此人は!』と撲つ眞似をして、『妾だつてね、情夫の五つや六つは持つて居ますからね』

『ほ! それは失敬』

少時黙つて居たが、『それから何うした?』と自分は促すと、

『知りませんよ』

『さう慣れなくつても好いぢやないか』

『何うせ、妾は御多福!』

と立上る。

『まア、好いから、口の滑つたのは謝まる。折角聞かうと思つたお前に遁けられてはそれこそ種無し

だ。本當に、今のは謝まる。……そして、それから何うした?』

『すると可笑しいんですよ。それ、御亭主が來たつて言つて、皆なが口惜しがつて、舌を鳴らしたり、障子に當つたり、手を拍いたり、それは騒ぎでしたわ。それに、その中尉さんと言ふのが、御存でせうけども、あの通り武骨一方で、野暮臭い風つて無いんでせう。ですもんですから、一層皆様が口惜しがつて……』

『で、其中尉は一緒に居るのか』

『いゝえ、室が狭いのに、御目附の老婦さんが居るものですから、屹度別の室の方が好いんでせう。

三階の向ふの隅の室に居ますよ』

『二人一緒に!』

と自分は慌て、問うた。

『まア、厭だ。心配してさ。けどもそんな心配は無いのよ。何でも二人の間は、まだいひなご結約か何か位になつて居て、本統に一緒にはならないのですから』

『其の室は?』

『娘の居る室ですか』

自分は點頭いて見せた。



『二階の八番』

『と言ふと、彼處が三番だから、杉田の居る近所か』

『いえ、三階の北の便所の傍に階子があるでせう。その階子を下りて、右に行くと、一、二、三、

四つ目の室』

『その隣か、前かに明間は無いか知らん』

『厭な人！ そんな處に行つて、何うする積り』

『何うする積りもかうする積りも無いがね、朝夕別嬪の顔を見て居るのも悪くは無いからナ』

『まア』と婢は呆れた體。

『本當に無いか知らん』

『今は塞がつて居ます』

『明けて貰ふことは出来んかね』

『何うですか』

自分は一圓紙幣を婢の袂に無理に振込みながら、『主婦さんによく話して見てお呉れよ。實際から言つてもこの室は西日が當つて暑くつて仕方が無いのだから。好いかね、頼んだよ』  
婢はうす／＼笑ひながら去つた。

少時して、主婦は自分の室に遣つて來たが、それでは二階の五番の六疊を明けましたからとのこと。

自分は大に満足して、何だか自分の目的に一步を進めたやうな心地、洋燈やら、机やらを自から先に立つて運び懸けると、先刻の下婢は後馳に遣つて來て、旅靴やら、書籍やら、火鉢やらを逸早くがた／＼と運んで呉れたは好かつたが、二階の途中で、持餘した書籍をばた／＼と落してあれよ／＼と援を乞ふ騒動。

机を据ゑ、火鉢を据ゑ、西の障子を開放して、夏敷の座蒲團の上に跪まると、婢は、

『悪戯を爲ては不好ませんよ』

『大丈夫、大丈夫』

『私が監督して居ますから好いわ、もしか悪戯なんかすると、……それこそ聞きませんから』

『よし、よし』

婢は去つた。

自分の室は恰も其室と筋違になつて、開放した夏座敷は塵埃一つ残す處なく明かに自分の眼に映ずるのであつた。何處に行つて如何なる戀を語り合つて居るのか、二人はまだ歸つて來ない様子で、五十三四の中老婦が火鉢の前に孑然と座つて、いかにも徒然に堪へぬかのやう。中央には竹筒の太い置洋燈が明かに點いて、一隅の衣桁には其人のと思はれる女物が二三枚、紹繻珍の派手な夏帯が一筋、男の長い

三尺帯が蛇のやうに蟠つて、其下には讀賣新聞の本紙と日曜附録の大きなのがおのれ顔に幅をして散ばつて居る。低い小さい黒臘色の机には、琉球塗の朱塗の意氣な硯箱が載せられてあつて、手紙を書き懸けたらしい半切が折から吹入る涼風に讀賣新聞の附録と共にばらばらと飛んだ。

右の隅には新刊の小説が二三冊、文藝俱樂部の臨時増刊の山と水との派手な表紙が斜に洋燈の光を受けて、そのすぐ前には際立つて美しい月の光が室内の光明の中に又一段の光明を劃して居るのが見える。床の間には質と誰が見ても分る光琳の懸幅がかゝつて居て、其傍には旅鞆やら、信玄袋やら、風呂敷包やら、汗巾シゲタやら、手拭やらが混雑と……

中老婦は顔の長い、薄痘痕のある、色の白い、鼻の隆い、若い時は相應に美しかつたらうと思はるゝ女であるが、自分は一目見たばかりで、この女の目付として、保護者としていかに無能であるかといふことがすぐ解つた。この線の弛んだ顔では、少し甘い言葉でも懸け、少し光つた物でも握らせると、忽ち掌中に丸められて、自己の責任の如何などは全く忘れて了ふに相違ないと自分は思つた。

かれは餘り徒然に堪へなくなつたか、其儘茶を煎れて、一杯啜つて、傍なる松風らしい菓子一つ頬張つたが、齒が少し缺けた口をむにやゝ遣りながら、徐かに二十年も閱したであらうと思はれる鐵側の大きい眼鏡を出して丁寧に汗巾で陰翳を取つて、それを懸けると其儘、傍なる新刊小説をぐいと引寄せらる。

拵つて置いた處から讀み出した。

けれどそれも十五分ばかり、やがては唐紙に黒々と移つた影がこつくりこつくりと船を漕ぎ出して、幾度か既に危ふく机の角で頭を打たうとしたが、しかも幸に幾度か立直つて、漕ぎ始めて、直つて、よくあれでと見て居ると、今度は誰かに鞭たれでもしたかのやうに、すつくと慌しく座り直して、大きな眼を明いて、そして机の角に置いてある懐中時計を見る。

自分も見ると、十時を過ぐるこゝ十五分。

『遅いことねえ、何うしたんだらう』

と獨りで囁いたが、今度は新聞の散ばつて居る上に、おぼこの頭を投げ出して、其儘忽にして高駟！十分経つか經たぬに、廊下を此方に此方にと近づいて来る高い足音——其處に白地の浴衣を裾短かに着た、中學生らしい一人の少年が顯はれた。

『婆や』

中老婦は驚いて跳起きた。

『姉様はまだ歸つて來ないの？』

『え、まだ……』と頻りに目を摩る。

『何うしたんだらう。もう、十一時だのに、妙齡の處女の身で、こんな遅くまで夜歩などをして、實

に怪しからん！』

この子や愛すべしである。

『だって、杉田様とですから大丈夫ですよ』

『大丈夫なことが有るもんか。まだ結婚もせんのに、二人手なんか曳き合つて……婆やは實に監督が不行届でいかん、僕は父様に手簡でさう言つて遣る』

『だって、坊様、大丈夫ですよ。もう、御約束が定つて、御結納も済んだのですもの』

『結納が済んだつて何だつて、結婚しない中に、こつそり尋ねて來るなどは杉田も馬鹿だ。日露戦争が始らうといふのに、あんな腰拔では軍人の面汚しだ！』

『酷いこと、坊様は。今に貴君の兄様になる人ですよ』

『何だつて構ふものか、卑怯な奴は卑怯だ。僕は言つて遣る』

と鏗然と地響を爲せて座つた。

『美代ちゃんは？』

『坂本の奥さんの室に行つて、重子さんと遊んでるんでせう』

これと殆んど同時に、再び廊下を傳つて高い高い足音と軽く引摺る草履の音とが相前後して聞えたと思ふと、其處には忽ち晚春風起つて紅亂れ緑駭くといふ賑はしい光景。黒い鬚、高い島田、赤い帯揚、

縮緬の三尺帯、銀鎖の時計などが月光燈影の間に眩ゆく閃き渡る……

『大層御緩くり』

『イヤ、餘り好い月なもんだから遂い遠くまで行つて、……』

『あゝ憊れたこと』

などいふ聲が雜然と亂れ合つて、今迄寂寞たる一室が俄かに賑はしい光景を呈した。

遠く歩みて憊れたるにも拘はらず、娘の整然として坐つた姿は何んなに僕の心を惹いたであらうか。

紹繻珍の派手やかな帯は美しく燈影に輝いて、正面にわが室と相對したる其顔の艶麗かさ。色はくつきりと白く、透徹るばかりの指に純金の指環を閃めかして、につと笑ふ時白く揃ひたる齒を二三枚見せたる、實際自分はこれ程美しい女に今迄一度も逢はなかつた。美人の定義は随分人々によつて違つて、甲の好むところ必ずしも乙の好む所では無いけれど、僕はあの位の女は廣い世の中にもあまり澤山はあるまいと思ふ。艶麗、高尚、優美など、いふあらゆる長所を備へて、それで浮華輕佻といふ點は爪の垢ほども無いのだから。

それから一座は猶一時間位儂舌つたが、夜も既に晩く、大湯の騒がしい音も絶えて、山中の月の冴え渡りたる影は、夏ながら霜も置くべく見えるので、もう御寢みにしませうと老婦が言ひ出して、かの中尉もそれではと暇を告げて歸つて行つた。いや、其前に、娘に入浴を誘つた様子であつたが、

『もう、今夜は止ませよう』

と娘は應じなかつた。

自分も既に床に入つて、洋燈を枕元に、今日讀み懸けたハイゼの短篇集を翻がへして居たが、何うもいろ／＼な事が胸に浮んで来て、如何にしても満足に讀耽ることが出来なかつた。ふと、自分は今迄戀した經驗に立返つて、今度のやうな烈しい肉體の苦悶と、今度のやうな盛んな戀情の發展とを味はつたことが有つたか何うかといふことを考へた。決して無い、決して無い！と二度三度心中に繰返して叫んだが、何故にかゝる簡單なる事情、簡單なる遭逢にこれ程猛烈な戀の發展を來したかと言ふことを考へると、慄然として肌粟せざるを得なかつた。爾は戀愛を思ひ斷つと言つた、爾は利根河畔の小さき墓を守つて再び浮華なる戀には陥らずに、一生を事業と空想との上に費さうと誓つた。然るに、爾は一週日ならずして、再び美しき眼を夢み、清き聲の音楽を聞かんことを望んだではないか、何たる節操なき心、何たる主義なき情！

ふと、前の室では、帯の解けしごきの鳴る音！ 得ならぬ物の薫！

『今、寝るんだな！』

と思つたわが胸には烈しい慾情が燃え上つた。

## 七

騒がしい物音が煩さく枕元に聞ゆると思つて、眼が覺めると、東の障子には朝日が既に晴れがましく射し込んで、遠い近い廊下を歩く草履の音はさながら織るが如くに聞え渡る。何時の間に婢が来て火を附いで行つたか、鐵瓶にはたぎるゝばかりに湯が沸いて、一庭隔つた向ふの室では、既に朝食を遣つて居る。

蒲團の下に時計を搜ると、もう八時半過。

昨夜二時近くまで、いろ／＼な事を思つて、何うしても眠られなかつたから、それでかうぐつすり寝込むのであらうと思つたが、すぐその後から簇々と思ひ出さるゝのは、其事、其顔。

急いで飛起きた。

前の室には老婦が朝食の仕度をして居るばかり、娘は見えぬ。

まア、兎に角湯に入つて來やうと衣桁から手拭を取つて、齒を磨きながら室を出た。

左に曲つて右に突當ると、折れ曲つた階子。その階子を下りて左に斜に進んで行くと、色硝子の清潔な大きい浴場には溢るゝばかりの玉の如き湯を湛へて居るのであるが、自分は其の階子の前で不圖立留つた。それは、其處から箒川の溪流の日に閃めくのがいかにも面白く見えたからで。加之、猶よく見る

と、其川を越して、其向ふの山を越して、又その向ふの對岸の何岩とか言ふ突兀たる大岩を越して、遙かに日影の美しく射し渡つた滑かな芝地。見たやうな處と思ふと、それも其筈、其上には樺島家の別荘の一端がちらと眺められる。

昨夜の快談、自己の談話の感化、未亡人の感心して聞惚れた顔、令嬢の活潑な態度、それを稍少時胸に浮べて、じつとして立つて居たが、ふと自から苦笑して、『あれを物にするのは譯は無い』と獨語した。かう話して來ると、人は僕の性質の甚だ多情輕薄なのに呆れるかも知れぬ。けれどこれは事實だ、大きな事實だ。

猶少時其事に思ひ耽つて、僕は其の階子を下から上つて來るものがあるのに氣が附かなかつた。『あの未亡人の氣に入る位なことは……』と思つた途端、軽い足音がふと耳に入つたので、慌て、眼を其方に移すと、驚いた、其階子をかの娘が徐かに上つて來た。

右の手に手拭と石鹼箱とを下けて、高島田のうつすりと薄化粧を爲た湯上り姿！ 頬の四邊がほんのりと薄紅に、譬へば黎明のこれから明けやうとする空の色、衣服は縮縮緬の派手なのをぞろりと着て、赤い鼻緒の草履を引かけた足の白さは實に人の心を惱殺するばかり。

ちらと見た瞳の黒さ！

自分はその多情なる一瞥の力に殆ど後に倒れやうとしたのである。

娘は徐かに階子を上つて、其儘自分の傍を通らうとしたが、再び其眼は自分を見た。折しも、自分の眼も正面にそれに對して居たので、娘ははつとした様子で、サツと顔を赤くしたが、多少會釋するやうな態度で、低頭勝に其傍を過ぎて行つた。

『先生、顔を知つてるナ？！』

と自分は喜んで心中に叫んだ。

顔を知つて居るからには、汽車の中に二時間一緒に乗つたことを忘れぬからには、かれは必ず一瞥に止まらず、會釋に留らず、必ず一度振返つて見るであらうと、自分は長く長く廊下を過ぎて行く其の後姿に見入つたのである。けれど容易に振返らうとはせず、其姿は小さく小さく、最早絶望と思つた途端、——果して振返つて此方を見た。

そして其の白い顔は忽ち消えた。

『ブラボー！』

と叫んだ自分は手の舞ひ足の踊るを知らぬ程の嬉しさを覺えた。

自分は前に女の眼色の千變萬化を洞察する技倆を有して居ることを斷つて置いた。自分はこの身の好男子たることを誇るのではない。また、自分の顔、眼、眉其他如何なる部分が女の心を引付ける力を有するかを説くでもない。けれど自分は經驗上、女の眼色のいかにわれに心ありや、女の態度のいかに

われに情ありやを知る程の技倆は持つて居るので、或はその技倆が自分の戀愛に熱する大きな動機に爲つたのかも知れない。實際僕はまだ十七八歳の鞭聲肅々時代から、道を行く美しい女に振返へられる得意さを覚えて居つたのだ。

かの娘は耻しさに顔を赤くした。會釋をせぬばかりにして自分の傍を通つた。そして少時行つてから振返つた。これから推すと、かの女のわれを生面の人として居らぬ事は確かである、其胸中のある空所は此身の面影を以て充されて居ることも争ふべからざる事實である——自分の萬歳を叫んだのも無理ではない。

温泉から歸つて、朝食を遣つて居ると、もう同級生の小村といふのが尋ねて來た。

『何うして室を變へた?』

『西日が當つて暑くつて仕方が無いから』

渠は四邊を見廻して、

『けれど前の室の方が好いぢや無いか。第一向ふは立派な床も附いて居るし、眺望もあるし、それに静かで好い』

『けれど暑くつて仕方が無いから』

茶とビスケットを出して、

『何うもこの混雜では勉強は出來んな』

『仕方が無い、今一月遊ぶさ、九月になると、ぐつと静かになるから』

『静かになれば好いが』

『それはなるよ』と友は新聞を引繰返して、『うむ、昨夜あれからね、三人して杉谷の宿を襲つたが、大分君の噂が出た。何しろ、始めての晩であの話し振りだから、皆なちつとは驚いたアね。何うも佐々木の話上手には敵はん、向ふ所披けざる無しだつて言つてた』

『皆な意氣地が無いからナア』

『そして杉谷の言草が好いぢや無いか。彼奴、屹度物にするから見て居るとさ』

『それア、あんなのを物にするのは容易な話さ。けれどあの娘ぢやあ……』

『一寸好いぢや無いか』

『それよりあれを見給へ』

と自分は願で向ふを示した。

前の室には娘は横向になつて、頻りに小説らしいものを讀んで居たが、餘りの美しいのに、小村も流石少しは見惚れたといふ風で、容易に其眼を放さうとはしない。

『何うだ?』

『素敵だね』と驚嘆したやうに言つたが、『それでだね、室を變へたのは！ 君の敏活には驚く』  
僕は黙つて居た。

其日一日は自分は其の目的に向つて如何なる歩をも進めることが出来なかつた。中尉は絶えず遣つて来て、頻りに甘い話をして居るが、其戀人に對する態度は實に見るに忍びぬ程献身的で、一言一句をもその願に背かざらんことを期して居る。けれど女はそれとはいくらか上品振つた處があつて、其盲目的献身を却つて蒼蠅いと取扱つて居るやうな風。午後には例の如く二人連れ立つて出懸けたので、少し時を隔いて自分も其後を趁つて見たが、何處に行つたかもう其姿は見えなかつた。野立岩の方にも行つたかと思つて其方を遍ねく探したが、其處にも見えない。引返へして不動が澤、仙人岩の附近、兒ヶ淵、何處に行つても其美しい姿が見えないので、果ては自分は幾らか失望の氣味で、いつそ一人で炭焼澤の方へでも行つて見やうとてくゞ歩き出した。

炭焼澤の深い谷に入つて、或は溪流の畔、或は炭焼小屋の傍、一人で空想に耽りもし、無邪氣な樵夫と語り合ひもして、いつか二三時間を其間に過したが、溪流の細く帯を曳いたやうに流るゝ行方を趁つて、こんな處にこんな隠れた路があるかと思はるゝ間道を傳つて行くと、草花の美しい、灌木の涼しい蔭を作つた風情ある高原が斜に展開せられて、見ると其蔭に若い男女——紅と緑と紫とが畫にでも見るやうに面白い反映を呈して居る。

的切二人だと自分は思つた。こんな山の中に来て……と思ふと、例の烈しい嫉妬の情が盛んに簇つて来て、いかにしても押へられぬので、急いで其路を向ふに下りた。けれど其の想像の誤つて居たのを發見するのは餘り久しい後では無かつたので、自分は却つて其二人の、一人は樺島の末の令嬢で、一人は同じ卒業生の小久保歳三といふ青年であるのを認めた。

自分は遠くから會釋をして近寄つた。

『昨夜は失禮しました』と先、令嬢に向つて、自分が言ふと、

『いゝえ』

と令嬢は顔を紅くして答へた。

『何處に行つたんだ？』と小久保に問はれて、

『いや、餘り退屈だから、炭焼澤の方から、ずうと向ふの方まで行つて來た。それにしても不思議なのは、路がこんな處に踉いて居るとは何うしても思はれん』と自分は四邊を見廻して、『この丘は嬢さんの別荘と續いて居るんですナ』

『さうよ』と令嬢は答へた。

『何うも不思議だ、こんな處に川があるのと思ひ／＼渡つて來たが、それぢやあれが別荘に行く時渡る川なのだ』

『左様さ』

令嬢の膝の上に此頃評判の『戀と魔』といふ小説が載せられてあるので、

『嬢さん、もう御讀みなすつて?』

『え、』

『何うです』

『私達には何うせよは解りませんが、面白いことは面白いと思ひますわ。最後がすこし變だと思ふけれど』

『さう、私も左様思ふ、あれ丈の悲劇が忽地にして喜劇になるといふのは少し變だ!』

『けども、よく書いてあることは書いてありますわねえ、芳江の女學校生活などは丸で酷肖よ』

自分は既に令嬢の女子的隔心の去つたのを覺えた。

『けども、嬢さんの學校などはあんなぢや有りませぬ』

『それア、違ひますわね。けどもあゝいふ思潮は今の女學生に充ち渡つて居るのは事實よ。自由だの、矯風だのと昔から随分喧しく騒ぎましたけれど痛切に感じて參つたのは、漸つと近頃ですからね』と少し興に乗つたといふ風で、『私の母などは、御存でせうけれど、あれで中々女權のことなどを喧しく言つた方ですわ。けども、私などゝ話すと丸で意見が違つて、自由などゝいふことは本當に解つて居り

はしませんのよ』

『それは時代が違ふのですから』と自分は愈々意を迎へて、『何でも時代に觸れた思想でなければ駄目なものです。それに、今の教育家などの中には、この思潮を非常に危険なものゝやうに考へて、女子教育の有害なのを説くものさへあるですけれど、私は決して左様は思はん。それア、一人や二人や芳江のやうな思想の犠牲になるものは出来るかも知れんけれど、それは仕方が無い、何物でも犠牲なしに購はるゝものは無いのですから』

『本當ですわねえ』

『それに、私は犠牲の悲壯といふことを考へたことがよくあります。犠牲になるものは非常に悲しい、非常に辛い、けれどそれが爲めに貴い物が買はれるなら、我々箇人はこの多數の人間の爲めに甘んじて犠牲とならんければならん。だから、芳江の墮落などは私は尤も同情を表して居るです』

令嬢琴子は非常に感に堪へたやうに、黙つては居るが、しかも深く物を思つて居る様子。その若々しい胸はわが意を迎へたる言に甚しき衝動を受けたに相違ない。

少時してから、

『嬢さん、少し其處等散歩を爲ませんか。佐々木も行かんか』

と小久保は誘つた。



で、我々三人は其儘高原を下りて、溪流の橋の畔へと静かに歩いて行つた。令嬢は貴族の娘に似合はぬ質素な活潑な風、紫の矢絣の單衣に絹の海老茶袴を穿いて、束髪には例の白純のリボンを結び、小さい懷中に無理に新刊の小説を挿込んで、一步々精神に動いて來る思想に聞惚れつゝ歩み行く風采は、近頃の雑誌の口繪によく見らるゝ圖で、まことにノイエスタイルであると自分は思つた。自分等は袖をつらねて如何なることを語り合つたであらうか。思想問題から文學の話、音樂の話、繪畫の話、話題は容易に盡きやうとも爲なかつた。

折々欠をする小久保文學士の顔！

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

橋の處まで行つて、溪流の奔跳するさまを見て、瀑の方へと進んで行かうとする途端、不圖かの二人が岩角の間の路を此方に下りて、睦しく並んで通るのに邂逅した。

小久保文學士は摩違ひさま、丁寧にかの女に辭儀をした。

少時行つてから、

『小久保さん、御存じの方？ 別嬪ねえ』と令嬢は言つた。

『なアに……』

『本當に知つてるのか』と問うた自分の聲は非常に眞面目であつた。

『知つてる、昔から知つてる』

顧ると、かの女は橋の袂に立つて、じつと此方を見送つて居る。黒い髪、白い顔、美しい姿、赤い雪踏の緒、その下を溪流は遠雷の如き音を立てゝ流れて行く。

八

其夜、小久保の室に行つての會話。

『本當に知つてるのか』

『知つてるとも……けれどそれよりか君は何うして知つてる』

『僕の室のすぐ前に居て、始終中、そのにちやつきを見せられて居るからねえ』

『さうか、君の前の室に居るのか』

『弱つちやうよ』

『弱る處か、大喜びなんだらう』

『馬鹿を言へ』と言つたが、『何うして知つてるんか、少し話して聞かして呉れ結へ』

『話す程のこと無いがね、あれは君、ね、僕の故郷でも評判な美人で、兄は商業學校の卒業生、僕とも交つたことがある。父親は水戸市の市會議員で、中々福が利く方だ』

『あの軍人は何だ』

『あれに就いては中々面白い一場の話があるんだ。あの中尉先生と言ふのは、何でも遠い親類か何か  
に爲つて居て、十七八歳の時分、その家に少時厄介に来て居つた。もう、其時分から、先生あの娘に氣  
があるんで、何うかして自分の妻に仕度いと何の位熱心したか解らん位。奴が苦學して、陸軍に入つた  
のも其戀の希望を遂げ度いばかりであつた相だ。けれど聞く處によると、娘は餘り奴に氣が無かつたと  
かで、士官學校を卒業してから父母も至極相應な縁だからと頻りに勧めたけれど、矢張容易にそれに應  
じなかつたと聞いて居た。けども岩に立つ矢の習ひで、今度頭口説落して、愈々結婚するとまで運ん  
だとの噂だ』

『その軍人を君は知つてるか』

『階級が違つて居つたので、よく知らんけれど、いやにむつつりした、頑固な、遣るからには死ぬま  
で遣ると言つたやうなそれア厭な奴だつた。だから先生の戀物語は随分評判になつたもので、娘もそれ  
を冷かされるのを此上もなく恐毛を振つて居た』

『娘の性質は？』

『大分詳しい處まで聞き度いんだね、……何うかする積かね』  
『亭主持を何うしたつて仕方があるものか』

『だって、まだ一人だ』

『ぢや……』と自分はこの男の性質を知つて居るので、『もし……もしだね、僕ぢやなくつても、僕の  
友人なんぞが其娘に非常に執心だと聞いたら、一臂の力を添へて呉れるかね』

『君なら、條件附で盡力する』

『條件附とは？』

『滿韓交換と言ふこともこの頃アあるアねえ、先刻のやうな事さへして呉れなけりや……』

自分はずぐ覺つた。此奴め、樺島男爵になる氣だナ、さう安くは問屋では卸さん……と電光のやうに  
心中に思つたが、それを露ばかりも顔には顯はさず、

『先刻のやうなこと？』と態と白ばくれて問うた。

『何アに、さう眞面目に聞かなくつても好い。君は別段そんな氣は無いのだらうけれど、餘り才氣が  
有り過ぎて、兎角人を感化し過ぎるからいかん。何アに、邪魔さへ爲て呉れんけりや……』

『邪魔なんか爲ん』

『勿論、僕も一臂の力を借すさ』

かくの如くにして滿韓交換の協約は取交されたのである。

兎に角この小久保文學士を得たのは、自分の目的に達する大きな道を開いたのも同じで、自分はその翌日かれの紹介のもとに其の一族の相識になることを得たのである。

その一談話——それは極く平凡で、極く普通で、何の波瀾も無いやうに穏かであつた。けれど自分は實に一擧してその本壘に迫つたやうな心地が爲たので。自分は談話の中に、本尊なる娘が自分に對して非常な敬意と非常な羞耻とを含んで居るのを見て、先づこの戦の甚だ順境に進んで居るのを知ると共に、他の老婦、他の弟、他の妹共もまた自分に限りなきの厚意を寄するのを推して、此上もなく喜んだのである。否、當面の敵なる中尉すら何等の隔意をも挾まなかつた。

『矢張小久保君などと同じに今年御卒業でしたか』と中尉は問うた。

『え』

『何うも、大學の方は御氣樂で好いですナ』

『何うして、氣樂どころか、やれ卒業試験、やれ文官高等試験とそれは飯も落付いて食ふ間暇もありません。それから思ふと、軍人は好い。僕の親戚に海軍の中尉を爲てる奴があるが、干涉される代りに責任が無くつて何でも勝手なことを爲れて好いと言つて居つた』

『海軍は好い、海軍は面白い。何故我々も海軍にならんかつたかと今では後悔するです。第一、舟に乗つて勝手な處に行かれる、外交費がうんと出るから面白いことが出来る。それに比べると、我々は土方か職工ですな。何んな炎天にても、何んな吹降にも、進め、止れを遣らんけりやならんのですから』

『日露戦争は何うです？』

『いや、始まり相にも有りませんナ。何うも露西亞の腰が弱いですからナ』

『生まれば差詰あなたなどは最先でせう？』

『厭でも、引張り出されるです』

『成程』と態と意味ありけに笑つて、『貴郎などを戦場へ押出すのは酷ですナア』

『何故です？』

『舊約でも、モーゼは法律を作つて、結婚後一年の壯丁は兵役を免ずると言つたです』

『ヤア、これは恐入つた……』

と頭を搔いた。

傍なる娘は顔を紅くして他方を向いて了つた。

『結婚は？』

『いや、もうそんな事は？』と愈々頭を搔く。

『小久保から、實はもうすつかり聞いたですよ。忍耐の価値ですナア』  
『困るナア、さう冷かしては！』

と言つたが、急に、

『孝ちゃん、麥酒か何か有りませんか』

娘は黙つて眩ゆさうに、麥酒と麥酒の栓抜とコップ二つとを春慶塗の丸盆に載せて出した。

『何うです、一つ』

と言ひながら、波々と注ぐ。

『萬歳を祝しませうか』

『まア、そんなに言はずに……』

と押へて再度、三度。

自分は此の會話中、殊に注意して娘の眼色の往來を見て居た。娘は確かに自己の將來の夫となる中尉と色の白い何方かと言へばハイカラな大學生とを比較して觀察して居たので、自分はその眼色の中に、明かに此身の勝利を認めたのである。

其の翌日は自分と娘とはもう餘程親しくなつた。

『嬢さん、僕は此處の以前に、御目に懸つたことがあるのですが、御忘れなすつたでせう？』

と自分は大膽とは思つたが、敢て言つた。

娘は流石耻かし氣に一寸躊躇したが、

『存じて居ますわ』

『本當に……』

『え』と莞爾笑つた。

『それは遂い、此間ですよ』

『え、此間も存じて居ますが、その前にも……』

『その前？』

と自分は驚いた。

『あれは、昨年十二月、確か十三日頃、弟御さんらしい方と二人で、我孫子の停車場から御乗んなすつたことが御座んせう。風の寒い、月のある晩？』

確かにある、あれは雪子と最後の別を告げた夜で、自分の頭腦は丸で回轉するやうに、其他のあらゆることを思ふ暇すら無かつた。其夜、あの汽車にこの娘が同車して居やうとは！

『それから、其前にも御目に懸つたことは幾度もありますわ。私は、始終汽車であの線路を往復しましたから』

『それぢや僕より貴嬢の方が早い』

自分の喜悅は如何許であつたか。自分はわが思ひのかく迄先方に通じて居らうとは夢にも知らぬ。少時してから、

『東京にも出て御出なすつて?』

『え』

『學校は何處?』

『淑徳女學館——』

『本郷の、あの眞砂町の、角の』

『え』

『それぢや、坂本といふ面白い英語の教師が居つたでせう?』

『え、あの人に私はユニオンの四を習ひましたわ』

『あれでも古い英語の教師で、僕もABCの手ほどきをあの人に教つたですが、面白い手眞似を爲たり、顔色をしたり、一時間中学生徒を笑はして居りましたが……』

『本當に面白い人、手でかう』と自から眞似をして、『鼻を摩る癖があつて……』

『左様、左様、……もう十年前に爲りますがね、あの頃のことを思ふと、實に面白かつたです』

話頭は更に一變した。

『あの此間の汽車には父様も母様も兄様も乗つて居らしつてね』

『え』

『皆なやさしさうな好い方ですね。私はあの時、何といふ平和な美しい家庭だらうと思つたです』

『いゝえ、皆な……』

『私などは早く父に別れ、母一人の手で育つた者ですから、何處かかう穩かで無い處があつて、人附きが悪くつて困るです』

『母様は居らつしやるのでせう』

『いや、昨年歿くしました。せめて卒業する迄、生きて居て呉れれば、少しは樂も爲せられたのでしたけれど……私の母などは確かに不幸福の一人です』

『女と言ふものは何うせ不幸福なのでせうねえ』

『何故です』

『何故ツて、一世人に身を任せて暮さなければならんのですもの』

自分は笑つて、『今の若いのに、そんな事を考へて居るものではありませんよ。人間は楽しいのは若い時ばかりですもの、そんな事を考へないで、晴々しく暮す方が好いですよ』

『私は何うしてですか、何時も泣いてなんぞばかり居る者ですから、兄もよくさう言つて力付けて呉れますけれど、何うも妾は悲しくばかりなつて仕方がありませんわ』

『だって、慰めて呉れる立派な人があるぢやありませんか』

孝子は黙つて了つた。

稍々少時何事をか深く考へ込んで居たが、急に、

『貴郎、私、幸福だと思つて？』

『だって、左様しか思はれんぢやありませんか。父様も母様も兄様も皆なやさしくつて、そして、また、あんなにやさしい親切な……が居るのですもの』

『あゝ私は厭！』

と堪へ難いやうに叫んで、そして、『貴郎、何處か散歩に行つて見ませんか』

自分は喜んで其の誘に應じた。

## 10

自分等は相並んで歩いた。

これは自分が如何に望んだことか知れぬ。否、自分はいかにわが戀愛の力を用ゐても、これ程早くこ

の結果に到着せんとは更に思ひ懸けぬことであつた。

従つて人は何故に早く其戀を打明けて、其燃ゆるがごとき念を晴さぬかと疑ふかも知れん。けれど人間には各人天賦の性質といふものがある。もしこの少女にして、普通一般の性質であつたならば、この身を思ふことかくまで深きを發見しなかつたならば、情熱に富める自分は、直ちに全力を擧げてそれに向つたに相違ない。けれどもかの女には戀の光がある、ミユズの神の私語がある、否、人間の不眞面目なる行爲を防禦する一種の力を有して居る——自分はこの少女に近くに及んで、頗る意想外の品位の我身に迫るのを覺えたのである。

不動が澤の方に行かうと言ふので、其儘路を左にとると、先、女郎花、桔梗、尾花などの既に幾番の秋を領せる花野が展げられて、前に聳ゆる鷄頂山のくつきりと深藍色を呈して居る具合は、何うしても間近になつた秋の閑寂を人の心に沁入らせる。何うです、あの自然の美しきは！ 丸で畫のやうではありませんかなどと語り合つて、さながら離れ難い戀人のやうに睦しく並んで行くと、不圖、後で、

『おーい、おーい』

と呼ぶ聲かした。

自分達を呼ぶのとは思ひも懸けず、振返りも爲ずに猶徐かに徐かに歩いて行つたが、其呼聲は愈近く、傍にそれかと思はれるやうな農夫も居ないので、振返ると、

中尉先生、脚を空に脛をあらはに、面白い滑稽な恰好を爲て走つて来る。

『あれ、まア……』

と叫んだ娘の顔には、折角靜かに遊ぼうと爲たのに、もう追懸けて来て、厭な人ツちや有りやしない！と言つたやうな不快の色が歴然とあらはれ渡つた。

自分も不愉快ではあるが、又可笑でもあるので、思はず微笑しつゝ、立留つて、その走つて来る人の方を見た。

近く走つて来た中尉の顔——その半は白く半は黒い顔には嘸暑かつた汗がさながら玉を聯ねたやう。それを拭ひも敢へず、呼吸をも吐き敢へず、

『置いてけ堀は酷い！』

と言つたが、それは言つたと言ふより、呻いたと言ふ方が適當である。

『置いてけ堀ツて言ふ譯ぢや無いんですけれど、一寸御見えなさらんかつたから』

『見えんことが有るもんかね、僕は整然ちやんと僕の室で、野外要務令を読んで居た』

『それでもね、佐々木さん、見に行つたんですわね』

と娘は眼で知らせて自分の援兵を乞うた。

『見に行つたんですとも、一緒に行かうツて、老婦おやを御室に遣つたんですよ。けれども御見えになら

んと言ふので……それぢや其處等近所を散歩に行つて居らつしやるのだらうから、途中に逢ふだらうと思つて』

『湯にでも行つて居らつしやつたんでは無くつて？』

『一寸下まで行つたことは行つたが……』

と中尉は言つた。

『それぢや、其留守でせう』

と孝子は言つたが、其儘徐かに歩き出した。

『それにしても、何んなに走つたか。私は、野外要務令を見ながら、それともなく不圖戸外に眼を移すと、(かれの室から此高原に通ずる路が少し見える)その路の處を君と二人歩いて行くではないか。僕は始めは僕の眼を疑つて、そんな筈は無い譯だがと更に瞳を定めて見たが、矢張君等だ。で、其儘飛ぶやうに驅けつて来た。急行進よりも一層急な速力を出したので、非常に苦しかつた』

と顔やら、胸やら、髪やらを其處はかたなく拭ふのである。

『それア、氣の毒でした』

と言つた自分は、一層碎けて、『奥様を斷り無しに引張り出すなどは怪しからんですナア』とか何とか言譯しやうかと思つた。けれど、娘の顔を見ても、中尉の顔を見ても、乃至は自分の心に聞いても、何

うもそんな餘裕がありさうにも思はれぬので、其儘黙つて歩いて行つた。

胸に各々蟠まりの出来たのは、最早争ふべからざる事實で、三人は三人共同の題目に就いて互に深く何事かを考へて居る。従つて、この散歩の一群の調子抜けして居ることはそれは夥しく、皆な面白からざる不愉快極る顔色！

自分は考へた、『この男は妻を他人に取られても、少しも知らずに鼻毛を長くして居る手合だ。妻は遊ばせて置いて、自分が水を汲んだり、飯を炊いたりして甘垂れたい手合だ。いや、かういふ男に限つて、面の好い奴ばかりを選んで、床の間の置物か何ぞのやうに粧り立て、縁日には手を引いたりなんかして、貴郎……貴郎など、甘へられるのを此上なく喜んで御座るのだ。けれど、この娘はそれには餘り眞面目だ。そんな甘垂るい鼻毛の讀み方位に満足して居るにはあまりに伶俐だ』

『不動の澤へ行くんですか』

と言つた中尉の聲は兵士を號令するやうに大きいので、自分ははッと空想から覺めた。

『何うです、嬢さん？』

と自分は娘に謀ると、

『参りませう』

とこれは木で鼻を括つたやうな返事。

馬鹿な奴だ、こんな散歩を爲て何が面白いのだ……と思ひながらも、自分は黙つて歩いて行つた。自分は性來圓轉滑脱の方で、間の抜けた場合を恢復する位のことはいくらでも出来るのだが、今日に限つて、それを恢復して了はん方が面白いといふやうな氣が爲て、『様を見る……』と心中に舌を出しながら、其儘志す方へと踵を進めた。

秋の花野、——平生ならば何んなに面白い話しも出たのであらう。桔梗、萩、女郎花、中尉殿は武骨な手にそれを手折つて、女の島田鬚に横に挿させて、非常によく似合ふ位のことには必ず出たのであらう。否、二人ならば、女の好む好まぬにも拘はらず、無理に其傍に鴛鴦のやうに並んで、人の見て居ぬ隙を覗つて、かの曩の夜の橋の畔のごとく、相抱いて頬摺位は爲たかも知れぬ。

『さまを見る！』と自分は再び心中に叫んだ。

路は秋の花野を抜けると、俄かに小暗い林に入つて、熊笹が處せまきまで茂つて居る。こゝしい岩、危い阪、躓く木の根を踏留つて、辛うじて濶然と向ふに出ると、溪流の音はさながら驟雨の如く淙々と聞えて、まだ、其流は見えぬけれど、其岩を廻つたなら何んなに刮目するやうな奇景が顯はれるであらうと、座ろに人をして限りなきの興を覺えしめるのである。

岩角を右から左へと傳つて廻ると、

俄然——天をも摩するかと思はれる巨巖がむつくと人立して、其下には其妻とも子とも親族とも眷屬



とも稱すべき大小無数の岩石が或は横臥し、或は屹立し、或は走り、或は倒れて、實に奇々怪々の妙を盡して居る。否、其群れる黒色、灰色、紺藍色の岩石の彼方には、蛟龍の住むらんと覺しき深潭が凄じく膠を開いて、巴渦を巻ける其淵の凄じさ！ことにその上流と下流との激怒憤越、其の水珠の粉塵せらるゝさまは恰も青銅の藥研に砕きたる瑠璃末のごとく、殆ど見る者の眼を眩し、聞く者の耳を聾し、猶嫌たらずして、人の魂を奪ひ、人の靈を誘はんとするやうなる趣がある。

『まア、凄いわねえ！』

と餘りの美に胸に蟠れる不快をも忘れて、娘は言つた。そして、

『これが不動の澤』

と改めて問うた。

『え』と自分は微かに。

中尉は猶一言をも發しやうともせぬ。渠は好んで孤立したと言はぬばかりに、潭に臨める岩上に一人立つて、暗碧なる水の底をじつと深く凝視めて居る。さながら其處にある面白きものを認めたる如くに。それにしても何たる面白い圖であらうと自分はすぐ客觀した。互に一つの問題に觸れ、相もがいて居る一女子二男兒が、一人は岩の上、一人は樹の陰、一人は草の芝生に身を置きつゝ、前を激怒憤越して泡を立て、流れ行く溪潭に見入りながら、じつと黙して物を思つて居る容は何たる意味深い光景であらうか。

この美しい風景も遂に一同の胸の懊惱を解くに足りぬので、我々は其儘さびしく其處を去つた。歸りは路を溪流の畔に求めて、樹の繁り、水の鳴り、日光の到らぬ巖陰、山陰のやうなところをのみ佗しく歩いて、大凡七八町も來たと思ふと、一ところ右の岨から匹練のごとく落ちて亂るゝ七八丈の小瀑が懸つて、其の餘流は今年の暴風雨か何ぞに破壊してそのまゝ修繕せぬらしい路の上に縦横に流れて居る。

中尉は先飛越えた。續いて自分も。

跡に残つた娘は女の身の飛越ゆることも出來ず、其儘石を傳つて渡らうとして居るが、かゝる時の保護には全力を注がなければならぬ筈の中尉先生、否、二人ぎりならば抱いてなり負うてなりして必ず渡すに相違ないのであるが、今日は先生其れを見ながら、更に一臂の力を添へやうともせぬ。

餘儀なく自分は彼方此方の大石小石を右に左に轉して、其路を何うやら彼うやら渡るやうに作つて、

『さア御渡んなさい』

『何うも難有う』

と娘は軽く渡るのであつた。

中尉先生の血色は愈悪い。

相變らず押黙つて、うね／＼と曲りくねつた路を辿つて行くと、川は川、路は路と言ふやうに何時と

はなく右と左とに岐れて了つて、ふと登り懸けた丘陵の半腹からは、其の溪流の激怒憤越して、或は日に閃めき、或は岩に咽び、或は深潭を湛へ、或は激湍を作りつゝ、箒川の大溪に落ちて行くさまが明かに打渡される。中尉は先に立つて歩いて行つたが、ふと右の低い灌木の、萱、雑草など生茂つて居る叢をがさ／＼と押分けて入つて行つた。まさか野糞を爲るのもあるまいと見て居ると、臆て、ある所の萱やら細い樹の枝やらが左右に動いて、先生何か珍らしいステッキの木でも見付けたのである。

其間、(自分は中尉を懊惱させる爲に如何なる機会をも失はなかつた)

『何うです、好い景色ですナ』

と眼前に展けられた風景を娘に指した。

『本當に……』と言つたが、

『あの向ふに見える芝山あたりでせうか、あの二階から見える橋のあるところは？』

『左様です』

『それぢやまだ随分有りますのね』

『ナア、もう此處から向ふに出るとすぐです……御憚れですか』

『いゝえ、左様ぢや無いですけれど……』

と莞爾笑つた。

つまりぬ形をした赤冬青の一枝を右の手に、左に海軍洋刀のぎら／＼と日に光るのを持つて、がさがさと叢を押分けて出て來た中尉は、恰もこの莞爾と笑つた娘の顔に邂逅したのである。

『ステッキですか』と自分はつい愛想を言ふと、

『え』

と答へは答へたが、其儘、他方に向けて、ぎら／＼光る海軍ナイフを動かしつつ、頻りに其枝を斬拂つた。わが戀人に一瞥一顧盼を與ふる者よ、爾はこの枝の脆きがごとく、忽ちこの一刀の酬を得るを覺悟せよ……と思つて居るかも知れんと思ふと、自分は何となく滑稽に感じて來た。

坂の降口で、二人の同卒業生に邂逅した。

到底この散歩の愉快に終る筈はなし、またさう何時まで執拗なく無邪氣な中尉先生を苦めるでも無いと思つたから、自分はその同卒業生に誘はれたのを幸ひ、他の方面に散歩すべく、其儘二人に別れを告げた。中尉はそれを聞いて俄かに喜悅の色が其面に歴然と顯はれ渡つたが、娘は依然として不愉快らしい顔色で、我と別るゝのを寧ろ好まぬといふやうな風であつた。別れてから、少し其後姿を見送つて居ると、中尉先生はその新たに斬つた枝を得意らしく振廻して、十間も行つた頃には、もうぴつたりと翼を並べて、さも睦しさうに相並んで歩いて居る。

けれど自分の胸にはもう嫉妬の念は露ほども萌さなかつた。

『おい、何時まで見てるんだい、嫉いたって仕方が無い』

と小村は自分の背を軽く拍った。

『成程別嬪だね』と他の一人はさも感心したらしく、『けれど惜しい者だ、あの中尉先生には過ぎてるよ』

二人の姿は蜿蜒と曲つた路を躡躑と向ふの林に入つて、何時か見えなくなつて了つた。

『おい、涎が垂れはせんか』と小村は前に廻つて、『やア、えらい顔を爲て居る。恨、骨髓に徹すると云ふ態で、じつと見入つた今のさまは、新派の川上も眞似が出来ん』

と大に笑ふのであつた。

自分は取合はうとも爲ない。

で、我々は歩き出した。と、不意に小村は、

『君は、あれつ切り、行かん者だから、樺島の未亡人は何うしたツて、よく聞くよ。何うもあの方は面白い方だ、話が上手ツて言つてもあの位旨い人は餘り澤山はありますまい。若い方には珍らしい方だツて、それア非常な評判だよ』

『左様かい』

『左様かいぢや堪らんねえ、我輩は君の爲めに随分提燈持の御勤めを爲たのだから、忝けないとか、

難有いとか位は思つて貰はんぢや……それア、西洋料理の一皿位……』

『吝なことを言ふねえ、何うせ奢つて貰ふなら、新橋か、葎町位言ひ給へ』

と他の一人が口を入れた。

『奢るとも、……何でも奢る』と自分は其調子を合せた。

『それは實際だよ、君はあの一晩で、すつかり未亡人を籠絡して了つた』

『籠絡は酷い』

『さうか〜』と小村は頭を搔いて、『まア、それは何うでも好いが、兎に角君の信用を得てることは非常だ。僕ばかりぢや無い、行く度に誰も皆な君の噂を聞かれるツて閉口したツけ。昨日などは、佐々木さんはちつとも來ない、何うか爲たんですか……ツて意味ありけに聞くぢやないか。僕は既のこと、すつかり打明けて、先生の室の前の室に別嬪が居るものですかと言はうと思つたが、そこは僕の場合、咽喉まで出たのを嚙殺して、別に何といふことも無いんでせう、今度は伴れて來ませうと言つて置いた。實際、忝けないだらう』

『忝けないねえ』

『けれど……』と他の一人は傍より口を挿んで、『けれど、未亡人は知つてさうだぜ！』

『何うして?』と自分は少し心が動いた。

『何うツて言ふことも無いが、誰か饒舌つたものがあるかも知れない。僕も種々なことを聞かれたよ、勿論、君の不利益になるやうなことは饒舌りはせんが……』

『小久保が饒舌つたんだらう』と自分は言つた。

『小久保！ 左様、奴だ』

と思當つた處あるものゝ如く、手を拍つて、『たしかに奴だ！』

『奴、少しは運動してるのかね？』

『少しどころか、奴の運動はそれア、盛んな者だ。奴の事だから、本尊様よりも何うかして未亡人の機嫌を取らうと思つて、その詔諛と言つたら、それア、實に醜體極る。だから、我々も彼奴と一所に行つたことは無し、彼奴も我々と一緒に行つちや、話が甘く出來ん者だから、何時もこつそりと一人で出懸けて行つて、令嬢を伴れ出して散歩したり、未亡人の御躰の塵を拂つたり……』

『御躰の塵は好い！』と小村は笑つた。

『だツて、女だ、鬚は無いからナア』と吉田（他の一人の名）も笑つて、『本當に、彼奴ア、僕は昔から嫌ひだが、あんな風上に置けぬ奴は有りやせん。今度の運動だつて左様だ。令嬢が好いとか、家庭が暖かいとか、さういふ處に惚れたのではない。金に惚れたのだからナア、金と、男爵になれるといふより外に意味が無いのだからナア』

『けども、未亡人は怜悯だから、其手は食ふまい』

これは小村。

『まア、今の處では食はんさ。何しろ我々が行つちや、奴の悪口ばかり言ふのだもの。けれど、奴も中々あれで旨い處があるからナア、令嬢などを籠絡することに就いても、非常に力を盡して居るからナア、永い中には何とも知れん』

『それは左様だ』

自分は黙つてこの話を聞いて居た。不意に樺島令嬢の愛嬌ある眉と眼と、今迄一緒に伴れ立つて歩いた娘の美しい姿とが相前後して自分の眼前に顯はれて、胸には一種名狀せられぬ感が暴風雨の荒れた後の佗びしさを以てひしとばかりに迫つて來た。この感は既に幾度か經驗して居るので、これが或は自分の戀の運命を司れる盲目の力であるかも知れぬ。

一町程黙つて歩いた。

『何うだ、これから行つて見んか』

と小村は誘つた。

『丁度夕餐時分になるぢやないか』

『御馳走させるさ、御氣に入りの佐々木君を引張つて行くんだもの』

『行つて見ても好い!』  
と自分は應じた。

で、我々は路を左に取つて、其の高原の上なる樺島男爵の邸へと志した。

一一

旅亭に歸つたのは其夜の九時過であつた。樺島邸の晚餐。——風通の好い涼しい室で未亡人が心を盡した西洋料理を食しながら、自分等は何んなに面白い談話に耽つたであらうか。相變らず自分の話が一場の中心となつて、洒落も言へば氣焰も吐き、批評もすれば皮肉も言つて、我々の學校の寄宿舎時代もそれとなく思出さるゝばかり、それは随分賑かなことであつた。終ると、エルダーの琴、ヤンガーのピヤノ、麥酒に酔つた我々の中からは、詩吟を遣るものも自から出て、小村の赤ら顔で謡曲を唄つたのも、丸で眼の前に見えるやうな。月光、水聲、山影……  
歸路の興もまた忘れられぬ。

廊下を通つて、室に入りざま、前の室を見ると、中尉は横になつて新聞を見て居る。娘は机に肘を附けたまゝ、これも小説に讀み耽つて居る。弟も妹も何處に行つたか姿が見えぬ。老婦は自分の姿を認めて、

「今お歸り」

と言つたので、娘も中尉も頭を擧げた。

『大變遅いのねえ、何處に行つて居らした?』

娘の顔には先程の不愉快はもう残つて居らぬ。

『樺島さんに行つて、御馳走に爲つて來たです』

と餘り音無く自己の室に閉籠るのも變なので、其儘、其室に入ったのである。

『樺島さんには好い嬢様が居らつしやると言ふぢやありませんか?』

と笑ひながら老婦は問うた。

自分の答ふるのも待たず、

『あの此間逢つた?』

と娘も言つた。

「え、あれは妹の方です。けれど、令嬢より未亡人が面白いです。人は、娘が居るから、大學生がよく行くと思ふですけど、それは左様ぢや無い。未亡人が非常に書生を好きで、行くと、色々御馳走を爲たり何かしたりして、それは實に如才が無い。其上、話が好きでしてね、何んなものにも口が合ふ」  
『樺島の後家は元、藝妓だつて言ふですナ』

と黙つて居た中尉は突如に言つた。先生、まだ晝間の不快を念頭から離さぬと見える。

『そんな評判ですけど、虚言でせう。現に、實家は貴族院議員ですから』

『よくは知らんが——餘り評判の好い未亡人では無いですナア。僕の知つてる大尉に、よく知つてるものがあるが、非常に悪口を言つてる……第一、若い娘を持つて居ながら、大學の學生などを集めるツて言ふのは不埒だ！』

『それは見解が違ふからでせう』

『見解つて、何う？』其言葉は甚だ尖つて居る。

『昔の道徳から言へや、それア、非常に不埒な事に相違ないです。けれど、今はさういふ事を言つて居る時代では無いと思つて居る人も多いでせう。第一娘を多くの青年の中に出すといふことも、一利一害で、全然悪いといふ事は出来んですから。娘の心さへ確乎して居れば、監督さへ充分と施してあれば却つて未來の夫を多くの中から定めることが出来て、非常な効果を得るかも知れん。未亡人はさういふ事に就ては、非常に新しい考を持つて居るのですから』

『新しい考か何か知らんが、斷じていかん』

眞赤に爲つて居る。

自分は心中に冷笑しながら、『斷じていかんと言はれるから、即ち、僕は見解の相違だと言ふんです。

僕は古昔の道徳が好いか、新しい道徳が好いか、それを議論してゐるのではない』

『分つた！ 僕は斷じて與せん……』

『それは好いです』

自分もむつとした。

不圖、廊下に足音が聞えたと思ふと、若い十五六の美しい婢の姿が其處に顯れて、

『杉田さん（中尉の名）此方に居らしてね』

『唯、居る』と横になつた身を立上ると、

『今、御室に上つたら、御不在ですから、屹度此方に居らつしやるでせうと思つて……これが、今参りました』

と渡したのは、一通の電報！

取る手も早く、慌て、其電報を見る眼の鋭さ！ それが忽ちぎらりと光つて、手が急に少しく戦へる。

『何處？』と娘はやさしく。

『む、聯隊の中隊長から』

『何ですッて』

『何だか、事情は解らんが、スグカヘレと言つて来た』

『左様』と娘も少し躊躇して、『何か用でも出来たんでせうか、まだ一週間には爲りませんわね』

『十日、十一、十二、十三、十四とまだ五日にしか爲らん』と言つた顔には今迄の擬勢は消えて、非常に困つたやうな面影が顯はれて来た。

『スグと言つたツて、今からは歸られませんわねえ』

『それはとても駄目だ、これから車で駛らせたツて、西那須野までは五里ある。西那須野には夜中の列車は停車せんから、矢張明日の朝でなければ汽車には乗れん』と言つたが、獨語のやうに、『これだから、軍人は厭だと言ふんだ！』

自分は室に戻つた。普通から考へると、自分はこの電報を嬉しき雁の便にも増して喜んだと思ふであらう。いや、左様なければならぬ筈である。然るに、自分は喜びは喜んだが、二三日以前のやうに手の舞ひ足の踏む處を知らぬやうな情は起さなかつた。自分は前にも鳥渡言つて置いた通、自分には非常に熱する情と非常に冷える情とが絶えず烈しく往來して居る。熱することも早い、冷えることも早い。否、熱するのが熱するのではなく、冷えるのが冷えるのでは無いやうなことをり／＼ある。實に、自分ながら自分の性質が解らるので、何故かういふ場合にかういふ情が起らんかと疑ふやうなことが幾度もあるが、しかもこの疑問は遂に解けた例しが無い。まア、この戀愛談に就て判断を下して見ても、普

通ならば、汽車などで一寸美しい女に逢つて、それが結約の男と温泉場に來て居たからとて、自分の起したやうなあんな烈しい情熱を起すものではない。また、起したにしても、愈々それが物になれば一層烈しい情の境に沈んで行つて、自己を忘却して了ふやうにならなければならぬ。それであるのに、何うして其時自分の情熱が起らなかつたか。或は言ふかも知れん、貴様はもう其時には樺島の令嬢に心が移つて、此方の娘には徐々厭氣が差して來たのだ、と。けれど、僕は何うもさういふ事は思はれん。其夜、樺島家に行つたからとて、左様心を動かしたといふ譯でもなく、實際、僕は娘にラブして居つただから。

或は安心したのかも知れぬ。娘の此身に多少の意を有して居ることは最早明白である。結約の夫が有らうがあるまいが、其の靈魂の一部と此の靈魂の一部と相觸れて無窮に光明を放つて居ることは、最早争ふべからざる事實である。中尉の居ると居ないとは何ぞこの戀に關せんと思つたからかも知れぬ。――けれど、それならば何故中尉の居らなくなるのに就けて一層其熱が燃えぬであらうか。

左様は言ふものゝ、其夜は多少の注意を拂つたので、娘の舉動に就いては更に眼を離さなかつた。中尉は非常に躊躇したやうな様子であつたが、長官の命令は綸言に均しと言はれたる陸軍に籍を置いては、流石にそれに背くことも出来なかつたと見え、遂に明朝六時に此處を立つて西那須野の三番に乗ることに決めたらしく、行李やら靴やらの組合せに忙はしい様子。娘は中尉の室に行つたまゝ、一時が鳴

つても歸つて來ぬので、氣に懸るまゝこつそり三階の其室に行つて見ると、其一室には洋燈が晝のごとく點されて、中尉の丸い毬栗頭と娘の高島田と老婦のおばことが其の障子に晝くがごとく映つて居る。老婦が附いて居れば大丈夫！と安心して、室に歸つて、床に入つて居ると——やがて、老婦と娘とは歸つて來た様子で、蒲團を展くやら、寢卷を着るやら。

それが濟んだと思ふと、二時が打つた。

自分は熟睡して了つた。

二二

『今朝送つて行らしつて？』

『え』

『何處まで？』

『橋の少し向ふまで』

『別離が酷かつたでせう』

娘は黙つて答へぬ。

『それに、僕も送る積りで居たんですけれど、昨夜遅かつたものですから遂い寢込んで了つて……そ

れから』と言ひ懸けて、少し躊躇して、『それから御氣の毒なのは、昨日、誘はないで、貴嬢と一緒に散歩に出懸たものだから、非常に感情を害して居らしつたやうですね』

『本當に困つて了ふのよ、何故あんなに邪推深いんだか……考へると、厭になつて了ひますわ』

『だって、貴嬢を愛することが深いんだから、結構ぢやありませんか』

娘は黙つて、少時歩いたが、急に、

『けれど、佐々木さん、愛するといふのは何う言ふんでせうね。女の自由を束縛するといふこと？』

『そんな事は無い』

『だって、私は左様思ひますわ。何誰だなたを見ても、愛すれば愛する程、屹度束縛しやうと爲ますから』

『それは本當に愛したと言ふのでは無いでせう』

『左様』

『愛すると、束縛するとは違ふですからナ。束縛されると思ふのは、それは相愛で無いからでせう』

『相愛』と少時考へて、『それは左様ね……相愛なら、そんなことありません譯ね』

『無いですとも……相愛なれば、束縛されるのが、却つて嬉しい、執拗されるのが却つて嬉しい』  
成程と思つたらしく孝子は點頭いた。そして深い深い沈思の境に陥つて行くのであつた。これは、か  
の中尉の發つた日の午後、娘と共に鹽原の西部の高原を歩いて、新湯の方に通ずる路を一步／＼先へ先



へと進みながら交されたる會話で、自分は娘の胸の常に似ず甚だ幽鬱に傾いて居るのを認めた。野は既に満面の秋で、萩のこぼれの紅なのや、薄の穂の薄赤いのや、女郎花の美しいのやが、これからは己の時代であると言はぬばかりに咲き満ちて居る。谷を流るゝ溪流の音、それにも既に一種の淋しい悲しい調を包んで、雲の色の薄く日に照されたる、これからの秋の山の淋しさも坐ろに胸に迫るのであつた。

『私などは不幸福ですわねえ』

『何故？』

『何故ツて……御覽になつても解るでせう。私は束縛されるのを嬉しいと思ひませんもの』

『そんな事は無いでせう』

『無いことがありますものか。私は本當に厭になつて了ひますわ。此間なども御覽の通りでしたし、今日歸る前にも、何んなに種々なことを言つたか知れませんのよ』

『何んな事を』

『何んな事ツて、お前は私の妻ぢや無いか、まだ、結婚こそ爲ないが、お前ももう私を夫と思つて呉れるだらう。思つて呉れるなら、一緒に歸れ、と言ふのですよ』

『何故？』

『こんな處に一人置いて行かれんと言ふのですよ』

『何故でせう？』と態としらばくれて問うた。

『こんな若いものゝ多い處には、何とか彼とか申しました。つまり氣に懸るのでせう』

『つまり、貴嬢のことを深く思つてるからです。寧ろ感謝せんけりやならんぢやありませんか』

『それが……私は厭なのですわ。人を一度信用したからにや、そんな心配なんぞ爲ないでも好いぢやありませんかねえ……それに、妾だツて、來てまだ一週間に爲つたか爲らんばかりですもの。そんなことは出來んと言つて遣りましたわ』

『さうしたら、何う爲ました？』

『ぢや、御母様に來て頂くか、何うか爲やうと申して行きました』

『御母様は御出になりますか』

『えゝ、參るかも知れませんが、左様でなくつても、都合が出來たら參り度いと申して居りましたから』

二人は黙つて歩いた。

『嗚、僕のことを言つたんでせうね？』と少時して自分は一步を進めた。

『え……』と娘は少し躊躇したが、『え、申しましたよ。大學生などは輕薄な者だから、あんな者に惑はされてはいかんと幾度申しましたか知れませんか』

自分等は猶種々なる事を語り合ひつゝ、炭焼澤の方へ通ずる路を久しく遠く歩いて行つた。娘の性格の一般は既に前から知つて居つたが、しかもこの散歩中、其の全部に觸れることが出来たと言つて差支ないので。自分の觀察する處によると、娘は非常に感情家である、非常に烈しい情熱を有して居る。けれど感情家、情熱家にも二つの種類があることを記憶しなければならぬ。即ち意志の力が伴ふと、それが此上なく猛烈なるものになつて、火山の噴火するやうな大活動を來すけれど、それが伴はない場合には、徒に煩悶し、徒らに涙を灑ぐばかりで、遂に一箇の悲壯をすら構成せず終つて了ふ。娘の性格にはどうも意志の力が無いらしい。やさしい處が多いと共に強いしつかりしたところが乏しいやうに思はれる。それから、空想に富んで居ることも此女の特色で、其頭には絶えず複雑したさまざまの事が巴渦のやうに簇つて來ると見えて、歩きながら、話し懸けても、丸でうはの空で返事をする事が度々ある。そして氣が附くと、私今他のことを考へて居りましたものですから……と謝するのが癖。

かの女の自分に對する戀、それはかの始めての朝、階子で顔を合せた時から、既に明かに穗に露はれて居つたが、自分の優しい言葉を聞くに就け、中尉の言語態度の甚だ自分に劣つて居るのを見るにつけ、その度数は次第に増つて、募つて、漲つて、果ては波瀾を起すばかりになつたのであらう。殊に自分の意外に感じたのは、中尉の發足した其日から、娘の態度は丸で一變した事である。今までは碌に口も聞かぬやさしい娘らしい趣を爲して居つたのが、其日からは、其眼、其胸、其體が總て自分に向つて磨いて來るやうで、口を聞いても、それが深い意味を自分に傳へて居るとしか何うしても思はれぬ。

であるから、自分にしてもし始めの日の如き狂熱を有したならば——否、一點なりとも浮薄漢、嫖蕩兒の血が此身に混じて居つたならば、忽ちそこに一場の波瀾を捲き起して、耻づべく又卑むべき結果を來したに相違ないのである。

現に、それから以後の一週間！自分等は何れ程、滿樓の浴客の注意を惹いたであらうか。自分は最早其娘の室の前の室に居る必要が無いのと、寧ろ其室に居つては人目を惹くの恐れがあるので、其翌日に、三階の元の六疊へと移轉したが、その三階の間はそれから實に衆客の眼の集るところと爲つたのである。

今でも僕は内務省に行くと、杉山秘書官、政木參事官などから盛に讎弄されるので、僕の鹽原時代と言ふものは、彼等の間柄に頗る有名なるものに爲つて居る。何でも其時先生等は二階の下のすぐ向ふの室に來てた相で、僕の室に娘が入つて來ると、刮目して其の一舉一動を見てたといふこと。

『君の室に其娘が朝早く女郎花やら桔梗やら萩やらを一束にしたものを持つて行つたことがあるだらう』『夜、遅くまで話し込んで、女中に驚かされたことがあるだらう』『妹と弟とに少年世界と中學世界を遣つて、たらしめたことがあるだらう』『小説を讀んで聞かせたことがあるだらう』と一々擧げられれば

擧られるほど皆なそれが心に思當るので、自分は尠ならず吃驚したことがあつた。であるから、誰も皆、僕等の間柄を見ること非常に深く、もうあの娘は必ず操を破つて居ると思つたに相違ない。

僕に室の周旋を爲た女中が、ある日、

『貴郎、酷いのね』

と笑ひながら言ふから、

『何故?』と聞くと、

『何故も無いものよ、遂々、悪戯を爲すつたぢやありませんか』

と強く背を拍つた。

けれど僕等の間柄は決してそんなに深くは無かつたので、互に往復こそは爲るが、互に夜深まで物語に耽ることはあるが、しかも厭らしい話などは爲たことは無く、勿論操などを破つたことは無い——これは自分が誓つて言ふことが出来る。

けれど何も彼も露骨に打明けて御話を爲れば、その慾情の起つたことは二度あつた。

一度は娘と夜深まで物語りした時で、其時の話の題目に爲つたのは、何でもハイゼの短篇の話のやうに記憶して居る。御承知の通、パウエル、ハイゼは獨逸の現代の作家中でも、男女の情に就いて非常に重きを置いた小説家で、ことに其情を美しく描くといふので、頗る評判になつて居る人。其時、話した

のは、確かロチイカといふ百五十頁ばかりの短篇で、別段大したものでも無いけれど、其情の幽婉なのと其話のやさしいのとは聴者の娘の涙を誘つたばかりでなく、自分ながら何となく物哀れに悲しくなつて、轉た悵然として人生の不幸を思はしめた。ふと見ると、娘は英吉利卷の束髪に紫のリボンをして、机に凭りかゝつた儘、低頭き勝に、頻りに深い物思に沈んで居る。洋燈の和かな光は斜に浴後の薄化粧をした顔を半面に射し渡つて、すらりと長い襟首のかゝりの美しさと言つたら、レニイの名畫を其儘に浮かせたやう。

娘は猶少時黙つて、深く深く物を思つて居たが、俄かに、

『何うせ、女といふものは、悲しいものですわねえ! 私なども……』

言ひ懸けて途中で止した。

自分も何か言はうとしたが、適當な言葉が出ない。

また、少時黙つた。

ふと、娘は、

『もう、遅いのねえ、十二時……』

と言つて、別れて、廊下へ出た。

此時である、自分の體に暴風雨のやうなある慾情の烈しく盛んに燃え渡つたのは! 何故、自分はか

の女の……と思ふと、居ても立つても居られない心地がして、其儘後を趁つて廊下に出た。娘と自分の距離があはれ今十間近かつたならば、自分は自己を忘却して居る身の、走り寄つて、後より抱き緊めて、烈しい接吻を施したのであらう。けれど、幸か、不幸か、其距離は自分に更にある思慮を興へる丈の隔りを有して居た。

今迄言はなかつたが、自分は肉體と精神とは互に相一致せなければならんといふ考を持つて居たので、戀愛に就いても、滔々者流が肉體と精神とを相離して議論するのを太だ要領を得ざるもの、我儘勝手なもの、意氣地の無いものと卑んで居た。自分の精神的に深く相愛したもの、一生をも相借に……と堅く覺悟したもので無ければ、肉體にも必ず相觸れんとは自分の年來の主義且つ理想で、自分は随分女からも戀せられ、女にも戀したが、これだけは誓つてこの身の潔白を表白することが出来るので、かの故郷の小さい墓に對しても、さる汚點だけは留めなかつた。

廊下に於ける娘の距離——この距離の間に於て、自分の胸に先簇つて起つたのは其思想であつた。實際、自分のかの數間先に行く黒い影に對してさる眞面目なる堅い戀愛を有して居るであらうか、この慾情はある浮華なる考から起つた一時の情ではあるまいか。

一時の情、確かに一時の情である。

けれどこの一時の情が人間終生の基を作るのではあるまいか。自分の戀愛の將に成らんとして何時も

成らざるのも、この一時の情を恣にする勇氣を缺くが爲ではあるまいか。一時の情と言へば、甚だ浮華に、甚だ輕薄に聞えるけれど、これは戀愛の情のある時ある刹那の靈に觸れて電光の如く閃めき出た純粹のものではあるまいか。

自分は驅けて娘の跡を追つた。けれどももう遅かつた。

他の一度は後に解るから此處には言はぬ。

兎に角二人の戀を測度器か何かで料るとすれば、始めは自分の七分娘のが三分であつたものが、段々自分のが低下すると同時に、娘のはそれに反比例を以て上騰し、今では娘のが七分自分のが三分といふやうな反對な結果を呈して來た。であるから、娘の自分に對して打開けたる態度は、それは實に驚かるゝばかりで、もし自分に立派な覺悟さへあつたなら、それこそこの戀は忽地にして百度以上の熱を得たに相違ない。

それから猶言はなければならぬ事がある。それは他では無い。娘が結約の未來の夫を有つて居ること、自分がかの樺島の未亡人の極點の信用を得て居るといふことが、多少——否、或は大なる障礙をこの一場の戀愛に與へたといふ事である。

ある日、小久保が來て、

『大分、滿洲に手を擴ろけたな』と言ふから、

『君は?』と聞くと、

『僕も手を束ねては居らんさ、見給へ、朝鮮の状況はかういふ風だ!』と言って、袂から搜出したのは一葉の寫眞! ヤンガー令嬢が最近に撮つた束髪の美しい姿で、裏を翻へすと、奇麗な字で、妾が愛する小久保文學士、琴子と書いてある。『妾が愛する』の五字は太甚しく僕の感情を害したので、かうしては居られんといふ氣が簇々と起つた。

『君のも少し話せ!』

『いや、僕のは駄目だ』

『だって、大分評判だ!』

『評判でも何でも、自分が下した手を留めて居るのだから駄目さ』

『早く言つて』

『まア、何うでも好い』自分はむしやくしやくしたから會話の腰を折つて了つた。そして其夜樺島邸に行つた。

一三

『御母様が入らつしつてね』と赧顏の女中がにや／＼笑つて居る。

『御母様ツて、誰の?』

『あのお娘さんの』

かう聞いたのは、中尉が發つてから八日目、母が來るといふ事は娘からも聞いて知つて居つたし、中尉の娘に寄越した數通の手簡、娘は其手簡を残る處なく自分に見せたので、昨日まで確か其手紙は六通、殆ど毎日と言つて好い。中に書いてあることは熱い情、烈しい言語、殊に、娘が他の男に心を移しはせんかと、それを憂ふること太甚しく、讀んで噴飯すやうなことさへをり／＼はあつた。けれどそれに對して、娘は満足の返事をも與へぬらしく、最近のものなどは殊に烈しく其所爲を攻撃して、何故返事を寄越さん、何故黙つて居ると、顔を見たならば鐵拳をも振りかねまじき語氣。(其端には近日愈々母様に行つて貰ふからと書いてあつた。)でも解つて居たので、別段驚きも爲なかつたけれど、さりとしてかう早く遣つて來やうとは思ひも懸けなかつた。

成程、今朝はそれで娘は來ないのだなと點頭いたが、兎に角行つて見やうと思つて三階を下りた。

母といふ人は、汽車の中で見たので、よく知つて居る。上品な、愛情の濃かな四十三四歳の婦人で、自分が其室に入ると、莞爾と愛嬌を含んだ、色の白い、老いても猶美しい姿が、先第一に眼に映つた。座敷には旅靴やら、信玄袋やら、風呂敷包やらが散ばつて、今、東京の菓子で茶でも煎れたか、茶椀を取つて一口飲み懸けるところであつた。娘、妹、弟、老婦は皆な丸くなつてそれを取巻いて。

自分が入ると、愛想よく迎へて、

『いろ／＼御世話になりました相で』

と丁寧な辭儀を爲る。

すぐ言葉を續いで、『昨夜、遅く参りましたものですから、まだ此の通り散ばつたまゝ、片附けも致しませず、御伺ひしやうと思つて居りましたが……甚だ失禮ばかり致しまして……』

其の調子の好さと言つたら、少しも角立つた處はなく、さりとて外邊澤山の、見得を張るといふ趣もなく、一言一舉動、皆肺肝から出たまごゝろと言つたやうな口振。早く母を失つた身には、そゞろにかかる母を持てる娘の身が羨まるゝのであつた。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

處が、驚いたのは、其日一日娘は一度も自分の室に遣つて來ぬばかりか、其翌日は、親戚の者の逗留

して居て萬事都合よしの口實の下に、一族向ふの香風樓に轉寓するといふ噂。

自分は流石に不愉快の満身を襲ふのを覺えた。

ふと、四時頃、湯殿の入口で邂逅したから、

『何うしたのです?』と言葉優しく聞くと、

娘は後を振返つて、湯殿の方を見て、(母親は入浴して居るのである)

『大變叱られましたのよ』

と悲し氣な低い聲音。

『何うして?』

『何うしてツて、後で緩り話しますがね……』

『御移居になるツて?』

『え』と愈々悲し氣なる聲音。

『何うして』

扉を排して、母親は手拭を下けて出て來た。

『おや』と自分を見て言つた。

『御引越なさいますツて?』

『え、……實は、此方に居り度いので御座いますけれど、丁度、親類が向ふの香風樓に参つて居りまして、是非、來いと申します者ですから……これなどは(娘のこと)折角御馴染になつたのを移るのは嫌だツて達つて申しますけれど……けれど、移ると申しまして、直き前ですから、何卒ちよいちよ  
い』

『難有う?』

と會釋して自分は扉を排して浴場に入った。

晝の湯には浴せる人の影もなく、廣い湯殿は闐乎として、湯の笈を傳ふ音と、水のもく／＼と湧出る音とが互に面白く聞えて居るばかり。自分は漲り渡る玲瓏たる温泉の中に身を横へて、やゝ傾き懸けた夕日の暑い光のきらぎらと前の色硝子に反映するのを見ながら、何んな深い煩悶に耽つたであらうか。これがこの戀の終結かと思ふと、何とも言へない口惜い、悲しい、憤れ度い心地が込み上げて、一度冷を懸つた娘に對する情が再び烈しく燃え上つて來るかのやう。『これで終結！ そんな馬鹿なことがあるか』と、自から口に出して言ふと、何故それでは今迄娘の烈しい熱情を受けなかつた。娘はあれ程まで汝を戀して居つた、汝の一言は以てこれを全うすることの出來る程の情愛を捧けて來た。それであるのに、汝はそれを受けなかつた。この平凡なる終結はこれは自然の結果である。汝の自から來たしたものである。悔むだけ愚だ。

自分は自暴自棄に髪毛を撈つた。

浴室は夕日の影に充されて、しんとして居る。湯の音、水の音の外、遠く流るゝ箒川の水聲はさながら他界の響を聞くかのごとく、極めて微かに聞えて居る。あゝこの一箇の煩悶兒はこの靜かなる光景に如何に面白い反映を爲したであらうか。

## 一四

翌日になつても娘から消息が無い。

果して終結！

けれどまだ何とか言つて來さうな者だ。あれで満足して、終結を告げて了ふやうでは、娘も實に戀愛に淡いもので、情熱などの味は共に語ることが出來ぬ程哀むべき女性だなど、意氣地なく自分で自分を慰めて、獨り孑然と三階の一室に籠つて居た。かういふ時には、第一にかの樺島邸が思出さるゝ譯であるけれど、否、二度三度それを思ひ出して、寧ろ滿洲は思ひ切つて朝鮮征伐と出懸けやうかとすら考へたのである。けれど、何うしても其氣が出ない。朝鮮は捨つべからざるものであるとは充分心の底で承知して居りながら何うしても行く氣にならぬ。

午後、餘り懊惱するので、少し散歩しやうと思つて街へ出た。すると、一輛の俥が急に橋の方から勢込んで走つて來て、其儘自分の立つてる處を右に折れた。見るとも無く見ると、俥の上には軍服を着け佩劍を帯びたかの中尉の姿！

いよ／＼終結と自分は思つた。

愈々懊惱する心を自から鞭撻して、山の方へ躡躑と出懸けて行つたが、常に見る山も水も、草花も樹

木も、更に何等の感興を自分の胸に與へぬので、寧ろ引返して、室で晝寢でも爲た方が増しと、其儘、街を横つて旅亭の方へと歸つて來た。すると、荒物屋と唐物屋との細い小徑から、一人の頑童が不意に飛出して來て、

『これは、旦那だアね』

と一通の紙切を渡した。

見ると――

拜啓妾は愈々明日此地を去ること、相成候。中尉も只今東京より參り、母と相談の上、一刻も早く東京に歸る方可然との事に決定仕候。其前に、是非貴郎に御目に懸らねば叶ふまじきこと有之、今夜九時頃、樺島様の別莊に行く路の野原に必ず参るべく候間、貴郎様にも必ず御待受被下度候、孝子と鉛筆で小さく記してある。

『旦那だアね』

『左様だ』

『よければ返事は要らねえ言つた』

『よし、よしと言つて呉れ』

と十錢銀貨を一箇握らせた。

懊惱の雲、不快の霧は俄かに拭ふがごとく霽れ渡つて、最後の今一幕といふ氣が簾々と心頭に集つて來た。この手紙から推せば、娘はまだこの身に屬して居るのは確かである。母親が來やうが、未來の夫が來やうが、その生殺與奪の權はまだこの手中に握られてあるのである。

さて、生かすか殺すか、與ふるか奪ふかといふ點に就いて、いろ／＼さま／＼に考へて見たが、何うもそれが其時の頭腦では充分に判斷することが出来なかつた。あんな女に結婚して何うする？と言ふ考が簾々と起ると思ふと、續いて眼の前に顯はれるのが其の女の美しい顔！ 汝は富貴を望み、榮達を欲するかも知れぬけれど、戀は一生の生命であるぞ。戀なき家庭を作つた程、無趣味で、乾燥で、さながら枯野のやうであることは、汝も會て思ひ、會て見、會て言つたことである。それであるのに、この情熱を捨て、汝は功名富貴と婚せんとするのか。

何うかして、自分は頭腦を決めて置きたいと思つた。その最後の會見に臨む前に、右すべきか或は左すべきかをすつかり明かに考へて置かうと思つた。けれど、晚餐の箸を取る際にもまだその問題は決しなかつた。否、洋燈を點けるやうに爲つても、今一時間と迫つて來ても、家を出て、其高原に志しても、依然として自分の心は進み得ざる兩頭の蛇！



待つて、待つて、待ち勞れて、もう歸らうかしらんと思つたのも幾度。夏の夜のことであるから、寒い何のと言ふのでは無いが、山は早既に秋の氣の、露の結ぶこと平地よりは早く、薄のなびき、女郎花の點頭、そゞろに物哀れに虫の音もすだくので。

殊に、闇の夜の星と謂つては一つも無い。

夕照があんなに美しかつたのに、否、家を出る時には星が降るやうに出て居つたのにと見廻すと、闇の夜であるから、よくはそれと解らぬけれど、鷄頂山の絶巔あたりから懸けて、南は高原、二荒、北は那須一帯の山脈に眞黒な雲が蓋のやうに蔽ひ冠つて、雷光がする度に、その悪魔のやうな形、馬の走るやうな姿、山の上に山を作つて孰れが眞の山かと思はるゝやうな凄じい光景が歴々と眼に映る。

夕暮に一降するのを例とした驟雨は、段々時刻が遅れて、今は夜となつたのである。

『つまりなく待つて、驟雨に逢ふなどは愈々愚だ。いつそ歸らう』

と呟いて歩き出したが、また立留つた。

『けれどこれで歸つては愈々つまらん。……娘にしても、あの手筒を寄越した後だから、歸つた後に遣つて來まいものでも無い。それこそ、運命を態々失ふのも同じことだ』

で、自分は時計を見たが、暗くつて、何うしても解らん。少し待つて居ると、果して電光一閃！  
時計は十時前十五分を指して居る。

一閃また一閃、その度毎に黒い凄じい光景が次第にわれに迫つて來るやうで、果ては確を鳴らすやうな遠雷の音も聞え出した。

と、不意に足音、白い姿。

『孝子さんぢや無いか』

『佐々木さん！』

と娘は突如自分に取附いたので、自分はしたゝか驚いた。雷光は娘の白い顔を照した。

『何うしたのです』

『いゝえ、何うも爲やしませんけれど……』と呼吸を苦しげに吐いて、『この天氣ですから、恐くつて』

……それに、今少し早く出て來やうと思つたですけれど、何や彼やと』

『いよ／＼明日！』

『え』

と言つたが、娘は突然自分の手を執つて、

『佐々木さん！』

晝ならば、——否、せめて月夜ならば、自分は此時其娘の顔に表はれた無限の表情を見ただであらう。やさしい口、美しい眉、感情に燃え渡つた若い血、麗はしく打戦ゆる黒い瞳などいかに自分の心を惹い

たか知れぬ。けれど生憎に闇！

電光がまた過ぎた。娘の顔には涙の溢れるのを自分は認めた。

『佐々木さん……私は……』と思ひ切つたといふ風で、『私は、何んなに貴郎のことを思つたか知れませんが。御存じないかも知れませんが、私は貴郎を昔から知つて居りますわ。昔からよく知つて居りますわ。ですから、貴郎がこの温泉に来て居つたことを知つた時には何んなに嬉しく思つたか知れませんが。けれど……けれど、妾には』

とかの女は涙に碍へられて満足に言へぬのである。

其の言葉、其の熱情、自分はそとろに胸の戦ゆるのを覺えた。

『佐々木さん』

と突如、自分に寄添つた。

『妾の心……妾の心……が解つて……』

自分はこの娘がこれ程烈しい感情を持つて居やうとは思はなかつた。この最後の一幕がかゝる烈しい情熱を以て自分に迫つて來やうとは夢にも知らなかつた。娘は手をしっかりと握り緊めながら、其の血汐の充ち渡つた體を次第に自己の體に寄せるのである。

自分は思はず手を堅く握り緊めた。

『佐々木さん、解つて？』

と低いやさしい聲音。

自分は黙つて立つて居た。前に、自分が後で解る！と言つたのは、この時で、暖かい娘の呼吸、やさしい娘の壓迫を感じると、忽ちある一種の慾情が電氣にでも觸れたやうに自分の總身に集つて來て、いつそこの娘を……と思つた。汽車の二時間中、絶えずその美しい姿に憧れたかの絶世の美人は今汝の腕に抱かれて、汝の一呼吸を待ちつゝあるのでは無いか。何故に汝は躊躇する。何故に汝はそのやうに臆病である。結約の夫？ そんなことを言つてる場合で無い。

汝は今迄かういふ場合に幾度遭遇したのか。かの雪子をして利根河畔の小さき墓とならしめたのも、かの隣の娘をして烈しい失望に陥らしめたのも、皆なこの場合に臨んでの汝の勇氣の乏しかつた爲めでは無かつたか。

然るに今……また……

油然自分の胸に簇つて來たのは、何故自分はこの決行力を缺いて居るであらうといふことである。と、胸が殆ど張裂けるやうに悲しくつて、自分の腑甲斐ないのが一倍明かに頭腦に浮んで、自分は……自分は戀愛を敢てする資格が無いのだ！と思ふと、涙が兩頬を傳つて落ちた。

『私は何うしても……もう』

と娘は愈迫つて來た。

かの女は中尉とは如何にしても共に生活することが出来ぬから、これから遁けて呉れよと言ふのである。貴郎さへ私の心を受けて下さるなら、何んな苦痛も、何んな艱難も必ず忍ぶ。母は明日伴れて歸つたら、一刻も早く結婚させて了ふと言つて居つたゆゑ、今夜、一所に伴れ立つて、立退いて下されずば、最早妾の運命は決つて了ふのである程に……と娘は絶々と言ふのであつた。

これを聞いて自分は愈驚いたのである。やさしい美しい娘の胸、何方かと言へば、まだ半は小供らしい無邪氣な處のある娘の心と思つて居つたのに、かゝる大膽なることを敢てしてまでも、その欲望を遂げやうとするとは！ おのれの心の勇氣に乏しいのと比べて、實に豫想外に感じたので。

『そんな事は出来んぢやありませんか』

と自分は言つた。其聲は鋭かつたに相違ない。

『出来んと仰しやるの』

娘の聲も少し變つた。

『だって、考へたつて解る話ぢやありませんか』と言ひ懸けた自分の胸には愈々この幕もこれで終結！ といふ氣が簇々と起つた。『貴嬢には立派な結約の方も居らつしやる！ 私も文學士と肩書もつく身分（あんなことを言ふと自分は心中で自分を罵りながら）、そんなことは何うしても出来んぢやありませんか』

せんか』

娘は低い聲で泣き出した。

『考へて御覽なさい（自分は此時胸の思想と言葉とのいかに異つて居るかに心付いた。そして居ても立つても居られないやうな心地がした）貴嬢はそれ程までに私を思つて下さるのはそれは難有い。それなら何故今少し早く言つて下されんかつた、何故打明けて下されんかつた。今となつては遅い！』

娘は何も言はずにひた泣に泣く。

『それは、貴嬢のそれほどまでに思つて下さるのは、それは實に忝ない。一生忘れん』と少しく言葉を柔しくして、娘の顔を覗くやうに見入りながら、『けれど、考へて御覽なさい、貴嬢は結約のある身、親も許し人も許した立派な未來の夫のある身、そのやうなことを爲すつたならば、母様は何んなに嘆かるところとか知れぬ。それに、貴嬢は厭と仰しやるかも知れぬけれど、あの人もあれほどまでに貴嬢のことを心に懸けて、心配して居るではありませんか……、それア、私ア、嬉しく無いことは決してない。貴嬢のやうなやさしい方に、それ程深く思つて戴けば、それは私はもう満足で、一生決して忘るゝことは無い。』

いや、私も貴嬢を思はないことは無い。貴嬢のやうなやさしい、貴嬢のやうな美しい人を妻と呼ぶ人は何んなに幸福であらうと、羨ましく幾度思つたか知れんです。現に……汽車の中で御目に懸つた時か

ら、なつかしい人だと思つて居ました。ですから、この温泉場で御逢申した時は何んなに嬉しく思つたか知れんです。けれど、けれど、人の世には（何だ、下らんことを言つて居ると自分は心中に絶叫した）さう自由にならん約束があることを忘れ下さいますナ。人の世には……』

電光が烈しく閃いて、娘の袖を蔽つて泣いて居る姿がちらと見えたと思ふと、續いて、凄じい雷の響！ 見ると、既に黒雲は頭上に蔽ひ懸つて、其餘聲は股々と四方に轟き渡つた。

其響の終るのを待つて、

『人の世には、自由にならん約束と言ふことがあります。私がいかに貴嬢を御慕ひ申しても、その約束が……否、その運命が既にしつかりと決つて居る以上は、人は何うしてもそれを打壊すことが出来んです。私かもし貴嬢を伴れて遁ゆなどすれば、それこそ運命に負き、道德に負き、自然に負き——その結果いかなる悲劇を來すかも知れんです。いや、悲劇は厭はんとして、人間として甚だその義務を怠つたものになる。それですから、これは、御互に泣くより他に仕方が無い』

娘は又泣出した。

『實に悲しい。私は何故貴嬢に逢つたと思ふ位です。この位なら、こんなにして御別れ申さなければならん位なら、神が何故貴嬢を私に逢はせて、こんな悲しい考を起させたかと寧ろ憾みに思つて居るのです。お互に泣くより他は……けれど、貴嬢の厚い心は決して忘れん、一生記憶を繰返しては此の廣い

世の中に、私のやうな臍甲斐ないものを其程までに思つて下すつた貴嬢のあることを思ひ出します。……

……お解りになりましたらう？』

『解りました、よく解りました』

と娘は言つたが、涙は更に其袖を濡すのであつた。

ぼつりぼつりと落ちて來たと思ふと、山からは俄かに一陣の風が凄じく下し來て、雲の亂れ、雷の轟き、電光の閃めき、闇の野の尾花女郎花も俄かに荒涼たる趣を呈し、脚下を流るゝ溪流の音も、風を得てさながら吼ゆるが如き一種の長い凄まじい響を傳ゆるのであつた。闇の裡の山、山の上の雲、黒いのは孰れかと思ふばかり、不意に電光一閃！

續いて天地も震撼するばかりの烈しい雷鳴！

『降つて來ましたね』

と言ふより早く、驟雨は沛然として降り出した。

樹木皆風を生じ、溪流皆鳴れる間の路を自分等はいかに濡れ濡れて戻つたであらうか。娘はその後一言も言はず、自分より五歩六歩後れて、蹣跚と歩いて來たが、其の美しい黒髪、その艶なる高島田、紺縞珍の帯、白地の單衣の濡るゝをも更に頓着せぬと言ふやうに、引摺る駒下駄の音のみ佗しく自分の耳に聞えた。不圖、眼の前に電光が烈しく摩り違つたと思ふと、直ぐまた身も縮むやうな烈しい雷聲。この臍甲斐

ない身は一層この雷にでも打たれて了つた方が……と思つた時の悲しさ侘しさ、自分は未だに忘れぬ。  
林の角に来て、

『それでは……』

『左様なら』

二人は暗風黒雨の中に別れて了つた。

\* \* \* \* \*

翌朝、それでも出發するのを見送らうと思つて、溪橋の畔まで行つて見ると、俣が五六臺其の橋の袂に並んで居て、母親は娘、中尉、妹、弟などに取巻れながら、見送の親戚に頻りに挨拶をして居つた。自分が其處に顔を出すと、すぐそれを認めて、

『何うも種々御世話になりました』

と丁寧挨拶した。

中尉も快活さうに、

『ヤ、大層失敬しました。御歸りになつたら、ちと』

娘は一夜の中に非常に瘦れて、化粧を充分に施して居ても、何處かかう悲し相な哀れッぽい情が名残なく其顔に顯れて見えた。成べく眼を合さぬやうに避けて居る。

轎で俣に乗る、別離の言葉が打交される、車夫は曳き出す、見る／＼一臺、二臺、三臺、四臺と順序よく動き出して、三臺目の、妹と同車したのがそれ！ と見送つて居る間に、草に隠れ、林に隠れ、絶壁に隠れて、いつかそれも見えなくなつて了つた。只、箒川の流がそれを趁うて遠く遠く流れて行くばかり。

あゝこの戀も終つた！ と思ふと、侘しい悲しい感が簇々と起つて、後を追懸けて行きかねまじき氣になつたが、すぐ思返して、『さうだ、これから、朝鮮經營……』と獨り叫んだ。

眼に見えるのが、樺島邸、新式の海老茶袴の令嬢、ビヤノの譜、未亡人、功名富貴！

一六

それから三年経つた。

自分は首尾よく朝鮮經營にも成功し、高等文官試験にも及第し、その翌年、遂に樺島令嬢琴子とも結婚して、樺島男爵の名は新にわが頭上に冠せられたが、自分のやうな戀愛家は何うして愛も無い普通の夫妻生活に甘んじて居る事が出来やうか。花のやうな富貴、蜜のやうな功名に酔つたのも少時の間、その巧妙なビヤノにも何時か聞倦き、その華奢なる生活にもいつか倦みて、権力の下に寄る人の顔、諛言を呈する人の態度などにも此上なき憎惡の念を以つて迎ふるやうになれるある秋の日、ふと舊友の利根

河の畔に近き武藏の菖蒲村に僧侶となつて隠避して居るものあるのを想出し、行つて數日の閑を消すべく一人で出懸けた。

家を出ることが晚かつたので、東北線の久喜驛を下ると、もう短かい秋の日はとつぷり暮れて、天末に残れる残照の色も次第に薄れ去らうとして居た。菖蒲村にはこれから五里、今は東武線が利根川沿岸の川俣驛に及んだので、さして不便を感じなくなつたが、其頃は田舎道にけたましい喇叭の響、馬車の轍の跡は深く軟かい路に印して、その交通の不便さと言つたら、これでも文明を誇る日本の地かと思はれる位。ことに、自分の行つた時は、恰も五分前にそのいつもの一輛の馬車が喇叭の響を夕暮の静かな空に吹き立て、出て行つて了つた後で、別仕立の人力車で無ければ何うしても其處へは行かれぬとのこと。それでは車を呼んで來いと命じたが、三十分程して茶屋の若者は歸つて來て、生憎車は出拂つて町に一臺も残つて居りませんとの報知。

餘儀なく町の大通から少し右に入つた、古風な旅店の一室にさびしい一夜を過すことになつたが、この一夜は却つて自分に多くの興を興へたので、田舎の靜かな町の月は自分をして實にさまざまの追懷に耽らしめたのである。自分は三年間、塵埃と榮華との中に住んでいかにこの平和と幽靜とを望んだであらうか。せめて半日でも一時間でも好い、靜かに物を思ひ度いと幾度心に願つたであらうか。それが、ゆくりなくこの田舎の一室に満たされたのであるから、自分の興を催したのも無理では無い。

二階の障子を明けると、美しい秋の月の光はこの平和を見よとばかりに、屋根、庭、田圃に滿ち渡つて、<sup>はねつる</sup>結棒の風情ある影は黒く澄み渡つた空にくつきりと浮出たやうに懸つて居る。垣には虫のすだく音が降るやうで、ところどころに散ばつた茅屋には薄い燈火が微かに閃めいて、遠くには遠雷の轟くやうな汽車の響！と、不意に下婢が入つて來て、

『旦那さア、隣に壯士役者の演説がある相ですが、行つて御覽なさいませナ、行くなら、はア、切符上げるだアで……』

といふ。

壯士役者の演説！ 何たる田舎的趣味に富んで居るのであらう。この秋の月の夜に、この靜かな田舎に、渠等は何なることを語らうとするかと思つたが、其思想はすぐ昔の追懷に變つて、十年前の學校生活や、利根河畔のおもしろい記憶やらが果てしも無く自分の胸に浮んで來た。あゝ其の一夜！ 自分は座ろに昔にかへつて、夢に、故山の河の畔の小さき墓を訪ふたのである。

翌朝も此上なき好天氣、六時に車が來たので、朝食を匆々に掻込んで、急いで程に上つた。十一月の空はくつきりと晴渡つて、朝の風はそよりに肌に寒く、薄い外套の扣鈕を箝めても、猶多少の輕寒を覺ゆるのであつた。町を外れると、路はうね／＼と半は稜り半は残れる田疇の間に通じ、電信柱の向ふの松並木には、霧がそこはかとなく蔽ひ懸つて、見ると、畑から田から、森から、林から、薄い水蒸氣が

畝を爲して面白く騰つて居る。

並木松を越えると、用水堀の長い堤。

露西亞の小説家ツルゲネーフの小説にはよくかういふ景色が巧に面白く描かれてあると自分は思つた。用水の端には、萱、葦などが一面に生茂つて、其の水の泡を作つて靜かに靜かに流れて居る具合は、まことに一幅の繪畫である。まして、見るが中に、其の水蒸氣は薄い烟のやうに到る處に騰上して、其絶間から、遠く離れた村、森、神社などが見えたり隠れたりして、遂にはそれが空を蔽ひ、日を蔽ひ、田野を蔽ひ、果ては一間先も見えぬばかりの霧となつた。

過ぎ行く一村また一村、或は鶏犬の聲歴落たる竹藪の陰に人は見えずして忙しく輾る桔槔、或は清い用水の流れに、手拭を下けて顔を洗へる一人の老爺、或は三歳ばかりの小供を背負つて頻りに鄙歌を歌へる子傳、いづれの家、いづれの森からも、朝炊の烟が蛇のやうに靡き上つて、平和、豊饒の氣は到る處に充ち渡つて居る。

二里も來たといふ頃、車夫は轆を留めながら、

『旦那さまは、兵隊さんの人かね』

『いや』と答へて、『何故？』

『何故ちうことも無えが、えら兵隊さん入り込んだだ、昨夜は幸手に五六百も泊つたんべいか。これ

から、菖蒲の方へ行つて、今日は其處に泊るたんべい噂だ』

『何か事があるのか』

『いや、演習だんべい』

秋の機動演習！天高く馬肥え、戦争には實に此上もない好時節である。自分は親戚に軍人があつて、よく機動演習の快味といふことを聞かされて知つて居た。陣地の選擇が悪くつて、減茶々に敵に敗られて、全軍覆没の運に際會した話や、林の陰から突貫したのは好かつたが、敵が餘り遠いので中途で止して却つて敵に乗せられた話や、日の暮れ〜に村に着いて、やれ飯が食へると思ふと、折悪しく輻重が續かないで、十時頃まで餓を忍んだ苦しい話や、其他いろ〜の珍談奇話に自分の耳は熟して居て、何うかして、左様いふ面白い演習に一度は連つて見度いと幾度か思つた。その面白い演習を彼等は今この平野に行ひつゝあるのである。かう思ふと、胸が何だか引緊められるやうで、秋の蕭殺たる氣が更に深く自分に迫るのを覺えた。

此れがもし……と自分は直ちに空想を馳せて、もしまことの敵が利根川の沿岸近くまで押寄せて來て、味方はこれをその川に拒がうとするのであつたら、何うであらう。それこそ、農夫はこんなに安んじて田野に耕して居ることも出來ぬであらう。自分もこんなにして車に乗つてこの平野を辿つて行くことは出來ぬのであらう。向ふの森には黒い帽子の兵士が幾群となく出沒して、砲車を引く音、馬の嘶く

聲、それこそ何んなに騒擾を極むるであらうか。否、彼方の林の上に敵の爆裂弾が破裂して、對岸の人家の兵燹に罹れる烟は黒く簇々と揚つたならば……

『菖蒲村に泊るのでは、嘘、賑かだらうナア』

とふと空想から覺めて自分は問うた。

『えら、賑かでがんすべい。村でア、はア、何んな家でも二三人は泊めねえではなんねえから』

然らばわが訪ひ行く寺、其處には空きたる室多きこととて、普通の家などより數倍多く兵卒を宿せしめではかなはぬのであらう。折角靜かに物語を爲やうと思つて來たのに、さりとて不運と自分は尠なからず失望したが、今更此より引還す譯にも行かず、仕方がないと斷念めて、村に建久寺といふのがあるかと問へば、へい、御座りまする、大きな寺で、住職さんは若いに似合はぬ東京の學者、英語とやらも出來るとか申しまして、村の若い者が澤山教はりに参りますとのこと。

菖蒲村は最早其處から左程遠くも無い。不動尊を以て有名なる不動岡の町を通り越して、田圃の間、松並木の間、里川の縦横に流るゝ間を二里ほども進むと、前に、赤城、榛名の連山が深碧の色を呈して、其中央に際立つて大きいのが淺間ヶ嶽、車夫に教へられて注意して見ると、成程白い、少し鼠色がゝつた烟が右に斜に靡いて、丁度吹流の旗でも朝風に翻がへしたかのやう。空氣は肌に沁み徹るばかりに澄み渡つて、朝霧の晴れた後の日の光はあらゆる希望とあらゆる平和とを村に齎らすかのごとく、あ

たりの白壁、垣、穀倉に射して居る。

何たる田舎の朝の趣味深さ！と思つて居ると、車夫は、俄かに、

『向ふに、森が見えませう』

と指した。見ると、果して、數軒の村舎の相連つた彼方に、黒くこんもりとした森が明かに朝の空を隈取つて、其前に左右から進んだ路が赤く見えて、野には塵埃の山がふすゝと燃えかゝつて、その烟が右へ右へと靡き渡る。

『あれが建久寺の森がすア』と車夫は言つた。

此時、自分等の背後に當つて、けたまほしい馬の蹄の響が聞えた。見返る暇もなく、車夫は慌てゝ車を狭い道の傍に寄せて轆を留めると、黄色の帽を被つて砲兵が七八名、馬を躍らし、鎧を鳴して、勢込んで遣つて來たが、其儘自分の車の傍を通り抜けて、一散にうね／＼と曲つた路を菖蒲村へと入つて行つた。

劔鞘が躍つて、閃々と朝日に光る。

村に入ると、果して家々の前には、手を束ぬた農夫や、子を背負つた子傳などが澤山出て居て、何か事があるといふのは一眼で分る。ことに、行々見ると、家毎の軒には兵士三名宿泊とか、軍曹一名兵士三名宿泊とか書いた小さな紙片が張られてあつて、少し大きな家には、何小隊本部、何中隊本部と大き



な紙が歴々と眼に附く。

否、そればかりでは無い、先程の砲兵は自分より前に、自分が態々尋ねて来た、その建久寺の長い門前へと入つて行くではないか。

愈々駄目！ と自分は思った。

それにしても、其の友の隠匿したる風情ある田舎寺は進み行くまゝに如何に自分の心を惹いたであらうか。幾星霜を閲して半敗残した山門の裡には、眼も覺むるばかりの大鴨脚だいふくの黄葉したのが美しく聳えて、其傍なる鐘樓の下には、田舎の子傳が自分の洋服姿を非常に珍らしいものか何ぞのやうに吃驚して見て居るのが三四人。敷石は長く一筋に本堂に通じて、南無阿彌陀佛と書いた旛やら、きら／＼と光る阿彌陀如來やら、木魚やら、鏡やらが遠くから歴々と見える。背後には黒い杉林、墳墓は大方その中にあるのであらう。ことに、眼に附いたのは、本堂と庫裡とを連続せしめる塀の上から、紅白の山茶花が今を盛りにこぼるゝばかりに咲満ちて、其梢を色鳥が長閑に囀つて居るといふ光景。

森閑たる玄關に臨んだ都の客は、いかに山僧の夢を驚かしたであらうか。

友は夢では無いかと思つたさうだ。

驚喜も定り、挨拶も済んでから、

『今日は演習の兵隊が来て泊る相だが、此寺も占領されるのだらう』

と自分が問ふと、

『いや、寺はそんなことはない。交渉が有つたけれど、手が無いから断つて了つた。勿論、その代り、裏の林に馬を繋かれるかも知れん』

『今、砲兵が入つて来たぢや無いか』

『あれは林の檢分に來たのだ』

人の代りに馬、面白いと思つたが、積る物語の方が更にそれよりも數倍の興を催したので、自分は忽ち演習のことを忘れて、一樽の村酒、一鍋の湯豆腐に殆ど話の盡きるのを覺えなかつた。

午後一時頃から、裏の林は俄かに騒がしく、草の撓み、樹の枝の鳴る音の絶間には馬の長く嘶く聲喧しく聞えて、兵士の往來する影、軍曹の叱咤する聲など、靜かなる寺の境内とは如何にしても思はれぬばかりになつたが、一時間毎に、其騒ぎは愈々加はつて、やれ、桶が無い、四斗樽が無い、バスケットがあるなら借して呉れと請求されるので、納所の子僧てんでこ舞をして、何の彼のと忙しさうにして居る。

それにも關せず、二人は靜かに飲み靜かに語つた。

夕暮近く、餘り賑かなので、自分は半ば酒の醒めた顔を本堂と庫裡との間なる廊下の塀の上に出して、それとなく四邊を見た。この朝の幽寂なる光景に比して自分はいかに面白い反映を感じたか。見

よ、其の静かなる本堂の前には幾十名ともなき兵士織るがごとく往来し、敷石の上には四斗樽に水を満したのを幾箇ともなく並べて、頻りに馬に水浴を行はせつゝあるのではないか。殊に、自分の面白く感じたのは、前の大鴨脚の樹に夕日が斜に美しく射し渡つて、何とも名状せられぬ趣を呈して居ること、この庭、この兵士、この戦馬、この鴨脚、この夕日、丸で一幅の名畫である。

不圖、また、これが眞の戦争であつたならと思ふと、自分の空想勝なる頭腦はそれからそれへと翼を伸して、何だか、利根川に架せる舟橋を今しも渡り來る砲車、その響が此處まで聞えて來るやうに思はれて。

自分の眼は此時更にある物に留つた。それは、自分のすぐ前なる寺の玄關に、青線の入つた軍服を着た獸醫官らしい若い軍人が、沃土保留ヨドホルムや、ガーゼや、其他の藥品を鞆の中から廣げて、兵卒の牽いて來る馬の擦傷又は創傷に頻りに治療を施して居る光景である。

今しも黄色の帽を被つた兵士が一疋の馬を牽いて來た。  
と、獸醫官は直に創所を検して、

『これア、朝日か。貴様は何うしてこんな創を付けさせたのか。酷いことを遣つたナ』  
兵士は黙つて居る。

『いかん、いかん、こんな粗末に遣つてはいかん』

と言ひながら、其傷所に沃土保留を塗つて、『これア、今日休ませんけりや好かんぞ』  
其後から他の兵士がまた一疋牽いて來た。

『宇治か、貴様はまだ治らんか……』と創所を検して、『もう、治つた、治つた、明日から使つて好い』  
また一疋。

『敷島だナ。今日突貫で倒れたと言ふのはこれか』と先、足の創痕を検し始めたが、『成程、酷い。これぢや駄目だ。二三日休業？』と叫んで、藥をつけて、頻りに繃帯を施し始めた。

此時、傍から靴、劔鞘の鳴る音が聞えて、俄に其處に顯はれたのは中隊長とも覺しき砲兵大尉、――、それはまがふ方なきかの鹽原の中尉なので、自分ははッとした。

顔が合つたので、

『やア』  
と自分から聲を懸けた。

大尉は場所の餘りに思ひ懸けぬのと、わが姿の甚だ變つたの時に、少時はその記憶から思ひ出せぬといふやうに、じつとわが顔を見詰めて居たが、忽ち、手を拍つて、

『やア、君か』と叫んだ。

すぐ言葉を續いで、『こんな處に、君が居られるとは夢にも知らんから、一寸誰か解らんでした、何う

してこんな處に？」

『此處の住職が友人なもんだから』

『左様ですか』

と大尉はじろくくと自分の顔を見る。

四邊の兵士の眼も皆この一場の奇遇の上に集つた。

『もう、久しく御目に懸らんですナア』と大尉は少しく快活らしい顔に笑を含みながら、『君の、樺島男爵になられたことは新聞で知つて居たが、随分變つたですナ』

『年を取りましたかね』

『もうすっかり老成して了つた』

ふと、言葉を改へて、

『お話し度いことは澤山ある。けれど、此處では御話することも出来んから……何うです、今夜、僕の宿所に御出下すつては！ 久し振で、一杯ビールでも舉げやうぢやありませんか』

『この寺ぢや何うです』

『いや、僕の宿所の方が好い。後で、從卒を迎ひに寄越しますから、是非、是非來給へ』  
かう言つて忙しげに渠は彼方に去つた。

果して其夜、從卒が迎ひに來た。

自分は言ふがまゝに、其後に跟いて行くと、其の大尉の宿所は、村の豪農の離座敷で、ひろくくと田に向つて開けた、月の光の多い、風情ある一室であつた。大尉はいかに喜んで迎へたであらうか、否、自分は大尉の性質のこれ程快活に、これ程正直に、これ程無邪氣に、またこれ程多くの卓れた處を有して居らうとは露知らなかつたので。自分は此夕、始めて大尉のまことの性質、まことの價値を知ることを得たのである。それにしても自分は何んなに愉快にビアの杯を舉げて、其の追懷談に耽つたであらうか、何んなに蟠れる胸を打披いて、さまざまの面白い物語を語り合つたであらうか。大尉のビアに酔つて、頻りに氣焰を吐いた顔は今でもありくと眼に見えるやうな。

『奥様も御健全ですかね』

と自分の聞いたのは、もう麥酒の三罈も明けて、互にほんのりと酔つた頃である。

『難有う、達者です』

と言つたが、立上つて、軍用靴の中をごとくと捜し、漸く解つたといふ風で、紙に包んだ一葉の寫眞を渡し、

『見て呉れ給へ』

見ると、かの孝子が丸髻に縮緬すくめの美しい姿をして、膝に可愛らしい、丸で人形のやうな男の兒

を抱いて居る。

『もう出来たのですか』

『一昨年の春……もう豫備も出来てます』

『早いですナア』と言つたが、自分はじつと其の寫真に見入つた。自分は心を動かすまいとしたが、しかもこの美しい姿に對しては、無限の感慨の胸に迫るのを拒ぐことが出来なかつた。あゝ戀！ 昔の戀は既に去つて、我等の時代は遠く過去に葬られて了つた。

『實に可愛い子だ。名は？』

『名は定雄、君と同じ名だ。妻が言ふには、妾は一生の中に一度、唯一度戀をした。その人は貴郎もよく知つて居らつしやる。こんなことを言つては濟みませんけれど、今は身體も精神も貴郎に捧けてある身、その一生の紀念に、何うか、其の戀した人の名をこの兒に付けさせて下さいとかう言ふではないか。僕は喜んで其意に應じた』

何たるやさしき心！ と思ふと、涙がはらくと自分の心中を迸つた。あゝそれにしてもこんなやさしい女の情がまたとあらうか。かの女は高原の雨の夜に、『解りました、よく解りました』と言つた。それはまことに心からかの女の心を點頭かしたもので、自分のあの時の虚偽の言葉、一時の言葉もかの女の純粹な戀には無限の光明と爲つたのである。それから比べると、自分の戀——實に恥かしい。

『それは感謝に堪えんですナア』

と自分は絶々に言つた。

『それア、妻がすつかり話したです。あの出發の前の晩、原に行つて雨に濡れたこともすつかり聞いたです。妻が言ふには、あの時、あゝ言つて下されなかつたならば、今頃は何んなに墮落して、何んなものになつて居つたか知れん、人生は犠牲にならんければならんと言つた君の言葉が今になつて思ひ當る！ とよく言ふです。それにしても、僕も君を誤解して居つたです。あの時は、僕は君を當世流の、ハイカラの、女の操などを破ることなどを何とも思はない浮薄男兒だと思つたです』

『實際、左様かも知れんですよ』

と自分は笑つた。

『そんな事はない。僕は誤解して居た。だから、何うかして一度御目に懸つて、よく御話をして、まことの友人になつて頂き度いと、前から思つて居たです。幸ひ今日ゆくりなく御逢申したから……それで……違つて、こんな處に来て戴いた譯です。一つ、交情を暖める爲に杯を合せやうぢやありませんか』

われ等は盃を合せたのである。

僕の胸には其時何んな情が起つたであらうか。自分の戀の時代の過ぎ去つたといふ考と、やさしい孝

子の真心とが走馬燈のやうに烈しく急に廻り出して、何とも名状せられざる悲哀が胸も狭しと集つて来た。あゝ不運なはわが戀、淋しいのはわが生活。

『孝子さんは、更にあの頃と變りませんナ』

と少時して、自分は再び寫眞に見入ながら。

『いや、もう駄目ですよ、女も二人子持になつちや、色も香もありはしませんわ』

『それでも、貴方は幸福だ』

『幸福かも知れんです。世の中には随分、戀愛に失敗した落武者が多いですから』

『僕などは現にその一人』

『そんな事があるものですか。樺島さんの令嬢は中々別嬪さんだと妻は何時も言つて居るです』

『いや、僕等のは、夫妻とは名ばかり、愛も何もありませんのですから……けれどこれも自業自得で、仕方が無いです』

『御子さんは』

『そんな者は有りやしません』

『それア、淋しいですナ』

『淋しいのは、僕の生涯、まことに愛する妻もなく、子も無く、此儘過ぎて了ふばかりですわ』

『大層悲歎するですナ』

『だって、本當ですもの』

『そんな事があるものですか』

『いや』と言つたが、自分はある思想の簇々と胸に上り來るのを押へ兼ねて、

『奥さんに仰しやつて下さい。實に、その御志は難有い。私はかういふ風に今も淋しい生活を爲て居りますけれど、この世の中に此身のことを思つて下さる奥さんのあると言ふのを聞いて此程嬉しく思つたことはない。私は、奥様には寧ろ御詫を爲んければならん罪を作つて居るかも知れんですが、これは御許し下さいと仰しやつて下さい』

『妻も喜ぶでせう』

と大尉は更に酒を勧めた。

十時近くまで飲んで、あまり遅くなつてはと暇を告げて、戸外へ出ると、田舎の村、森、田は美しい月の光に照されて、その穩かさと言つたら、無い。自分は濃淡の影の面白く捉迷藏を爲せる風ある林の路を歩きながら、立留つて心に言つた。『あゝ自分は戀愛の影をのみ追うて、その時代の遠く去つた今、却つて他人の妻にまことの愛の閃めきを認めたのである。けれどあゝもう既に遅い、餘りに遅い』と。

(明治三十六年十一月)

名張少女

## 名張少女

私の夫は獨逸文學科出身の學士、多い其國の詩人の中でも、殊にレナウの詩が好きで、なめし草の、金縁の小形の詩集は、机の邊に、隱袋カサネに、曾て其身を離しませんでした。この人の詩は花の散り懸つた晩春の恨、でなければ若い美しい少女の天死するのを聞いたやうな感がすると、夫は絶えず私に語つて聞かせて呉れましたが、その悲しい、靜かな詩想は何んなに私の胸を動かしましたでせう。私の生立から境遇、それは丁度レナウの詩のやうで、眞に私ほど不幸福な、さびしい身はありますまい。私は學校に居る頃、私の身を野外に咲ける無名草に譬へてよく泣きました。人の世の悲哀、人の世の煩悶、何故人はこのやうに悲しいのでせう、何故世はこのやうに無情なのでせう。私は多くの友達が海老茶の袴、前髪澤山の花月卷に白いリボンをして、楽しさうに街頭を歩くのを見て何うしてあゝ面白いのか

と、實に其が不思議でした。私は私の夫が多い美しい花の中から、私のやうなものを好奇に選んで、一生の伴侶と爲て下されなかつたならば、路傍の草花、海底の藻の花と均しく、徒に人に踏まれて、この世に浮ぶ瀬は無かつたでせう。いゝえ、私は學校に居ります頃から、もうちやんと覺悟を極めて、一生は獨身のさびしい生活、出来ることなら、何か公共の事業の爲めに、はかないこの一生を捧げ度いと常に思つて居りました。けれど砲の音の中に傷病兵の母と呼ばれたナイチンゲール嬢の雄々しさは、私の性質ではありませんので、其事業、其の名譽、私にももし出来たなら、何んなに嬉しからうと思ひながらも、しかも私には到底その勇氣は無いと知つて居りました。

春の草花——實際、私ははかない春の無名の草花です。

夫に選ばれたのは、今からもう三年前、何うして忘れられませう、私がなにがし女學校を卒業して間もなくです。私には叔母が一人ありますが、丁度四月の十三日、亡母の十年の御祭をすと言つて、獨活に筒、佛壇には八重の花を私が生けて、鐘の音もさびしく、いろ／＼昔の事を語り合ひました。私の母に別れたのは、十三の秋ですから、よく覺えて居りますが、私の母はそれはやさしい人で、私には何ういふ色が似合ふの、かういふ色が好いのと、よく衣服の見立を爲て呉れましたですから、私は母を亡くしますと、もう衣服の見立をして下さる母様が居ないと思つて、先づ泣きましたので、子供心にそれが何よりも悲しう御座いました。其日も、叔母が私の衣服を見て(其時私は鼠大名の銘仙を着て居りました)

た)「弓さん、大層じみな御つくりね、母さんが居らつやると、そんなには爲せて置かなかつたでせうに……。」と言ひました。私はもう其一語で胸が塞がつて了つて、坐つて居られませんから、其儘縁側へと立つて參りました。春雨のしめやかに降る日で、隣の垣には山吹がしとどに亂れて濡れて居りますし、向ふの二階屋の前には八重の櫻が面白く咲いて居りました。附近には蛙の聲——私は何んなに胸を痛めたでせう。

其夜です、叔母様の仰るのには、今日は佛の日だから、母様にも御列席のつもりで、御前に話し度い事があるが、よく聞いて下さい。……弓さんは御亭主を持たんなど、仰るけれど、——それは學問の力で立派に獨立なさることは出来やうけれど、女と言ふものは縁があつたら、人に嫁ぐのが普通、何うです、御嫁に行く氣はありませんかと仰るのです。私のやうな者、殊に年も取つて二十三のもうお婆様、それで宜しくば何うぞ御世話爲すつて下さいと戲談にして私が言ふと、それでは嫁つて呉れるかえと叔母様は此上ない眞面目。私の縁は其時もう決まる運命を有つて居りましたので、その貰つて下さるのと内々聽いて見ますと、弓さんは逢つたことがあるでせう、そら、此間音樂會の切符を上げた人!

私の胸は躍りました。其人なら、逢つたことがあるばかりか、其前にも、友達の家で歌留多を取つたこともありすし、御話を承つたこともある。瘦削な、色白の、それはやさしい人で、其時聽つたのも、確かレナウの詩のことだと覺えて居ます。あの人が何うして私のやうな者を……と疑つて見ました



が、叔母様に聞いて見ますと、大層、私を御執心で、御世辭か知らぬが、やさしい、靜かなところが御氣に召したとの話。

親なしの獨身で、今は高等學校に勤めて御居でなさるが、御前が嫁つて呉れると、すぐ家を持つて、氣樂に暮して行かれるとのこと、こんな良い縁はもうありやしませんよと叔母様は何うしても取極めた願望——私とて何の不承知を申しませう。人に知られずに、はかなく散るべき無名の草花、それが嬉しく摘まれるのですもの。

結婚して、家を持ちましたのが、牛込の二十騎町、二階建の見晴らしの好い家で、庭にも西洋の草花の花壇をつくるほどの地面はありました。それに、好ましいのは、此の町の靜かなことで、音と言つては遠くに聞ゆる俚の響、柴垣から洩れる琴の音位。私は夫の不在のつれづれを獨逸語の研究に費して、レナウの叙情詩も字典を引けば大方解る位になつて参りました。それに、夫は大の文學好き、私も學校に居ります頃から、紅葉山人のものは殊に好きで、お糸、お宮を始め、あらゆるものをよく讀んで知つて居りました。中でも、隴舟のお藤、あれを何んなに可哀想に思つたでせう。男思の病中に、髪を取上げて、紅をさした其女らしい心根、私は讀む度毎にいつも同情の涙に暮れました。ある日、夫に話しますと、夫が申しますのには、成程よく出來て居る、私も感心しては居るが、何うもお藤の性格が少し不明だ。あれだけのことで病氣になると言ふのも少し不自然なのに、思ひ死に死ぬとは餘りに古風、新し

い西洋のものを讀んだ胸には、少し不満足である！ とかう言はれた。いゞえ、そんな事はありませぬ、女と申すものは、皆なあんなに弱脆いもので、便る所を失ふと皆な鷲のやうに枯れて了ふのが慣ひと申しても、夫は何うしても合點しませんやうでした。女の心、實に弱いのは女の心、女でなければこの心が本當に解らぬのでせうと思つて、私は其話をやめて了ひました。

兎に角、かういふ風で、私の家庭は至極圓滿、一年は丸で夢のやうに過ぎて了ひました。夫は平生暇さへあると、新しい歐洲の作者の詩や小説の話聞かせて下さるので、解らぬなりに、新しい思想煩悶をも知りましたし、新しい派の戯曲などの話をも幾つとなく讀んじました。何うも私達には、其思想が烈し過ぎたり、其感情が強過ぎたりして、レナウやハイネなどから比べると、強い酒でも戴いたやうな氣が致しますけれど、何と申せ、世界のすぐれた詩人達の煩悶やら思想やらですもの、其光彩の華々しいのには、いつも眩惑さるゝやうな心地が致すのが常でした。夫が常に其物語を爲て下さるのは、二階の書齋、大抵は安樂椅子に凭り掛つて、右の腕を眩臺に載せ、書籍を左の手に開いて、緩かな調子で話して下さる。私は唐机の前に坐つて、兩手をちやんと膝の上に置いて、ぢつとして聞いて居ます。で、段々話が佳境に進んで参りますと、平生は左程流暢では無い夫の言葉にも、神が乗り移つたやうに熱が加つて、頬のあたりに紅なる色が潮のやうに漲つて來る。私も面白いので、思はず膝を乗出して聞く。一室には暫時美の神が臨むのであります。で、話が濟むと、ザツと物語の批評をして下さる。私は婢

に命じて、茶と菓子とを取寄せてそれを勧める。その時のさまが今でも眼に見えるやうな心地が爲ます。

夫はかういふ風ですから、主義も有つて居りますれば、思想も豊富でありました。従つて私は一面師としての尊敬をも拂つて居りましたので、他の學校友達が、紳商、官吏に嫁いで、華々しい榮華を盡して居りますのを見ましても、更に羨しいとも妬ましいとも思つた事は御座いませず、お耻しいことながら、私ほど卓れた夫を有つた者は無いと信じて居りました。——私の性質の蕙のやうに弱いのを忘れては下さるな。

二年目の春に、長女が産れました。

女と申すものは、兒には目の無いもので御座いますので、それが生れますと、私の家庭は確かに一變化を生じました。今迄は琴の音、——音と申してはその位のもの、寧ろ夫の不在は淋し過ぎると考へましたものを、長女が産まれてからは、其泣聲が第一に氣に懸りまして、もう今迄のやうに、うか／＼と小説を讀んだり何か致しては居られないやうになりました。つまり、空想ばかりで成立つた私の家庭、そこに實際と申す恐ろしい敵が襲つて参りましたので。

## 二

長女が産れてからは、夫も餘り詩や小説の物語を爲ぬやうになりました。と言つて、新しい書は絶えず繙いて居りますのですけれど……何うも親になつては、そんな暢氣なことばかりも行つて居られまいと申して、滅多に以前のやうな物語はして呉れません。たまに、夜など無理に頼んで致して戴いても、途中で、長女が眼を覺したり、何か致すので、何うも氣乗が致しませんのでした。

『歡樂は長く續かず……戀はそれ唯時の間』とレナウは歌つて居りますが、實際この人の世はその通り、歡樂は丁度虹のやうなもので御座いませう。

悲しいのは人の世で御座います。

三年目の二月の末でした。夫は少し公用が出来て、京都から奈良、大阪の方へと参りました。丁度好いから、月ヶ瀬に寄つて見やう、七八年前に一度行つて見たことはあるが、島ヶ原から下れば譯は無いと申して、何方かと申せば樂みに致して居りました。夫は旅が好きで、殊に、美しい山川の光景は此の塵の世の此上ない慰藉だと申して、暇さへあると、よく二日泊、三日泊位の處に出懸けまして、歸つて來れば、いろ／＼異つた風俗や、美しい山水や、感じた興などを詳しく語つて呉れるのが習慣でした。私はまた、東京生れの、知つて居りますのは鎌倉か江の島位、ホネームーンに箱根に参つたのは、一番遠い旅行でした。ですから、其旅行の物語が言ひ知らず私の好奇心を惹きますので、見ぬ山、見ぬ川、見ぬ風俗が何んなに私をして空想に耽らしめたでせう。よく、自らの行きもせぬ處を夢に見たり何か致

しまして、夫に笑はれたのも度々です。

三日目に京都から一通、七日目に大阪から一通、最後に参りましたのは奈良からで、其手紙は一番長く、一人旅の淋しさや、東京の戀しさが書いてありまして、其後に奈良の平城宮の址を雨のそぼふる中に、俣の幌を外しながら見て廻つたことが細々と記してありました。最も興を感じたのは、唐招提寺でした相で、裏門で俣を下りて、風情ある松林の間を抜けますると、古寺の垣に梅が白く咲いて居りました、人一人なき境内は、千年前の昔もかくやとばかり。金堂、講堂の依然として立つて居るさまは、實に何とも言はれぬとのことでした。兎に角、中の佛像を見度もいものと、寺務所を彼方此方と探しましたけれど、何うも解らんので、まご／＼して居りますと、ふと、向ふから年若い美僧が鼠色の被風を着て、大黒傘を片手に抱いて参りました。立留つて聞きますと、其聲は純然たる妙齡の處女、さつと顔を赤くしましたので、若い尼であるのがすぐ解つた相ですが、其の附近の光景、古い寺、淋しい松原、滴るよばかりに降る雨、其に伴つて妙齡の美しい尼、夫は非常に撲られましたとかで、其の若い尼の生出から行末まで色々空想に耽つたと書いてありました。で、寺務所に参つて、佛像拜觀を頼みますと、案内して呉れたのは、中年の跣足の僧、手に數珠を懸け、鼠色の衣を着けて、木札の附いた大きな鍵をぢやらつかせながら、叮嚀に堂から堂へと案内して呉れたので、これも亦尠からず夫の心を動かしたやうな様子でした。それから、薬師寺、西大寺、見ると奈良の市街の彼方の山には雲が低く舞つて、多い瓦葺

の上に興福寺の塔が見え、ひろい平城宮の址には雨が縞を織るやうに降つて居ます。平城宮の遺址に蝙蝠傘を翳して、一人立つた時には、もう餘程大降になつて来て、舊都の半は黒い雨雲に蔽ひつゝ、まれて居たとの事でした。

そして最後に明日用事の濟み次第、月の瀬に行くつもりである。梅はまだ早い相であるが、折角来たのだから、一寸行く……とか書いてありました。

夫の歸つて参りましたのは、其の奈良からの手紙を受取つた三日目の午前九時頃で、一昨々日からもう歸り相なもの待つて待ち暮して居りました。歸つて来た夫を見ますと、旅中鬚を剃らなかつた爲めか、何となく顔色が青く、いくらか瘦せたやうな處も見える。それに、何處となく態度がそは／＼して、何うも困つた事を爲た、時計を旅店につい忘れて来たかと申すではありませんか。時計は銀側ですが、鎖は純金の筈、それにこれは友人の死んだ記念でありますので、私もそれは困つたことを……と思つた。夫はいつも思慮周密で、ついで物を忘れて来た例は無いのですに……と私は不思議に思ひながら、玄關に投げ出されてある旅靴をぐいと持上げると、其の手提の革に着いて居る環が雙方とも一時に脱れて、重い靴は忽ち下に落ちて了つた。これ、こんなになつて……と夫に示しますと、何うもその手は脱れて爲方がなかつたとのこと。それで、時計はもうとても有りますまいかと聞きますと、いや、それは大丈夫だ。島ヶ原の立派な古い旅店の違ひ棚の上に置いたのだから、手紙を遣りさへすれば、屹度

返して寄越す。返さんやうなことがあれば承知せんさと言つて、ふと氣を替へて、もう汽車が來るつて言つて非常に急がすものだから、遂い、忘れて了つたと、私に言ふともなく、獨言ともなく。

月の瀬の話を其時夫からいろ／＼聞きました。梅はまだ早いので、人は餘り行つて居らなかつたが、それでも處によつては、七分位咲いた處があつて、桃香野あたりはもう見頃であつたとの事でした。それに、月の瀬から上野、名張など、云ふ地方を非常に賞めて、何うもあの位靜かな、あの位人氣の好い、あの位面白い處は無い。第一、美しい少女の多い處で、七八年前に行つた時にも、さう思つたが、今も矢張變らぬ。それに、田舎と云へば、大抵言葉が野卑で、美しい少女が多くつても左程意を惹かぬものであるが、其地方は言葉が實に優美である。京都言葉は少し輕佻なところがあつて、餘り好ましいと思はぬが、此地方のは、何うも京都のに少し高尚な處が加はつて、言ふに言はれぬ味がある。實に、忘れられぬ地方だと激賞しました。

それに、名張といふ町が、甚しく興を惹いたとかで、其町には今度行つて見ないが、何時か行かすには置かぬとのことでした。何うして、さう、行きもせぬ町が忘れぬのかと聞きますと、月の瀬の手前尾山村の新道をずつと名張川の沿岸に出やうとしますと、前には非常に高い山が屏風を立てたやうに聳えて居て、其谷、深い谷を名張川が右から左へと曲つて流れて居るのが第一に眼に入るさうです。そして、其向ふ岸に、猿の通るやうな、人ならば一人づゝしか通れまいと思はれるやうな細い道が附いて

居つて、聞くと、それは名張町に通ふ捷路であると教へる。此前、參つた時にも、夫はさう思つたとのことですが、その溪流、その細徑が實に忘れられぬ印象を與へたさうで、其の山の中に、そのやうに美しい語を操る美しい少女が住むかと思ふと、實に空想を惹かずには置かれぬと、夫は心から憧れて語りました。

私の空想も何うしてこれに誘はれずに居られませう。伊賀の國と申せば、日本國中で小さい國、その國の山の中に、さういふ風情ある町があつて、そこから流れ出づる川の畔には、面白い岩、畫のやうな村、日本一の梅の名所。

『一度、私も伴れて行つて下さい。』

と私は夫に言ひました。

## 三

夫の忘れて來た時計は、一週間ばかり經つて恙なく戻つて參りました。下婢が受取つて、私に手渡したので、ゆくりなく見ますと、四角の小さいボール箱に、紙の小片を張つて、表面には、行先の宿所を記し、裏には伊賀國島ヶ原村海屋某と明かに書いてあります。丁度、夫が火鉢の前に座つて居たので、これを渡しますと、さア、時計が返つて來たと大喜悅で、急いでこれを解くと、古新聞で、粗雑に包ん

であるのはその時計、其の鎖！

『田舎の人は流石に律義だナ。』

と言つて、夫はその時計の陰翳を絹布で拭きました。

これから後は別に變つたこともありませず、夫は毎日學校に出勤致しますし、私は下婢を相手に、家のことやら、長女のことやらに忙しく日を送りました。

ある日——さう、あれは確か五月頃の事でしたらう。私は不思議な夫の素振を見ました。私は鳥渡した用事があつたので、何氣なく、二階に上つて参りますと、頻りに長い手紙を書いて居た夫は、急に返つて、いきなりそれを巻いて押隠して了ひました。こんな事は今までついぞ無かつたことで、私は非常に不思議に思ひました。いゝえ、それも五六日前に名を匿した一通の手紙が参つて居らなかつたならば、それほど氣にも留めは致しませんでしたかも知れませんが、何うも其の手紙と言ひ、其の今の態度と言ひ、何か秘密のことがあるに相違ないと、私は電光の閃くがごとく、ある事を感じました。

『何誰に上げる御手紙？』

私はいかう尋ねました。

『いゝや、奈良の……。』

『一寸見せて下さい。』

『見たツて仕方があるものか。』

『見せたツて好いでせう。』

『つまらんよ、男の手紙など見たツて仕方がない。』かう言つて、急に氣を替へて、『それも、島田のやうな面白い手紙なら好いけれど……ほんの俗用だから。』

私は質問を變へました。

『此間、名を匿した手紙が参りましたね……。』

『うむ……。』

『あれは何處から、來たのですの。』

夫は平氣で、書簡入の中から、その手紙を探しました。

『これか？』

『え、それ……。』

『これは、奈良に居る昔の學校の友達から來たのだ。』

と言つて、私に渡しました。私は嫉妬がましくもこれを展げましたが、成程これは友人間の戲談ばかり。私は寧ろ私のはしたないのを耻しく思ひました。

『お前は私はいかうか爲たと思ふのか。』

『いゝえ、左様ぢやありませんけれど……。』

『屹度、お前は私が秘密で何か爲て居ると思つて居るのだらう。』と言つて、笑つて、『大丈夫だよ。』  
『は何も爲やせんよ。お前に秘密で、事を爲はせんから。』

『さう思つた譯では無いのですけれど……。』

私は返すくも耻しく思ひました。清い夫の心を疑ふとは、實は我ながらはしたない限。夫は決してそのやうな性質ではありませんものを。

で、私は根が夫を信用して居りますので、すつかり其疑を晴らして了ひました。

一月、二月と經つのは早いもの、月日は飛鳥のごとく過ぎ去つて了ふのでした。この過ぎ去つた月日の間、それでも私と夫との間にある大きな溝が穿たれたのは事實で、長女の産れぬ前の楽しい生活と今とを比較して見ますると、實に雲泥の差のあるのを發見しました。けれども其差は絶壁から絶壁へと移つたやうな急劇なものではありませんので、靜かにその徑路を辿りますと、かうなる道順に少しも不自然な處は認められぬのであります。即ちこれがさびしい悲しい人の世の常態で、今迄のは寧ろ青春の夢の名残の歡樂であるのです。

若い時は、煩悶と申しても、悲哀と申しても、それは皆な各々の空想から割り出したもので、いざとなれば、何のやうに思ひ切ることも出来ましたし、また、何のやうに慰める方便もありましたが、夫も

出来、子も出来、苦痛、悲哀、皆な實際の人の世に露骨に觸れるやうになりましたは、泣くも笑ふも叫ぶも、もう一つとして自から嘗めて自から味はなければなりません。實際の苦痛と申すものは、丁度蕭々と砂の上に降りなづむ雨のやうなものでして、青春の頃に想像したものゝやうに、決して華やかなものでは御座いません。

琴は高閣につかね、詩集は本棚に藏めたまゝで、弾きもし、讀みもして見たなら、さぞ慰藉にならうとは存じながら、何うも手に取る暇も氣も無くなりましたので、一三年前のことを考へると、涙を零さずには居られぬので御座います。

とは申せ、夫の平生の行爲が甚しく變つたのでは御座いません。無論、絃歌の巷に身を忘れるといふやうなことはなく、一夜とて家を明けて宿泊りを爲たことはありませんです。いゝえ、私に對する素振、長女に對する愛情なども、熱を失つたやうな處こそ御座いますれ、決して冷かな點は御座いませず、萬事に就けて、親切に、獻身的に世話を見て呉れるのでした。唯をり／＼堪へ難いやうに長太息を吐きますので、それがいかにも私の氣に懸りますから、ある日、それとなく訊ねますと、

『いや——さうかな、そんなに長太息を吐くかな。』

と無頓着に答へました。

けれど其顔がいかにも青く、物思はし相な面影が歴々と見えますので、

『何うも、貴郎、此頃、長太息ばかりお吐きなさる、……それに、顔色もお悪いですが、何か御心配になることでも御有んなさるんではありませんか。』

『いや、何に、そんな事はありやせん。』

私はちつと其顔を見成りながら、

『何かあるなら、本當に話して下さい。私はどんな事でも、……。』

『いやありやせん。』

夫は唯それ切り、言ふ後から、もう深い、その長太息を吐くのです。其長太息、その顔色、其處には、何か秘密が……。

けれど私共の生活は別に變る處が無くて過ぎました。其の長太息のみは心に懸りますれど、一度夫に此身を任した上は、何もそのやうに疑を挿むまでのことは無いと存じて、松に縋る葛のやうに、唯々夫にのみ身を寄せて居りました。其間、種々な噂が私の耳に入りましたが、私は一つもそれを取上げやうとは致しませんでした。

其噂の中で、あれは確か九月頃のことでした。夫が新橋の停車場で、ある若い婦人と連れ立つて、ブラットフォームから出て來たのを見たとき告げて呉れた人がありました。其婦人は、鼠色勝の瀧綺銘仙に、葡萄色の山吹織の帯をした若い女で、容貌も中々美しかったとのことで、『奥さん、しつかりしなけ

れば可けませんぜ！』と言つて其人は笑ひました。藝妓風の女でしたかと訊きますと、いえ、そんな風な處は少しも見えぬとの事でした。けれどこの噂を爲した人は、至極饒舌のよくありもせぬ他人の内幕を言ふので有名な方でしたから、私は話半分に聞いて、左程氣にも留めませんでした。それでも其翌日夫の學校に出勤した後で、何かそんな噂の材料になるやうな手簡でもありはせぬかと、机の抽斗から書棚の奥、洋書の頁の間まで探しましたが、そんなものは一つもありません。

夫には今年十七歳になる美しい姪がおりますから、屹度それを伴れて歩いたのを間違へたのであらうと思ひました。

## 四

其年も暮れ、正月も過ぎ、餘寒の烈しい風も大方終になつて、龜戸の梅、蒲田の梅、續いて牛込の屋敷の垣、空地の畑にも梅の白いのが見え始めると、夜の散歩にも蛙の聲が何處となく聞えるやうな好い氣候になりました。やがては上野公園の彼岸櫻、私の好物の蓬餅、櫻餅、——流石に楽しいのは春です。

裏の竹藪の蔭に、満開の櫻二株、傍の猫の額のやうな畑には、菜の花が黄く咲いて、芝地には菫やら、蒲公英やら、私の家の周圍にも長閑な春は遍ねく行渡りました。其日は昨夜からの雨が續いて、嵐

まじりの、今年の花ももうこれでお仕舞など考へられまする空模様、二階の硝子窓のカーテンを片寄せて見ると、灰色、鼠色などの色彩の交つた物象の中に、紅は騒ぎ、緑は騒ぐと申す繪のやうな光景。隣の庭の櫻は夥しく濡れて、向ひの黒塀には、一面に落花が貼ぜられてあるのです。

私はレナウの詩を久し振りで思出して、ちつと立つた儘、暮れ行く春の光景に見入りました。胸に迫るのは、實に申しやうもない佗しい悲しい思、下唇を固く嚙んで、強ひてそれを抑へても、猶ほ涙は雨のごとく頬を濡らすのでした。私の春——楽しい春ももう夢のやうに過ぎたのですものを。

私は泣いて、泣いて、心ゆくばかり一人で泣きました。ふと、かういふ時に、琴でも弾かうと思ひまして、長女は下婢に連れさせて近所の親類に遣はし、二階の六疊に琴を据ゑて、靜かに琴柱を配りました。想像して下さいませ、硝子窓の外には、落花の雨、嵐の横しぶきに吹付けますのを他所に靜かに弾で始めたのは長恨歌の曲。

その懐かしい昔の調、何んなに私の胸は躍つたでせう。私は途中で、昔を思ひ出して、思はず爪を外しました。

其日の午後です、夫は俵でこの風雨を衝いて歸つて参りましたが、いかにも何事にか慌てた風で、何か私に言はうとしては言ひそびれるといふ様子。不思議に思つて居りますと、鳥渡來い、お前には是非話さなければならんことが出來たから……と申して、私を二階の書齋に誘ひました。

で、私と夫とは其處に坐つたまゝ、暫く黙つて居りましたが、夫は思ひ切つたといふ風で、

『お弓、お前にこんなことを話せんけれどナ……』と言懸けて、少し口籠つて、『私は悪い事を爲た。』

先、お前に謝罪しなければならん……。

『何ですの？』

『もう、醫師が今夜にも危いと言ふのでナ。』

『危いとは、何誰が？』

『まア、私の行つたことは堪忍して呉れ、實にお前には申譯が無い。』

謎のやうな言葉、私は解らぬながら胸を躍らせました。

『一體何うしたと仰るの？』

『私に……情婦があるのだ。そしてそれが、もう、死ぬと言ふのだ！』

投げるやうに夫は言つた。その毒矢に烈しく貫かれたのは、私の胸。

『えい。』

『私が悪い、皆私の罪だ。』と少時してから、夫は言葉を續いで、『けれど、何も彼も皆なお前に懺悔して了ふから許して呉れ。』

『一體、何う……。』



餘りの事に、私は口が満足に聞けませんので。

『昨年の春、私は奈良から京都に行つたが、今回のことは、實にそれが始めてで、私は其時から戀の俘虜と爲つたのだ……。先づ始めからすつかり聞いて貰はう。こんなことを聞くのは耳の汚れと思ふかも知れぬが、其罪を悔いた夫として酌んで聞いて呉れ。』

私はお前に月の瀬のことを話した。花が七八分咲いて居つて、また客の無かつたことも言つた筈だ。其時、私は名張町のことをいろいろ賞めて、其附近の少女の美しいことや、會話の優美なことを話したのは忘れはすまい。その名張少女の一人だ、今、死なうとして居るのは！』

夫はさまざまの感の胸に衝き上げて來るのに堪へ兼ねたやうに、激昂して言葉を留めたが、急に、

『もう、何うしても助からぬと醫師は言ふのだが、……實に可哀想でならん。』

夫の眼には涙の閃きが見える。

『では、もう東京に？』

『唯、……來てるのだ。』

私は愈々胸を躍らせました。

『まア、一伍一什を話さう……。』と夫は再び氣を落付けて、『私が奈良の停車場に來たのは、明日歸途に就くといふ手紙をお前に出した其の豫定通りの日の午後七時で、戸外はもう暗黒になつて居た。奈良

で金を費ひ過したので、懷中は頗る淋しくなつて、これではとても月の瀬に廻つて行かれぬと思つて、残念ながらすぐに東京に歸つて了ふ積りであつた。東京に歸つて了へば、このやう不可思議な運命に邂逅さすともよく、私もこのやうな罪をつくらずに済んだのである。處が、不運にも眼に入つたのは、三等待合所の壁に懸けられてあつた月の瀬保勝會の廣告。上野、島ヶ原兩驛からの人力車賃、旅亭の宿泊料、晝食料などが詳しく書いてあつて、自分の懷と比較して見ると、歸途の汽車を三等で我慢さへすれば、優に月の瀬に行つて見ることが出来る。例の自分の山水癖、さうなると、無闇に行つて見度くなつて、兎に角、行かうと決心した。で、車掌に、新橋までの通し切符を買つて、島ヶ原で下りて、一日月の瀬で遊んで行つて差支ないかと聞くと、上野驛からなら差支は無いが、島ヶ原は下車驛では無いから、いけぬとのこと。上野から七八年前に一度行つたことがあるから、どうせ行くなら、島ヶ原からに爲度い。それに島ヶ原と言ふ所は、何だか恂う深い山の中の、溪流の音のする、風情ある地のやうに昔から想像されて、何うも行つて見たくつて仕方が無いので、兎に角島ヶ原まで切符を買つた。それにしても、山の中の一停車場、旅店があるか無いかと氣になつたので、又、引返して車掌に聞くと、大きな何屋とか言ふのがあると教へて呉れた。けれど何うせ今夜は固い蒲團、油染みた木枕の、奈良や大阪での寢心好い味はとても望まれぬと覺悟して居つた。やがて、汽車が來て乗つたが、今宵は山の中の一旅店、明日は月の瀬の梅と思ふと、何だか昔の若い頃の興が湧いて來て、闇の中を過ぎ去る一驛また一

驛、車窓を壓する山の黒い影を見ても、此處等が木津川の風景の好い處かなど、絶えず戶外の闇が覗かるゝのであつた。

大河原から島ヶ原、其の驛近く、汽車の歩みが緩くなつたので、窓から闇をすかして見ると、汽車は今高い地を走つて居るらしく、下には大谷に溪流の潺湲、四面は皆黒い高い山の影、やがて燈火の光がちらちらと見え出して、汽車の留つたのは、風情ある小さな停車場。

線路を渡る長い橋も無く、汽車の行き過ぎた跡を蹠と停車場に行つて、切符を車掌に渡しながら、旅店は何處かと聞くと、鼻を抓まれても解らぬ闇の中に微に見ゆる家を指して、彼處に行けと教へる。必然旅店の氣で、辛うじて其處に歩み着いた。突然『泊めて呉れ。』と叫んで入ると、帳場に坐つて居た男が怪訝さうに自分の姿をじろく見て、立たうともせぬ。泊めて貰ひ度いがと今一度言ふと、漸く解つて此處は旅店ではない……と言ふ。何處か此近所に無いかと問ふと、前の家に行つて訊いて見て上げやせう……と、それでも田舎人の親切に、手づから提燈に火を點し、自分の先に立つて戶外に出る。向ふ側の三四軒目、大和障子に明るく燈光が射した家があつたが、渠は其戸を明けて、お客様があるんだが、泊めて貰へまいかと訊く。自分も中に入つて、明日は月の瀬に行く身、何んな處でも好いから泊めて呉れと頼むと、此家の主婦らしいのが、この寒いのになん裸體になつて、下婢に肩をもませて居たが、傍に居る盤面の亭主と顔を見合せて、『内ぢやいけいナ、もし何か言はれると悪いし、それに、

お客様に不取扱すると好くないから。』と言つて意味あり氣に、私の顔を見て笑つた。案内した男が、『それぢや海屋におつれ申すか。』と言ふと、『それが好い、彼處なら、何んな取扱でも出来るさアに。』と、今度は亭主が笑つた。

で、私はまた少時間の中を辿つた。突然、犬が脚下から吠え懸つたので、吃驚して飛退くと、それは犢のやうな大きな地犬で、案内者が一生懸命に追つて呉れたので、何うやら彼うやら、其難を免れることが出来た。昨日の雨の、泥濘の道を彼方にたどり此方にたどりして、二町ばかり行つた處から、だからと十間程も下ると、低い地には、村の人家が昔の宿場のやうにずつと並んで、燈火が處々から洩れて居る。

案内者の自分を伴れ込んだ家は、それから右に折れて、五六軒目。中に入ると、洋燈が中央に照つて、広い場には俵やら叭やらが積重ねられ、上には野菜を入れた小籠が幾個となく置かれてあつて、鮪の半身が鉤に吊されて下がつて居る。帳場には、此家の主人と見える八字髭の三十五六の男が坐つて、其傍に、大きい眞鍮のしかみ火鉢。一方を見ると更紗の蒲團の薄い汚れたのが十枚ほど高く重ねられて、臺所の方には、朱塗の古風の膳が残肴狼藉のまゝで取散されてある。

いや、此家に入るや否、先づ、私の耳に不愉快に響いたのは、奥座敷で頻りに騒ぎ散らすあやしげなる女の聲で、その調子外れの三味線の音、喧しく唄ひ罵る客の言葉——自分はすぐこれは田舎によく見

る一種不愉快の旅店であるといふことに想ひ到つたので、これは困つた處に入り込んだと思つた。いや、この驛に他に旅店が一軒でもあつたなら、黙して其方に立ち去つたのであらうが、前に、自分は案内者から此處より他に無いといふことを聞いて居るので、仕方が無い、目をつぶつて一夜を過さうと決心した。それにしても、飛んだ山の中、此處に来てこんな眼に逢はうとは、實に豫想外。

旅店の主人も自分の洋服扮装を見て、都合悪いと思つたと見えて、始めは室が生憎塞がつて居てとか何とか言つて居たが、傍に居る其母親らしい人品な老婦と二語三語語り合つた後、それではお泊り下され、今室を明けますから……と火鉢の傍の席を清めて、一服せよとのこと。老婦は『お園、お園!』と其處から聲を懸けてやさしげに呼んだが、奥の喧騒が甚しいので、更にそれが通じやうともせぬ。困つた人達だと呟きながら、次の室に行つて、『お園、お園、御客様が……』と呼ぶ。

はい／＼と言葉やさしく室から出て來たのは、此家の娘かとも思はれる品の好い十七八歳の少女で、鳥渡薄闇い暗中进行つて斜に通り抜けたのであるから、分明と解らぬが、其顔にも、其姿にも、言ふに言はれぬ嬌態のあるのを認めた。鳥渡待つて居ると、室が明いたと言ふので、通されたのは何處? その馬鹿騒を行つて居るすぐ隣。それも壁ならばまだしもほんの唐紙一枚の仕切。自分はしたゝか弱つて了つた。

其處に、茶を運んで出たのは、そのお園といふ少女。着物は縞の絲織に、帯は少し派手なのを結んで、髪を束髪にして居るが、客の前に出るのが言ひ知らず耻しいといふさまで、低頭いて、頬の邊を赤くして居る具合、いかにも愛らしい。『姉さん、お園さんと言ふのでせう?』と其の愛らしいのに、つい釣込まれて言葉を懸けると、『よく知つて御居での……』と低く言つて、『旦那はんは、西からお出なつたの。』と訊く。

『いや、東京に歸るんだ。』

『さう、東京……』と茶を注いで出して、『東京はようおますわナ。』

『姉さんは此村?』

『いゝえの、これから南に、名張と言ふ所ありますわナ、其處ですわナ。』

『名張——それぢや、あの月の瀬の川の向ふ側から行く——!』

『よう、知つてなはる。』と少時考へて、『今日、月の瀬にお出なつたの。』

『いや、明日行くんだがね……七八年前に一度來たことが有るから。』ふと、隣の室の騒ぎの甚しいのに呆れて、『却々、えらい騒ぎだね?』

『え、もう、ほんに、困つた人達。』

と美しい眉を擡めた。

『鐵道の人? 役所の人?』

名張少女

『いゝえの、皆な御百姓。』

『よく騒ぐね。』

『ほんまに困つた人達。』

『お園！ お園！』と不意に、老婦の呼聲が聞えたので、少女は慌て、障子の外に出て行つた。

あゝ實に解らぬのは、人の運命である。一目見て、一語語つて、それで互の胸の底の底まで開くことのあるとは！ 其のお園、美しいことも美しかつたが、それよりも其時何かある者が自分の胸の底の底に觸れたやうな氣が爲たので、自分は其のやさしい嬌態、土地なまりの言葉に一方ならず胸を奪はれて了つた。

少時して、また遣つて來た。

『旦那さん、御飯は？』

と訊く。

『もう飯は濟んだ……けれど、一杯、酒を飲まして呉れんか。』

『はい。』と言つて下つた。

後で考へると、自分ながら愚なること、自分は今、其身の如何なる地位にあるかを知らなかつたので、此場合、酒！ と云へば、もう隣室の馬鹿騒を行つて居る人達と同じ境に陥らなければならぬのを

露ばかりも思はなかつたのである。そして、十五分間も経つか経たぬに、今迄騒いで居た一人であらうと思はれる二十七八の、さぞ業を経たらしい、銀杏返の女が、圓盆に酒肴を載せて出て來たので、驚いた。

驚いたとて、もう遅い。自分は直に嵐のやうな饒舌と駄洒落とを浴せ懸けられたので、ぢつとして音無く爲て居れば、どんな眼に逢はされるか知れぬといふ場合になつた。其一場の光景、思出してもゾツとする。

『やかましく騒いで居たのは、お前か。』

『え。』

『お前は何だ。』

『何だと思つて……。』

渠はもう半は酔つて居る。

『達磨か。』

『達磨でせうか、何でせうか……。』と言つて、盃を自分に差して、『何でも好いわね、一盃お上りよ。』

『生れは？』

『何處でせうね。』

『東だらう。』

『大和、東京にも行つて居たことがあつてよ。』

『此家に居付きか。』

『え……。』

『月の瀬の花時だけ、お客を化しに来てるんだらう。』

『まア、そんなことは好いわね、一盃頂戴！』

と手を出す。

まア好いわ、かういふ場合に臨んだ上は、今更固くなつて居たつて、仕方が無い。思ふさま飲んで、皮肉を言つて、其上で酔つて寐て了へばそれで好いのだと恚う決心して、ぐいぐいと注ぐのを引受け引受け幾杯か飲んだ。隣の室では、喧騒今やその極端に達したと覺しく、歌ふ者、躍る者、酌婦の金切聲に轉る聲は三絃の自暴に鳴る響と相混じて、卑猥極まる都々逸や端唄——それも十年も前に流行つたのが一かたまりに混雑と。

それを耳にしながら、自分は自暴に皮肉を言つて、平生ならば、口で言ふのも敢てしないことをどしどし放言して、所謂酌婦、所謂田舎達磨なるものゝ悪口を散々に聞いて、殆んど普通の女なら坐つて居られないまでに罵倒して遣つた。けれど、女は一向平氣なもの、可愛がられやうが、悪口を吐かれやうが、對手になつて貰つて居りさへすりや、それで好いので、常識から推しては、とても想像することの出来ぬ忍耐力を備へて居るのだ。

銚子を三本變へる頃には、自分ももうしたゝかに酔つて了つた。隣の室でも酔ひ潰れたものがあるらしく、一組は奥の室に、一組はわいぐと要領を得ぬことを饒舌り立てゝ、喧しく帳場の方へと出て行つて了ふ。

『大分、静かになつたね。』

『え。』

と言つたが、立つて後の唐紙を開けて、

『鈴代さん、鈴代さん。』

『何アに。』

と言ふ聲がしたと思ふに、三味線を抱へて、色の生白い、顔長な、背の高い、繻珍の帯をだらしなく後に垂らして、見るから厭らしい、二十二三の女が入つて来て、『今晚は、』と會釋しながら向ふ側に坐つた。

『鈴代さん、私は今まで悪口の言はれ通しよ、加勢して頂戴。』

『さう、旦那さん、性が悪うおますの。』

此女は京都生れと見える。

自分が黙つて居るので、

『一つ盃、戴きまほう。』

盃を投げて遣つた。

『酷い旦那さん。』とぢろりと顔を見て、『一つ弾きまほか。』

と三絃を取直した。

『止せ、止せ、田舎酌婦の三絃なんぞ聞いたつて仕方があるものか。』

『だつても……一つ。』

『止せ、止せと言ふに……それより悪口でも言つた方が増しだ。』

惜しさうに、三味線を下に置いたが、また取上げて、

『それではナ、東京のをナ、一つ聞かせてお呉れやす？』

自分は黙つたまゝ、傍の冷えた盃の酒をぐいと飲干す。

『聞かせてお呉れやす。』

『一つ、本當に聞かせて下さいよ。あまり淋しいぢやありませんか。』

と他の一人も迫つた。

猶、自分は相手にせぬので、鈴代と言ふ酌婦は、三味線を取つて、今京都で流行るといふフィットサ節をベコ〜と弾き出した。いや、彼等はお客を其方除そつろけの、喧しく騒ぎ始めて、都々逸を遣る、端唄を遣る、止めろと言つても却々言ふことを聞かぬ。果ては益々興に乗り出して、『そんなこと言ふたとて、陽氣な氣ぢやもの』といふ節を無闇矢鱈に、殆ど耳も聾するばかり。

隙を見て、

『お園さんは何うした？』

『さう〜お園さん、先刻から懂れて居らつしやるのよ。さうでしたね！』と自分の顔を見て厭に笑つて、

『お園さん！』と高く呼んだ。

お園は呼ばれて、靜かに入つて來た。其の愛らしい素振、その無邪氣なる姿、これを此の二人に比べたなら、實にかうも違ふものかと思はれる。渠は靜に鈴代の陰に座を占めたが、じろ〜と見られるを眩いやうにすぐ低頭く。

『お園さん、先刻から貴女のことばかり仰つてよ、傍に行つて、お酌して御上げなさいナ。』とお雪は押す。

『だつて、私のやうなものナ。』

『好いのだと、貴女が好いのだと……。』

『だって、私のやうなものはナ、……何もよう出来まへんわナ。』

『まア、お酌してお上げよ。』

自分は愈々可憐に思つたので、其儘、盃を出す。お園は恐々さうに注ぐ。ぐいと飲干して、今度はお園に差すと、

『私はいけまへんわ。』

と盃を後に遣る。

『まア、一盃。』

と自分は強ひて注がせて、ちつと其顔を見成つた。

飲んで、騒いで、遂に酔潰されて了つたが、ふと眼を開くと、先刻の酌婦共はもう影も形も無く、残肴狼藉なる杯盤は既に取片附られて、洋燈が薄暗く點つて居る。喧しい奴等、とうとう歸つたなと思つて、またとろくとすると、今度は『旦那さん、旦那さん、』と言つて、揺つて起すものがある。酔眼朦朧として、見ると、白い顔、美しい眼、細い手、愛らしい姿——確にお園。』

五

何うでせう。私の夫の情婦、今、死なうとして居る少女とは、そのお園のことで御座います相で。夫は其後の事をも詳しく私に話して聞かせました。夫は其の翌日、月の瀬に行つたさうで御座います。歸途には上野に出るつもりで、旅鞆まで携へて參つた相ですが、お園や、酌婦や、海屋といふ旅亭のことをその車夫から詳しく聞きました相で。それは、何でも桃香野とか申す處からの歸路、晝餐をつかつた旅店に、素人では無い二十七八のあやしげな女が居りまして、孑然と淋しさに給仕に侍りながら、島ヶ原の海屋の酌婦共の悪口を申しますから、あれは何か知らぬかと車夫に聞きますと、車夫は得意になりまして、私もあの女が彼處に、あんな山の中に一人孑然として居るとは吃驚して了つた。あれは、上野町で非常に鳴らした藝妓で、藝に懸けては何一つ知つて居ないものは無い位。去年の春から夏にかけて、島ヶ原の海屋にも五六ヶ月居たことがありますが、それは今の居る酌婦などはとても相手にも何にもなりや爲ませんとの話。道理で、あの女は頻りに、海屋の酌婦の藝無しを罵つて居たと夫も合槌を打ちながら、あれも男を泣かした末路だらうなどと戯談半分に申しますと、いや、あの女などはさうでも無いが、今の、あの、旦那も昨夜お泊りだから御承知だらうが、その海屋の鈴代、お雪などはそれは罪作りですわ。鈴代などは、この直き近所に田川と申す村がありますが、その造酒家の旦那、子供の五人も居るのを騙して、久しく其家に妾ともつかず客分ともつかず入り込んで居たですが、何うも面白くないので、近頃また海屋に歸つて来て、あゝやつて客を騙して居るのですわ。あんなものには碌なこと

はありませんと車夫も酷く罵つて居つたとのことです。夫がお園の生立から境遇、詳しい事を探つたのも、實は此の車夫からで、聞くとお園は名張生れ、随分可成の家に生ひ立ちましたが、不幸福に、父親が悪い、兄が悪い、親類が悪い、母親一人苦勞に苦勞を重ねた後、とうとう家資分散の悲しい境に沈み、其揚句、父親は急病で死ぬ、兄は布哇に出稼に行く。後で、母親はいろく心配の結果、氣病といふ風で、一昨年秋とか、とうとうあの世の人となつて了つた。一人残されたお園は伯父の家に引取られたが、この伯父がまた悪い人で、其處にも落着いては居られず、一人の姉がこの島ヶ原の百姓に嫁いで居るのを便つて、遂々この二月から海屋の仲居に奉公に出たですが、あれが一年も経つて、鈴代やお雪のやうになるかと思ふと、實に可哀想でならぬと語つたさうです。夫は、これを聞いては、もう眞直に上野に向ふことが出来なかつたので、そのまゝ島ヶ原へ引返して參つたので御座います。

夫はそれから三日島ヶ原の汚い旅店を離れることが出来ませんでした。夫は詳しいことを語りました。その無邪氣の少女に對する愛情、憐愍、それからその頼る所なき少女が、夫の熱情に促されて、極力それに縋らうとした態度、ことに、夜にさへなると、何時も嵐のやうに起るその馬鹿騒ぎ、この巴渦の中に、この可憐の少女を捨てゝは、何うしても去るに忍びなかつたとの事でした。皆様は夫の其旅から歸つた時、時計を旅店に忘れて來たのをお忘れはなさるまい。あれは忘れたのではなく、金が盡きたが爲め、旅店に頼んで、質屋に入れたので御座いますさうで。で、夫は思ひも懸けぬ運命に支配

されて、曾ては皮肉をも云ひ、罵詈をも極めたお雪、鈴代などの下劣の女に白い齒を出して笑はれるのにも頓着せず、暗い一室に三日を送りましたが、其中には時計の金も盡きて了ひ、旅店でも相手に爲なくなるといふ有様、最後の日が實に辛かつたとのことで御座いました。もう、何うしても金が無い、それに、公の用もある身の、さう何時までも滞留して居る譯には行かぬ。お園にも其旨話して、また東京にでも來たくなつたら、言つて來るが好いと申して、午後の十時の汽車で發つことに致しました。いかにしても別るゝに忍びん。あのやうな女の中に、この無邪氣な少女を捨てゝ去るとは何たる無情のこと。もう其の時は充分盲目の戀愛に墮ちて居りますので、残念で、残念で仕方が無い。酒を飲まうと思つても、もう汽車賃より他に、取つて置いた金は無いので、それも出來ず、いつそ十時まで寝やうと決心して、夜着を引被つて横になつたさうです。其時が三時、四時になると、もう酌婦共が眞白に白粉を點けて、衣服も美しいのと着改へ、フラシテンの紫の肩掛など爲て、頻りに室を出たり入つたりして居る。室には、客が二組も三組も入つて、隣の室ではもう酒が出た様子。それに、主婦がお園に何か申したと見えて、お園はふつゝり夫の室に入つて參りません。夫は、眠やうとしても、何うしても眼が冴えて、頭腦が痛んで眠られぬ。生れて始めて、紙衣になつた大盡の無念さを骨も徹るばかりに覺えた相で、其の笑ふ聲、語る聲、ことに、お園が其室に出て居る氣勢を聞くと、居ても立つても居られぬやうな氣が爲る。今でさへ、この通り、何うして夜になつてあの騒ぎをぢつとして聞いて十時まで待つて居



られやう。ふと、午後四時半に龜山行の汽車のあることを思出して、まよよ、此處に居るよりは、停車場の寒い暗いプラットホームの方が増しだ！と突然夜着を蹴立て、恐ろしい權幕で、戸外に出て時間を聞くと、丁度其刻限に十分前、裏から捷路を行けば間に合ふと言ふので、急いで靴を穿いた相です。酌婦共は夜の十時と聞いたのを、かう早く自暴に支度を爲るのを見て、呆氣に取られて立つて居る。夫は急いで自から旅靴を下けて出やうとすると、旅亭の老婦は流石にこれを見兼ねて、お園！お園！と呼んで、これを停車場まで持つて行つて上げよと命じた。お園は平常着に、紫の前垂を爲たまい、帯をも締めずに、臺所に働いて居たが、それを聞いて飛んで出て、其の整はぬ扮装にも頓着せず、夫の手から重い旅靴を取つて、其儘見送つて参りました。夫は男で足が早い、それに、汽車に間に合はんではと思ふものですから、急いで、旅店の裏口から坂へと登る。お園も息喘き跟いて参りましたさうですが、夫が停車場近くに行つて振返りました時には、もう後に半町ほども後れて、何うしたのか其の重い旅靴を片脇に抱へて、頭を傾けて、肩で呼吸して、さもく太儀さうに緩々歩いて参りましたのとことです。かう語つて來て、夫が申しましたには、『お前は私が歸つた時、旅靴を持上げやうとして、雙方の手提の環が脱れたのを覚えて居るだらう。お前が、吃驚して、あれ、こんなにと言つた時、私の胸にはお園のことが烈しく思ひ出されたのだ。何故と言ふと、その送つて來た時も、その手提の環が雙方脱れたので、抱へて喘ぎく停車場に入つて來たお園は、旦那さん、こんなになつてと、非常に悪い事でも爲たやうに、其離れた手提の革を私に渡した……と、すぐ切符を切り出す、碌々暇を告げる間もなく、線路を渡つて向ふ側に行く……續いて、汽車、窓から見ると、お園は可哀想に、切符受取所の柵に凭れて、泣かぬばかりにして此方を見送つて居た。顔を出して、別を告げる……と、……もう汽車は回轉。——あゝ、こんなことを話すのは、實に辛い。けれど、妻ぢや。同情して、よく聞いて呉れ。』

『東京には、何うして來たのですの？』

『己が呼んだのだ。思ひ出せば、思ひ出すほど、可哀想で、夕暮になると、あゝまたお園はあの馬鹿騒ぎの中に交つて、一步一步墮落の道に近づきつゝあるのだ！と其景が眼の前に見えて堪らないやうな氣がする。けれど、この二月目に、お園から情の迫つた手簡が來なかつたならば、時の力が次第にこの私の傷痕を醫して、小やかな痕を留める位に過ぎなかつたであらう。けれど、其手紙——其手紙の來たのは昨年四月。それから、絶えず手簡の遣り取りを爲て、あらゆる旅店の負擔、關係などを斷つて、東京に出て來たのは、九月の十五日。』

『貴郎、私にそれが知れぬと思つて……。』

『いや、許して呉れ、實際、己が悪いのだから……。』

私等は少時黙りました。

『で、亡くなりさうだと言ふのは、何うしたんですの？』

『山の中の平和の村に住んで居た身——いや、お園のやうな弱い、優しい性質で、何うして、この喧しい都會の生活に堪へられやう……肺が急に悪くなつて……。』

『肺病?』

『國に居た頃も、少しは其氣が有つたのださうだ。東京に来て、氣候が變つた故か、この正月頃から、少し悪い——と言つて居たが、今月の始めから急に酷く悪くなつて、血を非常に吐く……昨夜も耳盪に五合ほど吐いて、旦那さん、私はもうとても助からぬから……と言つて居た。』

『醫師にも見せて?』

『無論、彼方此方の醫師にも充分診察して貰つて遣つた。けれど、どの醫師も、今月になつてから、もう駄目だ、とても長くはないといふ……。』

『國にも知らせたでせう?』

『島ヶ原の姉には、前に幾度も知らせて遣つたし、今朝も電報を打つて遣つた。けれど、貧しい百姓だから、とても來られないに相違ない。お園が言ふのには、いゝえ、もう、親類などには知らせて下さるな、逢ひたくもありません。旦那さんのお膝下で、死なれるのが嬉しいと……。』

夫の眼には涙が閃いた。

私も何うして同情されずに居られませう。不幸福な生立、不幸福な境遇、それさへ既に私の胸を撈る

やうに覺えられますのに、故郷遠いこの都會の塵の中に、憑る人としては唯々男一人。普通ならば、姉にも逢ひたい、親戚にも逢ひたい、故郷の風景も見たいと言ふのが人情でありますのに、貴郎のお膝下で死なれるのが嬉しいとは、何たる悲しいやさしい言葉でせう。

私は思はず涙が出ました。

硝子窓からは、戸外の風雨の様子が畫のやうに見えて、ザーと降り頻る雨、右往左往に散亂るる紅なる花。——あゝ、春は暮れるのです。

私等は少時沈黙に沈みました。

少時して、『それで、東京では、何うして御置きなすつたの?』

『いや、名張のもので、お園などの知つて居る五十三四の女が丁度中野の製糸場に出て居たので、それを頼んで、一緒に居て貰つた。家は大久保の、二つレールのあるその間位になつて居る處だが、朝の七時から夜の五時までは、その姉さんが工場に行つて不在なので、お園はさびしい、さびしいと言つて居た。本當に、周圍に誰一人知つてる者も無いこの東京に来て、さびしく、所在なく暮して居るのは可哀想だつた。だから姉さんの休暇の取れる時は、取つて貰つて、一所に東京を見物させて遣つたが……。』

私は泣かずには居られません。夫の語つた少女の性情、それはほんのアウトライン丈で御座いますけれど、やさしさとしほらしさは充分に私の胸に呑み込みました。それが——肺病、咯血、一人法

師。

『貴郎、これからすぐ参りませう。』

と私は立上つた。

『行つて呉れるか。』

『え、参りますとも……出来る丈け看病して上げませう。』

『お前が行つて呉れると、どんなに喜ぶか知れん。餘程前から、奥様にお目に懸り度いと言つて居たから、』

私は俵を二輛命じました。長女は近隣に里がありますから、叔母に頼むことにして、一時間の後、二輛の俵は風雨を衝いて、二十騎町の宅を出ました。

## 六

降り頻る風雨、八重の櫻も散りて亂れて、垣に咲き初めし山吹の花のあはれさ、三春の行樂は全く泥土に委して了ふので御座いました。その中を、幌固く、右へ左へと進んで参りましたが、しかもをりをり風の一吹きに、慌たゞしく飛んで来る幾瓣の落花。路の角に行つて曲ると、車夫も饅頭笠を傾けて暫時立留るばかりの大降、前の桐油には霞の打付けるかと思はるゝ雨の脚が夥しく當つて、絶間から見ると、到る處の紅は騒ぎ、到る處の緑は駭いて……。

この幌の内に小さくなつて居た私の胸には、此時、何んなにさまざまの感が往來したでせう。私とはかない女ですもの、假令懺悔とは言へ、謝罪とは申せ、あのやうな事を聞いて、何うして好い心地が致しませう。夫は、この妻あることを忘れ、また、長女のあることをも御考へなさらなかつたと思ふと、實に申しやうのない悔しい情ない心も起る。また、一方から考へて見ましても、苟も文學士と謂はるゝものが、いかに無邪氣な、やさしい美しい女であつたからとて、またいかに其運命が止むを得ぬ自然の成行になつて居たからとて、田舎の旅亭の仲居などに心を移すとは！あまりと言へば、不節操、不見識——と思ふと、胸が灼くやうになりました。

けれど翻つて、この春雨の降り頻る日、故郷遠いこの地に、慰むる人も無く、血を咯く一少女のことを考へますと、また堪らなく悲しくなつて、今はそんなことを考へて居る時ではない。肺病と言へば、もうとても助からぬ命、少女の爲めにも、夫の爲めにも、此の身はあらゆる邪念を去つて、心から同情して、出来る丈け充分に看護して遣らなければならぬ。

それにしても、其少女はいかなる姿でこの身の前に顯るゝであらうか。かう思ふと、今回はそのやさしい美しい姿が、眼前に見えるやうな氣も致しますし、又、瘦せ衰へたあはれなさまが歴々と鮮かに手に取るやうな心地も致しまして、實に、實に、空想は際限がありません。

夫の俤は私の一問ほど隔て、前に軋つて参りますが、私の空想に耽つて居ります間に、いつか路は大久保村に入つて、豪駝師の松の面白い形の蔭には、美しい八重の櫻の爛開みだれさきとある別墅の庭の櫻は雨に濡れて、路を劃る長い黒塀には、夥しく貼せられたる落花、新しい蛇の目の傘を翳した女がふと横町から出て参りましたと思ふと、其が夫の俤に突當らうとして、慌て、左に避けたのを見ました。

躑躅の頃にはよく参つた處、紅い白い鉢植が路に並べられて、兩側には壽司屋、汁粉屋、手輕料理屋、躑躅人形の幟は晩春の風に翻つて、花月巻に董色の袴の幾群、昨年の花時分も、夫に伴れられて、楽しく一日を遊び暮しましたが、今は其節には早いので、若い緑の垣の濡れて淋しく連るばかり。孰れの家もこの大降に戸を閉ぢて、廣い路に、行く人の傘も見えぬ。

始めの鐵道の踏切を越えて、一町ほど。豪駝師の植木の駢ぶ間に、一軒、桶屋の店があつて、半開いた戸からは、主が一生懸命に桶を削つて居るのが見えました。其少し先の細い横町の前で、夫の俤は停まりました。隠れ家は其奥にあるので、山吹の雨に濡れた垣を五六間ほど辿ると、先づ眼に入つたのは、五六圓の屋賃であらうと思はれる貸家造の一棟。新しい家作で、入口の隣の室の障子は、裾から一二分ほどふり込む雨に濡れて居ました。人の訪ふ氣勢に、田舎の老婦の顔がちらりと見えました。何うしたのか、すぐ慌て、引込んで了つて、再び急には出て参りません。大方私の姿が見えたからでせう。夫は、先づ己が入つて見て來るからと言つて、其儘家に上りました。見ると、狭い入口には、齒の磨れ

て穿き悪さうに曲つた足駄や、破れ果てた蝙蝠傘や、古い蛇目傘などがだらし無く置かれてあつて、右の方の棚の上には、縹珍の派手な鼻緒のすがつた兩割と、コールテンの淺黄の吾妻下駄とが並んで居るのが目に着きました。

夫はすぐ出て参つて、私を上へと導きますので。

私の眼には何が映つたでせう。一目見た私は悲しい同情の涙に暮れました。何うでせう、其の少女、其の哀れの不幸福な少女は、淺黄の汚れた蒲團に身を凭せて、私の入つて來たので、垂死の臥床から起上つたので御座います。顔に無限の羞を含みながら、しかし莞爾と笑つて私を見るではありませんか。急に重くなつたのですから、他の肺病の人達のやうに體も左様羸れては居りませぬ、顔の色などは艶々して、成程、美しい、可愛い、優しい娘だといふ考が、すぐ私の胸に上りました。傍に行きますと、

『奥様！』

と辛うじて言つて、『よく、お出でなつて下さつた……うれしう……。』

よく口が聞けぬのでした。其美しい眼には、珠のやうな涙が溢るゝやうに盈ちて、私が参つたのが嬉しいのでせう、喜悅の光が顔に輝いて居りました。

私の胸には、此時、忌はしい夫の情婦！ など、言ふ考は露ばかりも浮びませんでした。人のまことの情、神様のお許すつたまことの愛は、潮のやうに新しい生命を私の全身に與へて呉れましたので、

何うかして此子の病氣を治して上げたい、いゝえ、とても治らぬまでも一度は好くして、戸外位は歩けるやうにして、妹か何ぞのやうに伴れて歩き度いといふ考が簇々と起つて参りました。

『奥様！』

また、莞爾。

『何うだね、少しは快いか。』

夫が慥う訊きますと、

『え、少しは……。』

『無理を爲ずに、寝てたら可いだらう。』

『いゝえ、奥様が来て下さつたので……。』と涙を拭いて、『私は、もう……。』

後を言はうとした時、烈しく起り始めた咳の連続。瞬く間に、顔が火のやうに赤くなりました。脊を摩つて遣りましても、老婦が来て寝させて遣りましても、容易に其の咳嗽は留らうとは致しは爲ません。この咳嗽が長く續くと、結果が恐い咯血と知れて居りますので、何うかしてこれを止めて遣りたいと、皆な心を痛めまして、それ薬、それ水と頻りに介抱して遣りましたが、しかも、何うしても其咳嗽が留りません。果ては、苦しがつて、頻りに身悶を致して居りましたが、傍の耳盥に顔を入れたと思ふより早く、咯血、咯血、凄じく多量の咯血。

繪具のやうな鮮かな紅い血。

これを見ました私は身を削られるやうな思ひが致しました。この妙齡の少女、美しい繊弱い娘——それがこんな紅の血をかう夥しく咯くと思ふと、同情よりは寧ろ人の世の悲惨の極みを味はつたやうな心地が致しまして、見て居るに忍びません。

醫師は宜いのですか？ と夫に囁きますと、夫も狼狽して、『おい、己が脊を摩つて遣るから、醫師を呼んで来い。』と老婦に命じました。老婦はあたふたと、降頻る雨を衝いて、近所の醫師へと走りました。私は、それに代つて、其脊に廻つて、一生懸命に撫で、遣りましたが、咯血はまだ留りませず、お園は苦しさに堪へぬやうに、頻りに身を悶えて居りますので。

その留りましたのは、二十分も経つてから。お園は全く疲労して、力無く頭を枕に當てました。咯いた血は耳盥に二分ばかり、一二合は何うしても御座いませう。苦しがつて、拭いた手巾は紅なる血に染まつたまゝ、臥床の傍に散ばつて、其傍の小説にも一滴、二滴その紅い色が見えました。お園は髪の亂れたのを直す力も無く、呼吸つかひも至極絶えぐくに、壁に向つた其島田鬚はいたく潰れて、根掛のところかぶるぐと戦へて……。

『實際、これでは困りますね。』

少時して、私が小聲で申しますと、

名 張 少 女

『本當に困つて了ふよ。』

と夫も心から困つた顔色。

『幾度もかう咯くのですの。』

『うむ、これで、もう三度、四度になる。實に咯いては堪らんからな。』

『本當ね。』

不圖、私の胸に上つて參つたのは、『おぼろ舟』のお藤のこと。垂死の病床に髪を取上げて紅をさして、捨てられた男を思ひ死に死ぬそのいぢらしさ！ 私は、今、その一齣を現に見やうとは夢にも知らなかつたので、このお園の身になつたら、何んなに悲しからう、情なからう、それでもお藤よりはまだ幸福、かうして皆なに介抱されて……とそれからそれへと想像すると、實に、涙を催さずには居られませんでした。

老婦が歸つて來ると間もなく、醫師が遣つて來ましたが、これは代診で、二十七八の魚子の三つ紋附をだらし無く着た、厭にやけ男で、種々容體を聞いた後、血を検し、呼吸を検し、猶、彼方此方を診察し、咳嗽の時の應急の手段などを今更めかしう教へたまふ、他に、何うも爲やうが無いと申して席を立つのでした。入口でそつと聞きますと、あゝ度々血を多量に咯くやうでは、もうとても駄目だ。急性ですから、御注意なさいとの絶望の言葉。

姉さんから電報の返事が有つたかと醫師を送り出してから、夫が思ひ出して老婦に聞くと、老婦はさうこの騒ぎですつかり忘れて居ましたと直ちに取出したのは、一通の電報。見ると、それには、『ユカレヌ、バンジタノム』と書いてありました。

## 七

想像して下さいませ、其夜、とう／＼呼吸を引取りました。

あゝ、その垂死病床の光景。私は考へても涙が出ます。いゝえ、其時のさまを何うして後まで思はずに居られませう。私は實際、愛した妹の最後に出會つたやうな氣が致しましたので、もう臨終！ と聞いた時には、全く取亂して了ひました。

あれは其夜の二時。日のある中にも、また二三度、強い、酷い咳嗽がありまして、多量の血を咯きましたが、其度毎に、それは驚くほど衰弱して、日の暮れる頃には、もう餘程容子が悪くなつて參りました。體に悪いと思ひますから、話を爲たがりますのをも強ひて抑へるやうに、やうにと致して居りましたが、もう何うせ、死ぬのだからと申して、後には色々の事を語りました。肺病ほど正氣で居るものはない相ですが、實際その言葉のたしかでしたこと、私にはかへす／＼も禮を述べ、實に奥様がお出下すつて、此位嬉しいことは無い、奥様にお目に懸れずに死ぬのかと思つて、昨日までそれを此上ない残念

に思つて居りましたのに……かうして御世話して戴かれるのは、何の御縁やら、……奥様、もう死ぬのですから、妹にするのを許して下さいと言はれました時には、私は何うしてこんなやさしい美しい心根を持つて居る少女を、あの世に遣らなければならぬかと、したゝかに泣きました。女學校に參つて、随分學問を爲さつた方にも、こんな優しい心を持つてお居での女子は尠いのに、教育と申せば、高等小學、何も知らぬ田舎に育つて、悪い苦しい境遇にも感化されず、かうしたしほらしい心を持つて居るとは、大方神様の思ひ子で御座いませう。そして神様はこの辛い、汚い世の中に留めて置くのを可哀想に思召して、其のお膝元に御招きになるのでせう。かうと知つたなら、こんな清い、美しい、やさしい少女と知つたなら、夫よりは私が先に、その不幸福を護つて上げたかつたものを……。いゝえ、もつと早く相知つて、いろ／＼氣の合つた話を爲たり、一緒に東京を歩いたりしたかつたものを。始めて知つた今、それが垂死の病床——私は何うして泣かずに……。

お園は私の顔を見成りました。

『奥様、許して……妹に、妹に、』

私は只點頭きました。

『許して、妹にして下さつて……。』

と、晴々しい其顔色、莞爾笑つたその美しさ！『來世は……姉さんと呼ばして下はれ！』かう言つて、

私の手を堅く握りました。

女は女同士、男の知らぬやさしさのあるもの、殊に、臨終の悲哀さへ加はつて居るのでありますものを。お園は實際、私に縋つて死んだので御座います。

それから二時間ほど經つて、段々容態が悪くなつて參りました。遺言は無いかと聞きましても、何も無い、かうして御二人に介抱して戴いて死にますれば、もう何も思ひ残す所が無い。只、私の友達、名張に居りまするお貞といふ娘、これは私とは異つて、大きい地主の一人子で御座いますけれど、交情の好い幼馴染、私が死んだと聞きましたら、嘸悲しんで泣いて呉れることでせう。もし、ひよつとかして、東京に出て參つて、お二人にお目に懸ることがありましたら、私のことを話して下さい、逢ひ度いのはお貞さん……と言つて、また烈しい咳嗽に咽びました。

呼吸を引取つたのは、夜半の二時。考へると其時のさまが歴々と眼に見えるやうで御座います。戸外には風雨がまだ止まず、をり／＼裏の雨戸にざアと吹付ける音は、何とも言へぬ淋しさをこの周圍に與へました。家の六疊には三分の洋燈が薄暗く點いて居て、病人の枕邊に集つた三人の姿は黒くその覺束ない光を隈取つて居ます。病人は呼吸は段々弱く低く、それが丁度螺旋が緩んで止り際になつた時計のやうに、絶々に、しかも規則正しくこの一室に聞えて居る。私等三人は、死の神のさびしい嚴かな心に支配されて、誰一人口を開かうとするものなく、只ちつと、その少女の顔に見入りました。レナウの

詩に、『死の慰藉』と申す詩が御座います。

淋しさの極み、美しさの極み、

死の影ぞ、今來る。

人の世の若草、

かくて萎むとも怨むな、

とはの世の慰藉、とはの戀の生命。

こは夫も日頃、愛誦して居りまする句、これが其時私の胸にひしと思ひ出されました。『かくて萎むとも怨むな』あゝ、お園は人の世の若草です。

『あゝ、もう呼吸が……』

恐ろしい寂寞を破つて放たれたる老婦のこの言葉、私も夫もはつとして顔を其傍に押寄せました。

成程呼吸は絶え、驚いて右の手の脈を見ると、もうこれも途切れ／＼になつて居ります。

『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！』

と老婦はけた／＼ましく唱名して、傍の小刷毛に水をふくませながら、それで、頻りに口唇を濡して遣りました。一分、二分、三分の後には、穩に臨終。

死の神は贄を得て歸りました。

『あゝ、遂々佛様の前に行かしたか……南無阿彌陀佛、々々々々、やさしい、しとやかな好い娘で御座いましたに、ナア、』と顔の歪んだのを直して、『旦那様、口を濡して遣つて下さいまし、この娘は、何んなに旦那様思ひでしたらう。私が毎日工場から歸つて來るのを待たびてな、今日も旦那様がお出なさらなかつたと、言ひ續けに言つて居つたでな。それに、旦那様がお見えになると、それは何んなに喜んだでせう。歸ると言ふのを厭がつて、帽子を隠したり何かして、跡では涙を零して居つたでなあ、淋しいかつたんだらう、知る人も居ないこの廣い東京に來て、力と頼むのは旦那さんばかり。ほんに可哀想な娘ぢやわ……南無阿彌陀佛々々々々々々。』また、唱名して、『來世は好い處に生れて來なはれ！』と、今まで碌に口も聞き得なかつた老婦は頻りに口説きつゝ、涙を零すのでした。

これも道理、死の神の嚴なる力に撲たれては、誰とて、心の平生の調子を保つて居ることが出來ませうぞ。

前の植木屋の下男を頼んで、先刻に醫師に走つて貰ひましたが、少時すると、今度は先生が參つて、形ばかりの脈を取つたり何かして、頻りに首を傾けて居りました。けれど、死床に醫師ほど不釣合な間の抜けた者は御座いません。あの人達の頭腦は全く清い情を失つて、死の神のさびしい嚴かな力にさへ觸れることも出來なくなつて居るのですものを。

醫師の歸つての後、私は嘆く老婦を手傳ひながら、床の間の前に遺骸を移し、蘭の繪の畫いてある古



屏風を逆に立て廻し、小机の上に、香爐を据ゑて、線香の煙を細々と手向けました。かくて、私等三人は其一間に坐つたまゝ、淋しい悲しい通夜を致しましたので。

老婦は思ひ出の悲しさに堪へぬので御座いませう、絶えず溢るゝ涙を拭ひながら、頻りに佛のことを語りました。國に居ります頃は、極く近所でした相でして、お園の母親などは、随分懇意にも爲ましたし、放蕩の夫を有てるその境遇にもよく同情して遣りました相で。『其頃、お園はまだ七歳か八歳、それは可愛い子で、やさしい、人懐っこい、直き眼に涙を溜める弱い性質でした。よく、抱いて遣つたり、負つて遣つたり、時には家に伴れて一緒に寐たことなども御座いました。それから十二三、十四位の時まで知つて居りますが、成長くなればなる程それは好い娘になつて、あの呼吸を引取りまする前に申したお貞といふ娘と、所でも評判の容貌好になるだらうと誰も皆目を着けて居りました。私其頃から、不幸福で、東京に出て参り、其後の事は存じませんが、十七の歳に母親が亡くなり、引取つた伯父がまた悪人で御座いまして、容貌の好いのを種に、ある老人の妾と爲やうとした相で御座います。』

老婦は少時途絶えて、

『それが——かうして、佛にならうとは、……實に娑婆は辛う御ますわナ。』  
と申しました。

私は深く少女の短い一生を思ひ耽りました。繊弱い、やさしい、風雨にも堪へぬやうな身で、この辛

い苦しい半生、——戸外には、風雨が漸く晴れて、今は雨滴のをり／＼軒に落つる音ばかり。室の洋燈は暗く、暗く、逆屏風の間からは、蒲團の上の遺骸、線香の煙が絶えざること縷のやうに。

## 八

翌日は快晴。

夫と老婦とはいろ／＼葬式のことを心配して、其日は彼方此方と出て参りました。私は長女のことか氣に懸りますので、一先、宅に歸りましたが、午後から出直して、いろ／＼其用事やら何やらを致しました。讀經を致したのは大久保村の松蓮寺とか申す寺の住職で御座いますが、まだ、至極若い僧侶で、昨年とか先師が歿つて、其後に直つたばかり、年がまだ二十五だとか申すことで御座いました。ですから、其聲も若々しく、何處となく無常に伴はぬやうな心地が致しました。けれどお園の若い靈は却つてこの若僧の讀經に一倍すぐれて成佛するであらうと思ひました。この松蓮寺と申す寺は大久保の西隅の一寸小高い處にありまして、これも私の女友、若くつて歿つた方が埋まつて御座いますので、私は一度参つて、よく其の光景を知つて居ます。路から、かう一段高い、十五六階の石階が御座いまして、其上に山門、奥に鐘樓が見えて、大きいしだれ櫻が、通る人は誰でも振り返らずには行かれぬといふやうに、美しく見事に咲いて居りました。今も屹度満開で御座いませう。

續經が済んで、座に戻つた時、私は言葉を開きました。

『御門の櫻はもう満開で御座いませうね。』

『え、二三日前、盛でしたが、この雨で、すっかり駄目になつて了ひました。』

『あれは、餘程古木で御座いますのねえ。』

『え、四代前の住職が、非常に櫻が好きでして……却々、詩歌なども致しまして、當時の詩人國學者なども交際致したものですから、其の會筵の卷などが今日でも残つて居ります。昔は寺中櫻で御座いました相で、大久保の名所の一つにされて、瓢箪などを携へて來た人なども有つた相です。今では……もう駄目で御座いますけれど、』

『それでも櫻が多いですな。私は非常に見事に思ひました。』  
と夫が口を挿入しました。

『いゝえ、今のは若木ばかりで、ねつから駄目で御座います。けれど、先住と申すのが、折角櫻で名高かつたのを此まゝに爲て了ふのは惜しいと申して、非常に植ゑましたものですから……けれど、此東京近傍は地味が櫻に好いと見えまして、ぢきに大きくなるやうで御座います。』

『本當に、左様ですな。此頃の櫻の多くなりましたこと。東京は丸で櫻と言つても好い位です。』  
『本當に……』

と答へて、若僧は茶を啜りました。

『貴僧はお釋い頃から、あの寺に御居でよしたか。』

『え、七歳の時から、先住の世話になりました、二十歳から麻布の大學林に參つて、漸く昨年卒業致しましたばかり。これから、先住の手傳ひを爲て、少しは樂を爲せて遣らうと存じましたが、ふつと急に亡くなりました。』

『御病氣は？』

『昔の卒中と申すもので……。』

『それは、何うも……。』

若僧と夫とは猶色々世間話を致して居りました。私は、其傍で、白木綿を縫つて笈摺を拵へましたり、頭陀袋を作つたり致して居ましたが、若い住職は種々、墓場のことやら、時刻やらの打合せをして、それでは明日の朝八時に又參りまするほどに……と言置いて歸つて行きました。

一度は火葬にして、骨を故郷に送らうかとの説もありましたが、國にもさして篤い親戚が居るではないし、佛もお二人の介抱を戴いて死なれるのが何より満足だと申して居りましたから、此地に葬つて、時々なりと御花を手向けて戴く方が……と老婦も申しますので、其儘葬ることに致しました。死亡届も滞りなく済み、葬儀社にも色々打合せをして、湯灌を爲たのが、其日の夕暮。顔も身體もさう瘦せも致し

ませず、莞爾と笑を含んで、さも楽しい國に参つたかのやう。髪は島田の破れたのを、束髪に私が束ねて、白い笈摺に、白い頭陀袋、六道の辻の錢を忘れぬやうにと、老婦が注意して呉れます中に、私は私の董の簪を頭から取つて入れました。あゝ、もうこれでお別、「來世は本當にやさしい妹になつて生れて来て……。」と思ひますと、涙は烈しく私の胸を衝いて参りました。

其夜は同じ通夜、同じ物語。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

翌朝も快晴でした。

八時には、葬儀社が来る、白い提燈が来る、駕籠が来る、私夫婦の心ばかりの花が一對、それには山吹と躑躅と櫻とが交ぜて作つて御座いました。十分ほど後れて、寺の若僧が来て形ばかりの御經を上げましたが、それが済むと、法被の上に白い衣を着たあらくれ人足が三人四人どしどしと家の上つて、棺を戸外に運び出すので御座いました。

會葬者と申しては、夫と私と老婦と、他に前の植木屋の男一人、淋しい葬式と申しても、こんな淋しい葬式が御座いませうか。

位牌は夫が持ちました。

寺は其處からしても遠くも御座いません。大通を右に五町ほど。それから山吹の咲亂れて居る垣を左に、猶三町ほど参りますと、其處に田舎町の通が東から西へと通つて居りまして、八百屋の車などが二つ三つ過ぎて行くのを見ました。其町の西の盡頭から、少し右に入つた處が其寺。成程、門の上の糸櫻は既に全く色があせて、風にちらちらと散り始めて居りました。

森閑とした本堂、如來の佛像の手を合せて端坐せる傍の燭臺には、少年の僧が今蠟燭を點けて廻つて居りまして、棺臺に置かれたのはその白い棺。僧は右に二人、左に二人、住職は中央に位置を占めて、やがて鳴りましたのはその鐘の音。

悲しい讀經の聲。

想像して下さりませ、其の廣い控所には、私等三人。鐘、讀經の聲は廣い高い天井に淋しく聞えて、本殿の前に立懸けられたる白い提燈。何んなに私が色々な事を考へましたらう、何んなに悲しい淋しい感に撲たれましたらう。夫は？ と見ると、端然と坐つたまゝ、老婦は悲しいと見えて、頻りに衣の袖口を引出しては眼を押へて居りました。

讀經が済み、引導が済み、續いて焼香。それも済みますると、愈々土に葬らなければならぬのです。土から土、人間は何うせ一度は死ななければならぬ身、考へれば悲しいことも何も御座いませぬのです。けれど、けれど、けれど……。

墓として定められたる地は、西の一隅。丁度その近くが竹藪で、其中には櫻の若いのが五六株咲き亂

れて居りました。私の女友の墓とは脊中合せ、ふと見ると、其の女友の墓には近く詣づる人があつたと見えて、櫛の新しいのが山のやうに手向けられてありました。夫の後に跟いて参りますと、赤土の今掘つたのが堆かく積まれて、其傍には、穴掘人足の土まみれに爲つたのが鋤を舍いて、茫然して立つて居ります。

運んで来た棺を受取ると、もうすぐ其墳の中に納めますので、私等の唱名して土塊を投入れる暇もなく、人足は急いで墳を築き立てました。

私等夫婦の心ばかりの花一對、夫の書いた墓標の後には、白張の提燈。線香を手向け、水を手向け、そして私等は最後の別を告げるので。

日本國中の小さい國、月の瀬の梅の溪の上幾里、穩かなる名張の町に生れて、やさしい、繊弱い、美しい心と姿とを有つた少女は、生年十九歳、この遠い都の、郊外の、花の多い寺に葬られたので御座います。

九

夫と私と唯二人、二十騎町の宅の二階はしんとして、暮れたる春の後さびしく、硝子窓からは隣の籬の山吹、其向ふに、繁り合へる竹叢——室内には、安樂椅子、書棚、書箱、火鉢の火は灰に白く、鐵瓶

の湯は冷えて、茶器茶盆は亂れたまゝ、遠くの市の聲は蜂の唸聲のやうに。

私は今、墓参りから歸つて來たので、

『お詣りして來て呉れたか。』

『え。』

言葉は唯これぎり、見ると、夫の坐つた机の前には、レナウの詩集が繻かれて、今まで深い思に沈んで居たのがすぐ解る。

『可哀想なことを爲た。』

『本當にね……。』

『それにしても、お前には……。』

『いゝえ、もう、そんなことは仰有いますな……。私は、今日、途中に、躑躅の綺麗なのを賣つて居りましたから、それを取つて、上げて参りました。』

『實に、考へると、堪らんよ。』

『本當に……。』

私も言葉を留めました。ふと胸に上つて参つたのは、レナウの詩。實際、私はこの二日三日の中に、レナウの詩と同じ感を此の實際の世に経験しましたので、私は悲しい一篇の詩を繻いたので御座いま